学部卒業論文

『十二夜』論
―人生という舞台における悲劇性と喜劇性―

山岸　史絵

序論

『十二夜』（*Twelfth Night*）は、ヴァイオラ（Viola）、オーシーノウ公爵（Orsino）、オリヴィア嬢（Olivia）の奇妙な三角関係の恋物語と、サー・トービー（Sir Toby）、サー・アンドルー（Sir Andrew）、道化フェステ（Feste）が馬鹿騒ぎを演じる滑稽な物語のダブルプロットからなるロマンティックコメディであり、シェイクスピア（William Shakespeare）喜劇の最高傑作のひとつと言える。作品の題名である『十二夜』は、クリスマスから数えて 12 日目の夜に、キリストの顕現と東方の三博士がその誕生を祝うために訪問した日を祝う祝祭のことである[1]。エリザベス朝時代、宮廷では歌や喜劇が盛大に催され、この時ばかりは無礼講で皆がばか騒ぎに参加したと考えられる。しかし『十二夜』という作品は祝祭的な喜劇でありながら、笑いの要素だけでなく、不安感や哀感をも包含している。更には、哀感が作品全体の雰囲気を支配しているとさえ思える。

この喜劇に漂う哀感には不思議な魅力がある。喜劇と哀感という、対立しつつ互いを包摂しあうふたつの要素の内に、何らかのメッセージを読み取れるのではないかとわたしは考える。特に、戯曲を読んでも、また実際の上演を見ても、美しいフェステの歌が喜劇性と哀感の相互作用を高めているように思われ、印象に残る。本論文では、主にこの哀感とフェステの歌という要素を軸として、物語の哀感が何に起因し、どのような意味を持つのかを考察していきたい。

第 1 章ではメイン・プロットとなるヴァイオラの忍ぶる恋について論じ、第 2 章ではもうひとつのプロットからマルヴォーリオいじめの喜劇的要素と哀感について、ヴァイオラとの比較を交えながら論じる。そして、第 3 章では、道化フェステの役割と、フェステが作品にもたらす祝祭性について論じる。最後に、この物語が悲劇性と喜劇性の両面を持つ意味を考察し、シェイクスピアが持つ人生観として結論づけたい。

第１章　ヴァイオラの恋に見られる悲哀

作品に哀感をもたらす大きな要因として、まずはヴァイオラの忍ぶる恋が挙げられる。ヴァイオラは、異国イリリア（Illyria）にて性別を偽り、少年シザーリオとしてオーシーノウ公爵に仕え、公爵とオリヴィア嬢の恋の仲立ちを務める。すべての謎が明らかになる大団円を迎えるまでのヴァイオラは孤独な存在であり、その姿には喜劇のヒロインらしからぬ哀愁が見て取れる。

ヴァイオラの恋心は変装によってどのように制限され、どのような哀感を生み出すのか。フェステの歌う“O mistress mime”と“Come away death”の二つの歌に漂う哀感はどのような意味を持つのか。本章ではこれらを論じたい。

ヴァイオラが公爵への恋心を秘めなくてはならなかった理由として、まず、男装とそれによって生じた奇妙な三角関係という特殊な状況が挙げられる。男装によって性別を偽っていること、そして小姓として主人の恋の手助けをしなくてはならないという状況が、ヴァイオラが恋を秘める直接の原因となっている。そもそも、ヴァイオラが男装をしたのは公爵の小姓として仕えるためである。これは女性であるヴァイオラが異国で自分自身の身を守るための方法であったが、結果的にそれに縛られ公爵への恋心を言い出せなくなってしまうのである。ヴァイオラは恋を忍ぶことのつらさを自分の妹の恋の物語に託してこのように述べている。

> She never told her love,
> But let concealment like a worm i’th’ bud
> Feed on her damask cheek. She pined in thought,
> And with a green and yellow melancholy
> She sat like Patience on a monument,
> Smiling at grief. Was not this love indeed?　（2.4.110-15）[2]

> 妹は決して自らの恋を語らず、胸に秘めて、つぼみに隠れた虫のような物想いにバラの頬を蝕ませたのでした。悩みやつれ、憂いに青ざめて石碑の上の忍耐の女神の像のように悲しみに微笑みかけていました。これこそが真実の愛ではないでしょうか。

これは物思いに青ざめ、恋心を打ち明けられない悲しみと孤独に耐えるヴァイオラの

辛さが最もよくうかがい知れる言葉である。恋を秘めるこのヴァイオラの姿は多くの観客の同情を誘うであろう。

ヴァイオラの男装は自らの恋心に制限を作り出すばかりか、奇妙な三角関係の原因ともなってしまう。オリヴィアがヴァイオラに恋をして複雑な三角関係が生じたとき、ヴァイオラが、シザーリオという仮の姿の自分について“I, poor monster”「私は、哀れな化物」（2.2.34）と言っているように、すべての事実が明らかになり大団円を迎えるまでのヴァイオラは男装に縛られ恋を成就させることのできない異質で孤独な存在であり、ヴァイオラがその状況を自覚すればするほど、そこには憂いと悲しみが漂うのである。そして、このヴァイオラの仮の姿は周りの人間を欺くだけでなく、彼女自身の恋の障害となってしまうのだ。

ヴァイオラが恋を忍ぶことになったもうひとつの理由は、彼女の潜在意識にもあると考えられる。「自制の美学」とも評されるように[3]、ヴァイオラの忍ぶ恋は美徳であるという考え方もできる。しかし、それは必ずしもヴァイオラの長所ではなく、むしろ欠点と言ってよい。なぜならば、ヴァイオラが恋を秘めるのは、男装という外的な障害のためばかりでなく、恋を秘めることに対するヴァイオラの陶酔や自己欺瞞という、内面が作り出した障害によるところがあるからだ。三角関係により、事態が複雑になったのを自覚したヴァイオラは“O time, thou must untangle this, not I. / It is too hard a knot for me t’untie”「ああ時よ、これをほぐすのはお前の役目、わたしではない。／かたくもつれて、わたしにはほどけないのだから」（2.240-41）といい、自らの男装によって生じた三角関係の解消を「時」に託している。この台詞からは、ヴァイオラが恋の悲しみに陶酔する姿と、恋心を言い出せないことを、男装のせいではなく運命によるものだと考える自己欺瞞や責任転嫁が表れている。ヴァイオラは恋を忍ぶことによる自己欺瞞や陶酔によって自身の恋に制限を作り、きっかけを逃してしまっているのだ。

男装とそれにより生じる恋の制限は『十二夜』という物語全体に哀感をもたらしている。なぜ恋のきっかけを逃してしまうことが哀感につながるのだろうか。運命や適切な「時」を逃さずに恋を成就させることの重要さは、フェステの歌 “O mistress mine” が説明している。

O mistress mine, where are you roaming?
O stay and hear, your truelove’s coming,
That can sing both high and low.

Trip no further, pretty sweeting;
Journeys end in lovers meeting,
Every wise man's son doth know.

What is love?'Tis not hereafter,
Present mirth hath present laughter.
What's to come is still unsure,
In delay there lies no plenty,
Then come kiss me, Sweet and twenty.
Youth's a stuff will not endure.（2.3.38-51）

ねえ、僕のかわいい人、どこへ行くの。
待って、聴いて。君の本当の恋人、
　高くも低くも上手に歌えるその恋人はやってくる。
もうどこへも行かないで、かわいい人。
旅の終わりに恋人たちが出会うことは、
　馬鹿でも知っているのだから。

恋って何だろう。今この時だけのもの。
今日の喜びが今日の笑顔なんだ。
　明日のことは分からないから、
ぐずぐずしていたってだめなんだ。
だからキスしておくれ、かわいい人。
　若い時は一度きり、長くは続かないのだから。

フェステは今を生き、恋を楽しむようにと恋人に向かって歌っている。この歌には今生きているときの確かさと、未来の不確かさやそれへの不信感が表れている。それを口実に恋人を口説くこの歌は、恋を成就させることの重要さを歌うと同時に、好機を逃すことへの恐れを歌うことで、ヴァイオラの忍ぶ恋のもつ危うさについて述べていると考えられる。この歌はサブ・プロットにおけるサー・トービーたちのばか騒ぎの合間に歌われている。しかし観客の脳裏には、先ほど挙げた、ヴァイオラが自らの恋を「時」に託した台詞が浮かぶはずである。ヴァイオラは複雑に絡まってしまった三

角関係を運命のなりゆきにまかせようと言うのだが、この歌は、恋路に迷い、恋を阻む障害を克服しようとせずに、自らの運命に対する責任を放棄してしまっているヴァイオラの愚かさを暴いているように取れる。恋は今だけのものであり、若さは永遠には続かないものという見方から、恋を秘めることで若さや時を無駄にするのはやめよ、と説いているかのようである。このようなメッセージを込めることで、ヴァイオラの恋の在り方の中に不安や焦燥感を見いだしている歌なのだと考えることができる。

また、ヴァイオラの忍ぶ恋の中に観客が哀感を感じてしまうのは、想いを伝えられないことのやるせなさや焦燥感以上に、死に向かうような絶望感をも、この状況が包含しているからでもある。この絶望感は、フェステの歌う歌に最もよく表されている。

Come away, come away death,
And in sad cypress let me be laid.
Fie away, fie away breath,
I am slain by a fair cruel maid.
My shroud of white, stuck all with yew,
O prepare it.
My part of death no one so true
Did share it.　(2.4.51-58)

来たれ、来たれ死よ、
その悲しみの杉の間に私を横たえよ。
消えよ、消え去れ息よ、
無情の佳き人に殺されるのだ。
イチイを刺した死に装束を、
ああ、私に着せておくれ。
このように愛に死す者、
他になし。

この歌には叶わぬ恋によって病んだ者の強烈なまでの死への願望が歌われている。先程の“O mistress mine”では時のはかなさを指摘し、恋をまさに現在において掴むことの重要さをフェステは歌っていたが、この歌では恋を逃してしまった者の末路を示している。先に述べたように、男装のままのヴァイオラでは恋を打ち明けることができず

に花盛りの時を逸してしまう。この歌の「恋に死す者」とは時を逃してしまったときのヴァイオラであり、恋を秘めることを貫けば、ヴァイオラの恋の行く末には死が待っているとフェステは警告しているのである。ヴァイオラ自身もそのことを自覚していないわけではない。“And so they are. Alas that they are so, / To die even when they to perfection grow”「そうです、女というものは。だから哀れなのです。／満開になったそのときに死んでゆくのだから」（2.4.40-41）といい、女の若さのはかなさをバラの花にたとえ、若さが儚いことを理解している。道化の歌はヴァイオラの中に存在するあせりや不安を引き出して彼女の心を動かし、先に挙げたように、自分の妹の恋の物語に仮託した形で恋心を打ち明けさせることになる。しかしヴァイオラの想いは公爵に伝わるはずもない。そのことによって、観客のヴァイオラが恋の時期を逸してしまい、死に向かっていくのだという予感がより一層強まり、ヴァイオラの恋に悲哀が増すこととなる。ヴァイオラ本人がそのことを自覚すればするほど、ヴァイオラと認識を共有する観客の心にも、忍ぶる恋が悲哀として残るのである。

以上ふたつの歌が伝えるフェステからヴァイオラへのメッセージの根底には、ホラティウス（Horatius）の詩に由来する“Carpe Diem”という人生観がある。これはシェイクスピアの時代でもよく知られている考え方だった。ペストなどの伝染病の流行で早くに命を落とす者が多かった当時は、生きているその時、または若い人生の盛りの時を悔いのないよう生きることが通念となっており、誰もがそれを理想としていたようである。しかし、ヴァイオラの忍ぶる恋はその理想からは大きくかけ離れている。いつ死ぬか分からない時代において恋を忍ぶということは、「時」をつかみ損なったまま人生を終わらせてしまうこととなるかもしれない。ヴァイオラの恋の裏にはそんな不安感や恐怖感がある。フェステの歌う二つの歌はヴァイオラの恋に欠点や愚かさを見出し、当時の社会通念をヴァイオラや観客に再確認させているのだ。

以上、ヴァイオラの忍ぶる恋の持つ哀感と、それを強調するフェステの歌の役割を述べてきた。作者シェイクスピアは、ヴァイオラの場合とは対照的に男装することによって自由を得、自らを解放できる女性を作り出してはいた。『お気に召すまま』（*As You Like It*）のロザリンド（Rosalind）がそうである。ヴァイオラと同じく男に変装したロザリンドは、変装を最大限に活用し、物語の運命を自らの力で操り、恋を成就させている。それにひきかえ、ヴァイオラは変装によって自らの恋に制限を設け、沈黙を強いられている。ヴァイオラは男装によりロザリンドのように自由を得るどころか、ますますその立場に束縛されてしまっているのである。『十二夜』の見せ場でもあるフェステの歌は、そんなヴァイオラの状況を説明し、その行く末に暗い未来を暗示し

ているかのようである。はかない人生において、若さは一時のものであり、そのときを決して取り逃してはならない、また変装のために盛りの時を逃してしまった恋の結末は死であるというメッセージが、そうした状況に陥りつつあるヴァイオラの欠点や自己欺瞞を明らかにして観客の同情を誘い、恋の行く末に先のわからぬ不安を色濃く広げているのである。

第２章　マルヴォーリオいじめに見る人生の儚さ

マルヴォーリオは日ごろの尊大な態度のためにサー・トービーらに嫌われて、手痛いいじめを受ける。その際、マルヴォーリオは、周囲の思惑によって踊らされてしまう道化の役回りを自分ではそれと知らずに演じることになる。堅物で自惚れ屋のマルヴォーリオが、呑んだくれでいいかげんなサー・トービー達の思惑通りに操られてしまうことで、滑稽さと笑いが生まれるのだ。メイン・プロットの主役がヴァイオラならば、マルヴォーリオはサブ・プロットの主役とも言える。お祭り騒ぎを連想させる『十二夜』という題名は、メイン・プロットよりはサブ・プロットのマルヴォーリオいじめにむしろふさわしい。彼は『十二夜』の喜劇的要素になくてはならない人物なのである。しかし、このマルヴォーリオに対する手荒いいじめは、喜劇の中に悲しみを残してしまう。大団円を迎えようとする物語に、不幸な結末の予感を残してマルヴォーリオは退場してゆくのである。

本章では、マルヴォーリオの恋に見られる喜劇性と哀感の対立する二つの要素に着目する。まず、ヴァイオラの忍ぶる恋とマルヴォーリオの独善的な恋心を対比させて、『十二夜』における笑いと悲しみがどのような効果をもたらすのか考察する。次に、マルヴォーリオいじめの哀感がどのような意味合いを持つのかを、道化フェステの歌“When that I was and a little tiny boy”から論じる。

ヴァイオラは公爵への恋心を秘め、公爵のオリヴィアへの恋心を成就させるために健気に仕えていた。それにひきかえマルヴォーリオは、マライア（Maria）の書いた、オリヴィアがマルヴォーリオに想いを寄せているととれるにせの手紙に乗せられ、かねてから抱いていたオリヴィアへの恋心と彼女の持つ富への執着を露わにして恋心を暴走させる。しかし、マルヴォーリオの恋はサー・トービー達の策略によって演出されたいわば虚構の恋であり、報われない恋であることは初めから明らかである。

ヴァイオラの恋が自制の恋であるならば、マルヴォーリオの恋は自己愛の色が強い。

また、ヴァイオラの報われぬ恋に哀感が漂うのに対して、マルヴォーリオの恋には笑いの要素が見られる。オリヴィアから愛を打ち明けられ、夫にと望まれたヴァイオラは、“Would it be better, madam, than I am? / I wish it might, for now I am your fool”「そのほうが今の私よりいいでしょうか、お嬢様。／確かにそうあってほしい、というのも今の私はあなたの道化なのですから」（3.1.142-43） といい、男装をした自分の複雑な立場が、三角関係という運命に翻弄されている道化であることを自覚していた。その一方、拾ったにせの手紙が憧れのオリヴィアからの恋文であると勘違いしたマルヴォーリオは、“I do not now fool myself to let imagination jade me; for every reason excites to this, that my lady loves me”「いまや私はあらぬ妄想にだまされる馬鹿ではない。すべての根拠から、私は信じざるを得ない。お嬢様が私に恋をしているのだ」（2.5.159-61）とつぶやく。マルヴォーリオは自信満々なのである。自分がだまされ、これから皆の笑い物となる可能性など少しも考えていない。マルヴォーリオは自覚なしに周囲の思惑に踊らされてしまう道化なのである。にせの手紙がオリヴィアの筆跡を巧みにまねて書かれていたとはいえ、このようにマルヴォーリオが虚構にだまされてしまうのは、彼が自惚れの強い人物であることに起因する。にせの手紙を手に入れる前、彼は自分の影でお辞儀の練習をしながら“’Tis but fortune, all is fortune. Maria once told me she did affect me, and I heard herself come thus near . . .”「運命だ、すべては運命だ。いつかマライアが言っていた、お嬢様はこの私が好きなのだ、と。そして私もお嬢様からそれに近いことを直接聞いたことがある…」（2.5.21-24）といってオリヴィア嬢との恋を夢想している。このように愚かな期待を抱いていたからこそ、その期待に沿う情報にすぐさま飛びつき、一通の手紙からオリヴィアが自分を愛していると信じ込むことができたのである。

マルヴォーリオは手紙をそのままに信じ、その指示どおりに十字の靴下留めで黄色い靴下を履き、笑顔を作ってみせる。しかし十字の靴下留めや黄色い靴下は時代遅れなうえ、派手な色合いは尊大で堅物なマルヴォーリオには似つかわしくない。そして何より、黄色はオリヴィアの嫌いな色でもあった。また、常に仏頂面だったマルヴォーリオの慣れない笑顔はひきつり、気味の悪い薄笑いになってしまう。マルヴォーリオがオリヴィアのためにと思ってしているこれらの行動の数々は、普段の厳格なマルヴォーリオ像からはひどくかけ離れ、また、オリヴィアの好みともかけ離れてしまっている。その様子はオリヴィアがついに“Why, this is very midsummer madness”「まあ、ほんとうに狂っているのね」（3.4.53）と言ってしまうほどである。このような、傍からみると気違いとしか思えない奇妙な行動を至極真面目にしているその姿は、道化そ

のものであり、本人が真面目に手紙の要求通りに演じれば演じるほどおかしみが増すのだ。

手紙の指示するとおりに振る舞った結果、マルヴォーリオは屋敷中の皆に気違いのレッテルを貼られてしまい、地下室の暗闇に閉じ込められてしまう。そして、この行き過ぎたいじめは作品に後味の悪さを残す。物語の結末では、ヴァイオラの正体が明かされ、すべての誤解が解けるのと同時に、マルヴォーリオが奇行に及んだ理由も明らかとなる。サー・トービーたちの悪巧みも白日のもとに晒され、これまで夢幻のような世界だったイリリアのすべてが現実に立ち返るのだ。自分はだまされたのだという事実をマルヴォーリオが知ったとき、いじめに関わったすべての人々を赦せば物語は晴れて大団円を迎えることができる。しかし、すべてを明かされたマルヴォーリオは "I'll be revenged on the whole pack of you!"「お前たち全員に復讐してやる」（5.1.371）と激しい怒りの言葉を残して舞台を去る。悪巧みに関わりのある者たちのみに向けられたものであるが、その場にいる者すべてを呪うかのような強烈な言葉だ。これは、ヴァイオラが兄と再会し、また、恋が報われようとしている喜びの場面に水を差すものであり、今まで喜劇的な色合いが強かったマルヴォーリオいじめに深い悲しみが潜在してきたことが明らかになる瞬間でもある。これまで喜劇だったものは、裏を返して見れば、マルヴォーリオの悲劇でもあるのだ。めかしこんだマルヴォーリオを笑ってきた者も、この場面では彼に同情の念を禁じ得ない。マルヴォーリオの犠牲の上に成り立つ喜劇だったということを観客は思い知らされるのだ。

この大団円に影を作り出してしまうマルヴォーリオいじめにはどんな意味があったのだろうか。もちろん、マルヴォーリオいじめは喜劇的な意味でもこのプロットになくてはならないものである。しかしそれ以上に、マルヴォーリオを通して、人生とははかなく芝居のようなものであるということが暗示されているのだ。芝居の終わりで、すべての登場人物が舞台から去った後、道化フェステはこう歌う。

When that I was and a little tiny boy,
With hey, ho, the win and the rain,
A foolish thing was but a toy,
For the rain it raineth every day.

But when I came to man's estate,
With hey, ho, the wind and the rain,

’Gainst knaves and thieves men shut their gate,
　For the rain it raineth every day.

But when I came, alas, to wive,
　With hey, ho, the wind and the rain,
By swaggering could I never thrive,
　For the rain it raineth every day.

But when I came unto my beds,
　With hey, ho, the wind and the rain,
With tosspots still had drunken heads,
　For the rain it raineth every day.

A great while ago the world begun,
　With hey, ho, the wind and the rain,
But that’s all one our play is done,
　And we’ll strive to please you every day.　（5.1.382-401）

俺が子供のあの頃は、
　ヘイ、ホウ、雨と風。
取るに足らない馬鹿騒ぎ、
　毎日雨は降っている。

大人になったらどうだろう、
　ヘイ、ホウ、雨と風。
ごろつき、泥棒、追い出され、
　毎日雨は降っている。

嫁とった、ああ、その日から、
　ヘイ、ホウ、雨と風。
いばりくさっても満たされず、
　毎日雨は降っている。

長い眠りに就くときも、
　ヘイ、ホウ、雨と風。
酔いなど醒めないのんだくれ、
　毎日雨は降っている。

ずっと昔の世界の初まり。
ヘイ、ホウ、雨と風。
それでもいいさ、芝居は終わる
いつでも機嫌取りの骨折りさ

この歌で道化フェステは人間の一生を歌っている。各連で人生の節目を歌い、人生の表と裏、得意と失意を歌うのだが、そこには常に雨が降っており、人生に無常感や物悲しさを感じてしまう歌である。しかし、最後の連に注目すると、人生の物悲しさを超えたもうひとつの人生のとらえ方が浮かび上がる。この歌の第４連まで人生を歌った後に「それでもいいさ、芝居は終わる」と歌うところでは、『十二夜』の幕を下ろすと同時に、「これで人生という芝居が終わる」という意味を同時に見て取ることができる。また、「ずっと昔、世界の初め…それでもいいさ、芝居は終わる」という、韻によって結ばれ対になった表現の中に、昔から続く世界という大きな舞台と、そこで織りなされる人間の一生という小さな芝居という対比も読み取れる。人生のどのような局面も雨を背景にしていること、誰の人生も世界という大舞台では一瞬でしかないこと、さらには、人生とは呑んだくれが夢で見る道化芝居のようなものであること。つまり、この歌では、世界が大きな舞台であり、人生は芝居、さらに言えば人間という道化が演じる、取るに足らない余興であるということが暗示的に歌われているのだ。

　この歌に即してマルヴォーリオいじめについてさらに考えてみたい。確かにマルヴォーリオは酷くいじめられ、復讐を宣言せずにはいられないほどの痛手を味わった。だまされて道化のように皆の思惑に踊らされた彼にとっては、それは悲劇であっただろう。しかし、この歌に即して考えると、人生には常に悲しみが付きまとっているものであるという考え方ができる。そしてマルヴォーリオいじめからは、彼をとりまく喜劇もそのあとに訪れる悲しみも、人生というはかない芝居の一こまにすぎないということが読み取れる。プライドが高く真面目くさったマルヴォーリオの有頂天と大転落があるからこそ、悲劇と喜劇の絡み合った人生のあり方が浮かび上がってくるのだ。

マルヴォーリオのプロットでは虚構と現実が入り混じり、笑いと悲しみが逆転する。マルヴォーリオいじめは最終的に悲しみを残して終わる。しかし、後に強い悲しみが残るとしても、マルヴォーリオいじめを喜劇と位置づけることができるのは、フェステの歌が暗示するように、人生というものが小さなひとつの芝居であり、大きな世界という舞台からみればどんな人間の悲しみも茶番劇にすぎないという考えが存在するからなのである。

第３章　道化フェステの役割と『十二夜』の祝祭性

フェステはメイン・プロットとサブ・プロットのふたつのプロットに登場し、道化として歌を歌い、ばか騒ぎに加わってきた。本章では物語におけるフェステの役割について考察し、そこから生まれる『十二夜』の祝祭性について論じる。

フェステはオリヴィアお抱えの職業道化であり、何をいっても咎められないという特権に守られ、辛辣な批判や当意即妙の返しで笑いを生み出す。フェステは、自分の道化ぶりを引き合いに出して“Wit, an’t be thy will, put me into good fooling! Those wits that think they have thee do very oft prove fools . . .”（1.5.30-33）「知恵よ、もし気持ちがあるのなら、俺に立派な道化をやらせておくれ！知恵があると思っている衒学者がじつは阿呆だったなんてことはよくあることさ…」という。この台詞から、フェステという道化が、自らが阿呆であることを自覚する賢さを持つ一方で、自分の愚かさに気付かない他の登場人物の愚行を笑うような、エラスムス（Erasmus）の『痴愚神礼讃』（*Encomium Moriae*）の精神を体現している“Wise fool”（賢い道化）であることがわかる。フェステが賢い道化であることは、ヴァイオラが“This fellow is wise enough to play the fool, / And to do that well craves a kind of wit”「彼は阿呆を演じられるくらい頭が切れるのね。／道化て見せるには、知恵がなくてはならないのだから」（3.1.58-59）といって評価していることからもわかる。フェステは阿呆のふりをしながら、知恵と鋭い洞察力によって、冗談を言う人の気持ちや状況を観察し、その状況に応じて適切に道化てみせているのだ。そして、『痴愚神礼讃』において痴愚神が言うように「阿呆たちは、そのゆく先々へ、楽しみと、遊びと、おもしろさと、陽気さとをもたらす」[4]のである。

『十二夜』における、この知恵のある道化としてのフェステの役割とは、登場人物のそばにありながら、同時に距離をおいたような目線を持ち、鋭い洞察力によって彼

らの欠点や愚かさを見抜いて明らかにすることであるとわたしは考える。フェステが、ヴァイオラやマルヴォーリオの在り方に愚かさや過ちを見いだし、それにコメントを加えるかのように歌を歌ってきたことはこれまで述べてきたとおりである。メイン・プロットでは、しばしば美徳とされるヴァイオラの忍ぶ恋が、はかない人生においては若い盛りの時をただむだに過ごしているだけの愚行であるということを歌によって明らかにした。マルヴォーリオいじめにおいては、マルヴォーリオの愚かな妄想を見抜き、それを利用して悪戯に加わって笑いを生み出した。また、いじめられたマルヴォーリオの怒りや悲しみさえも、はかない人生の取るに足らない一こまとして昇華させた。これは、フェステが主人公たちとは全く違った角度から物事を見きわめ、そこに新たな側面を見いだすことができるからである。フェステはまた、道化の在り方について“Foolery, sir, does walk about the orb like the sun, it shines everywhere”（3.1.37-38）「阿呆っていうのはね、旦那さま、太陽のように地球の上を歩きまわる。そしてどこだって照らすのさ」という。この台詞は、ヴァイオラやマルヴォーリオに対してそうであったように、道化があらゆる人間を高い見地から照らし、彼らの愚かさを明らかにすることができることを意味しているのだ。そして道化の行く先には、痴愚神の言葉のとおりに太陽のような陽気さがもたらされているのである。

フェステはまた、言葉遊びによって登場人物と関わってゆく。これは道化としての見せ場でもあり、我々がフェステの知恵の深さに気付かされる場面でもある。

FESTE: Good madonna, why mourn’st thou?
OLIVIA: Good fool, for my brother’s death.
FESTE: I think his soul is in hell, madonna.
OLIVIA: I know his soul is in heaven, fool.
FESTE: The more fool, madonna, to mourn for yourbrother’s soul being in heaven,
—— Take away the fool,gentlemen. （1.5.62-68）

フェステ　お嬢様、なぜ嘆いておられるのです。
オリヴィア　阿呆よ、お兄様がお亡くなりになったからよ。
フェステ　兄上の魂は地獄に落ちたと見えますな、お嬢様。
オリヴィア　お兄様の魂は天国においでだわ、阿呆。
フェステ　なんて阿呆でしょう、お嬢様、兄上の魂が天国にいらっしゃるのにお嘆きとは。そなたたち、この阿呆を連れて行け。

フェステはここで、オリヴィアに見方の転換を迫る。兄の死を嘆き喪に服しているオリヴィアに対して、フェステは失われた命そのものにではなく、死後の魂の行方を問題にするという、まったく新しい観点をオリヴィアに与えている。嘆くオリヴィアに向かって、兄の魂は天国に行ったのだからむしろ喜ばしいことだと教える。死の解釈に捻りを加えることにより、オリヴィアに巧妙な言い返しをしているのだ。この場面は単にフェステの知恵の深さを表しているだけでない。オリヴィアが喪に服すのは常識的な態度であり、オリヴィアもその行動が正しいことであると信じているが、フェステは悲しみを打ち壊すかのように、オリヴィアの考え方を覆し、オリヴィアの悲劇から喜劇的な笑いを引き出そうとしているのである。痴愚神は「阿呆たちは、真実を王様たちに受け取らせ、公々然と王様たちを罵りながらもこれを楽しませるという驚くべきことをやってのけるのです。」[5]と言っているが、この場面では、主人のオリヴィアに対してフェステがまさにそれを実践しているのである。愛する兄の死という過酷な真実をオリヴィアに受け止めさせ、オリヴィアを阿呆と罵りつつ、そこにおかしみや喜びを生み出しているのだ。

一見すると言葉遊びのようにも見えるこのフェステの言葉は、実は見逃されてきた知恵や現実に対する新しい対処法を登場人物に教える。そして、痴愚神の「道化たちは、もの悲しい人間生活を陽気にする役目を与えられている」[6]という言葉のとおりに、悲しみに支配されている者に新しい物の見方を与え、悲しみを喜びに変えるのである。フェステは言葉遊びによって、登場人物がそれまで持っていた観念を破壊し、新しい常識を創造して与え、彼らを『十二夜』という陽気な祝祭のさなかへ引き込もうとしているのだとわたしは考える。

祭りでは日常の常識は影をひそめる。祭りの参加者は仮面をつけて自分を装い、日常の姿を隠して非現実的な世界へ入ってゆくのだ。『十二夜』では、祭りと直接関係する台詞などが出てくることはない。しかし、現実と虚構の逆転するイリリアという幻想的な世界は祭りの非現実感と重なる。男装という仮面をかぶった主人公ヴァイオラ、道化のように滑稽な騒ぎを起こしたマルヴォーリオは、まさしく十二夜という祭りにふさわしい主人公であると言える。そして、同じく“festivity”（祝祭）を連想させる名前を持つフェステは、この作品の祝祭性を喚起させるために、登場人物に笑いや滑稽、喜びという祝祭の要素を与え、彼らを祭りへと引き込む役目を与えられているのだ。

先に挙げたオリヴィアとのやりとりの過程で、フェステは巧みな言葉遊びでオリヴ

ィアの悲しみを解きほぐし、新たな視点を与えることで喜びや笑いを生み出そうとしている。このフェステの言葉遊びによって、オリヴィアはかたくなな心を解きほぐされ、セザーリオというヴァイオラの仮の姿に恋をして複雑な三角関係に参加していくが、この三角関係もまた十二夜の祭りの余興であり、最終的には結婚という祝祭につながっているのだ。半ば恋を放棄しているヴァイオラに関しても、フェステは恋のはかなさを歌うってヴァイオラの心を動かし、恋の好機をつかむことの重要さを説くことで、恋への関与を促している。ヴァイオラの恋への関与も、結婚という大団円を迎えるには欠かせない要素である。フェステは、若さを無駄に過ごすことで人生の一番良い時期を放棄する２人の女性を、人生の表舞台に立たせたのだ。

マルヴォーリオに対しては、フェステは他の人物とは少し異なった関わり方をしている。マルヴォーリオいじめに参加することで、マルヴォーリオを徹底的にたたきのめしているかのように見える。笑いや遊びを否定する四角四面なマルヴォーリオこそが「祭りの敵そのものである」ため、十二夜という祭りから追放しようとしているのだと高橋康也はいう[7]。たしかに、高橋の言うように“malvoglio”（イタリア語で「悪意」）をマルヴォーリオの名前から連想し、祭りとは相いれないからこそ、フェステによって追放されたのだという考え方もできる。しかし、マルヴォーリオもまたフェステによって祭りに誘われた､祭りの参加者の１人と考えることはできないだろうか。マルヴォーリオいじめの発端となった“My masters, are you mad or what are you? Have you no wit, manners or honesty but to gabble like tinkersat this time of night?”（2.3.85-87）「皆さん、気でも狂っているのですか。こんな夜中に鍵かけ屋まがいのばか騒ぎをしないだけの分別、作法、つつしみはどうしたのです。」という台詞に着目すると、真夜中にばか騒ぎをしているサー・トービー達をたしなめるマルヴォーリオは、喪に服すオリヴィアと同じく、執事としてただ常識的な態度をとっているだけである。フェステはこの堅物のマルヴォーリオの常識を覆し、気違いという滑稽な仮面をかぶせることで道化として祭りに参加させているのだ。

フェステはこのように主人公たちを『十二夜』という祭りに参加させることで物語の祝祭性を際立たせている。では、祝祭のクライマックスともいえる大団円を迎えたあとで、なぜ哀感が残るのであろうか。『十二夜』に祝祭性があるならば、この哀感とは、祭りの後に感じられる物悲しさなのである。祭りの参加者、つまり、登場人物が舞台を去った後にフェステは“When that I was and a little tiny boy”を歌う。この歌を歌うことでフェステは、悲しみと怒りを残して去ったマルヴォーリオの姿を世界舞台の観念に投影し、悲しみを和らげると同時に、『十二夜』という祝祭を締めくくる役割

も果たしているのである。この歌によって祭りは解体され、虚構や非現実といった祭りの雰囲気は現実に戻り、すべての秘密が明らかになった登場人物も、偽りの仮面を脱ぎ棄てて本来の自分へと戻っていくのだ。

本章では道化としてのフェステの役割と『十二夜』の祝祭性について論じてきた。フェステは、歌を歌うことでヴァイオラの恋の在り方に潜む弱点を見つけ出し、また、マルヴォーリオの自惚れを利用した悪戯の中に、人生のはかなさを見いだす。これらすべてに共通するものは、「世界は舞台であり、人間の一生は一芝居である」という考え方である。人生というものが、地球という舞台で人間によって演じられるはかない一芝居であるという考えは、仮面をかぶって非日常を演じる祭りとも共通する。ヴァイオラやマルヴォーリオがフェステによって祭りに誘われた一員であり、彼らが生み出す哀感さえも祭りの余興として捉えることができるならば、彼らを通して我々が感じた人間の一生のはかなさは、フェステが創り出した祭りの後に訪れる寂寥感に重なる。フェステは人間の喜びのみならず弱点や愚かさの生む哀感の中に、祭りのような滑稽さを見いだしていたのだ。だからこそ、『十二夜』という祭りの終わりの合図とも言える、全ての者が舞台から去ったあとのフェステの歌には、物悲しさとある種のすがすがしさが漂うのである。

結論

『十二夜』に漂う哀感とは、ヴァイオラの忍ぶ恋やマルヴォーリオいじめから読み取ることのできる人生のはかなさから喚起されるものであると言える。そして、欠点や弱点、または愚かさにより登場人物が人生をむだに過ごしてしまうことで、物語はより憂愁を強めるのである。そのただ中にあっても、客観的な物の見方により、人生のはかなさ、そして人々の愚行を見抜いていたのは道化フェステである。フェステは登場人物たちの憂いを払うかのように歌を歌い、登場人物を笑いと滑稽の渦巻く祝祭のさなかに引きこんでゆく。結婚という大団円に終わるにもかかわらず悲しみと憂いの色濃い『十二夜』にフェステが祝祭性を呼び起こすのは、そうした人間の愚かさによる悲しみを「世界舞台」の観念と関連づけて客観性を持っているからである。世界は舞台であり、人生はその中で演じられる一芝居であるからこそ、ヴァイオラの欠点が生んだ憂いも、マルヴォーリオの愚かさに起因する悲しみや怒りも、人生には欠かせない出来事であり、世界舞台で展開される無数の人生の一つであり、最終的には祭

りの余興として相対化されるのだ。

『十二夜』にどのような哀感が存在しようとも、それは人間の愚かさが招いたものであり、道化が演じた喜劇のようなものである。そしてフェステは、喜劇としての、または人生の一こまとしての『十二夜』に幕を下ろす。世界を舞台として演じられた、人生という、人間による滑稽な芝居。生きているからこそ、人は悲しみも喜びも感じることができる。悲喜交々、どちらもあるからこその人生なのだ。喜劇『十二夜』において、なぜ悲しみの要素があるのか。また悲しみさえも喜劇と捉えることができるのはなぜなのか。それはシェイクスピアが生命を肯定し、悲しみも含めた人生そのものに、喜びを感じていたからなのである。

注

[1]高橋、135 頁。
[2]以下、『十二夜』の引用は Keir Elam ed. *Twelfth Night, or What You Will,* The Arden Shakespeare Third Series に拠る。
[3]金城、149 頁。
[4]渡辺・二宮、99 頁。
[5]渡辺・二宮、102 頁。
[6]渡辺・二宮、99 頁。
[7]高橋、139 頁。

参考文献

Keir Elam ed. *Twelfth Night, or What You Will,* The Arden Shakespeare Third Series. London: Methuen, 2008

安西徹雄『この世界という巨きな舞台―シェイクスピアのメタシアター』筑摩書房、1988 年。

大山俊一『シェイクスピア人間観研究』篠崎書林、1957 年。

金城盛紀『シェイクスピアの喜劇―逆転の願い』英宝社、2003 年。

高橋康也『道化の文学―ルネサンスの栄光』中央公論新社、1977 年。

渡辺一夫・二宮敬（訳）『痴愚神礼讃―エラスムス』中央公論新社、2006 年。

The Color Purple と *Possessing the Secret of Joy*
―父権主義への抵抗―

鈴木　翔子

序論

本論文では、アリス・ウォーカーの *The Color Purple*（1982）及び *Possessing the Secret of Joy*（1992）を主テクストにして、父権主義への抵抗をテーマに論じていく。二つの物語の中には男性と女性、自己と他者、文明と野蛮など多くの父権的対立軸が描かれている。筆者は *The Color Purple* のセリー（Celie）と *Possessing the Secret of Joy* のタシ（Tashi）の自尊心喪失にはこの父権主義が関係していると考え、彼女らがどのようにして父権主義によって自尊心を失ったのかについて考察していく。そして、彼女たちの父権主義に対する抵抗の仕方が異なると考え、その闘い方を分析し、セリーとタシの視点からテーマを追求していく。

本論文は、第 1 章から第 3 章までの構成で、セリーとタシを軸として彼女たちの周りの父権主義とはどのようなものか、そしてその権力関係が彼女たちにどのような影響を与えるのかを分析する。第 1 章ではセリーと南部の女性差別に焦点を当て、父親からの支配と結婚という支配の二つのテーマに分けて、セリーの苦境の根源とは何か、なぜ彼女は自尊心を失ったのかについて論じていく。第 2 章ではタシと *Possessing the Secret of Joy* で描かれている父権主義に焦点を当て、アフリカの女性性器切除と先進国の植民地主義の二つのテーマに分けて、アフリカの男性優位社会の中で生きる女性たちとコロニアリズムの犠牲について分析する。第 3 章では父権主義に対する抵抗に焦点を当て、タシの抵抗、セリーの抵抗、そして他の女性の登場人物たちの抵抗の三つに分けて、彼女たちの父権抑圧に対する闘い方を比較する。

これらの分析を踏まえて、父権主義への抵抗というテーマの核心に迫っていく。

第 1 章　アメリカ南部（20 世紀前半）の女性差別

1.1　父親からの支配

セリーが父親から支配されていることは小説の冒頭部分から明らかである。*The Color Purple* は次のセリーの父親の台詞で始まる―“*You better not never tell nobody but God. It'd kill your mammy*”「神さま以外の誰にも言うなよ。お前の母さんが聞いたら、

死んじまうぞ」（*The Color Purple* 1）と、セリーは父親から性的暴力を受けたことを誰にも告げ口するなと言われる。物語の最初の三ページは父親から強姦される様子、セリーの母親がセリーに呪いの言葉を吐きながら死んでいく様子、父親との間にできた子供を取り上げられてしまったことが生々しく描かれている。ここからセリーが両親からの愛情を受けずに育ったことがわかる。

父親から強姦された後、セリーはどのように生きていくのだろうか。彼女は神様宛に手紙を書くほかなかったのである。神様宛の手紙の始まりには次のように書かれている—“Dear God, I am fourteen years old. ~~I am~~ I have always been a good girl. Maybe you can give me a sign letting me know what is happening to me”「神さま、あたしは 14 歳です。あたしは~~ずっと~~今まではいい子でした。今あたしになにが起きているのか教えてくれませんか？」(1)。この文からセリーが悪い子になってしまったと感じていることがわかる。セリーは強姦されたことにより、汚れてしまったと感じているのではないだろうか？セリーは幼いときに強姦されたために自分の身に何が起きたのか分からないのにも関わらず、自分か汚れてしまったということを自然と感じていることから、強姦という父権的抑圧の残虐さが伺える。セリーは幼い頃から教会へ通う正統なクリスチャンである。キリスト教には人類の罪をキリストの愛と教えによって救うという罪の意識を感じる概念がある。上記の引用とこの概念を組み合わせて考察すると、セリーは汚れてしまったことを神に懺悔をし、救いを求めていると言えるのではないだろうか？

次の場面もセリーが父親の眼差しから逃れられないことを物語っている。教会で男の子にウインクをしたと父親から殴られる場面でのセリーの気持ちが次のように表されている—“I don’t even look at mens. That’s the truth. I look at women, tho, cause I’m not scared of them”「あたし男たちのこと、見ないもの。ほんとです。あたし女たちのこと見るんです。女はこわくないから」(5)。この文からセリーが父親だけでなくすべての男性に恐怖心を抱いていることが分かる。セリーは父親から暴力を受け、強姦もされたことにより男性恐怖症になり、恋愛的にも男性に惹かれなくなったのである。

セリーは暴力以外にも父親から父権抑圧を受けていた。支配とは常にあからさまに暴力的な形を取るとは限らないのである。セリーは父親との子を妊娠したときに登校を禁止されるのだ—“The first time I got big Pa took me out of school. He never care that I love it”「最初にあたしのお腹が大きくなったとき、父さんはあたしに学校をやめさせました。あたしが学校好きだってことなんて気にもしなかった」(9)。父親のことを「かれ」と呼んでいたセリーだがこの場面で初めて「父さん」と呼ぶ。つまり「かれ」の

ことを父親として意識したということである。本人の意志に関わりなく、本人に代わって意思決定することは父親の子供に対する統制関係のうちに認められる支配のひとつである。母親には言うなという父親の禁止の言葉や、セリーの気持ちを無視し登校を禁止させたことなどを考察すると、セリーは父親による禁止という父権抑圧を受けていたことがわかる。

教育を受ける機会は平等に提供されるべきものである。セリーの妹であるネッティがセリー宛の手紙に書いたオリビアとの会話が次の通りである—“when I told her the Olinka don’t believe in educating girls she said, quick as a flash, They’re like white people at home who don’t want colored people to learn”「私がオリンカの人たちは、女の子たちは勉強する必要はないと思っているのよと答えますと、あの子は直ぐに、オリンカの人、黒人に勉強させたくない故国の白人たちと同じね、と言いました」(157)。教育とは知識を与える場であり、知識とは考える道具である。白人が黒人に知識を与えないのは、考える力、そして自立する力を与えたくないからではないだろうか？ネッティは教育を受けることで自立していくが、セリーは教育を受ける機会を父親により奪われてしまったために自立する力を得る機会を失ってしまったのではないかと筆者は考える。

セリーは父親から女性として、人間としての扱いをされずに成長する。セリーがまだ若いときに自分がもう妊娠しない身体であることが次の引用からわかる—“A girl at church say you git big if you bleed every month. I don’t bleed no more”「教会で会った女の子が、毎月血が出たらお腹が大きくなるって言ってた。あたしもう血が出てこないの」(5)。そしてセリーの父親がセリーについて Mr.____に説明する場面でもセリーが妊娠しないことが次のように書かれている—“She ugly. He say. But she ain’t no stranger to hard work. And she clean . . . You can do everything just like you want to and she ain’t gonna make you feed it or clothe it”「あの娘は醜い、と彼が言う。だが、きつい仕事はよくやる。それにあいつはもう妊娠しない。[中略]あんた、あの娘に何でも好きなことできるさ。食物くれだの、服を買ってくれだの言うガキはできねえから」(8)。この引用からセリーは労働力と性的欲求を満たすだけの存在として扱われていることもわかる。生理がこなくなり、妊娠ができなくなったということは、女性としての機能がなくなったということである。生理がくることや、妊娠することは女性が女性であるために重要なことである。父親に醜いと言われ、物のような扱いを受け、そのうえ、女性としての機能がなくなったということがセリーが女性としての自尊心を失った理由であると筆者は考える。

1.2　結婚という支配構造

次に Mr.___によるセリーの支配について分析していく。セリーが Mr.___のところに嫁ぐ前、Mr.___がセリーを見に家に来る場面が以下のように描かれている—“He’s still up on his horse. He look me up and down”「Mr.___は馬に乗ったまま、あたしを上から下まで見てた」（10）。Mr.___が馬に乗ったまま上からセリーを眺めるという行動は男性と女性の上下関係を表している。そして、セリーの父親は Mr.___にセリーをよく見せるために、“Turn round”「ぐるっとまわりな」（11）とセリーに言いつける。これらの引用から彼らがセリーをまるで商品のように扱い、父親がディーラーのように売りつけ、Mr.___がバイヤーのように品定めしていることがわかる。つまり、これらの描写は奴隷売買の場面に類似していると言える。

セリーは父親からだけではなく、結婚後 Mr.___からも暴力を振るわれるようになる—“He beat me like he beat the children”「彼、子供をぶつようにあたしをぶつ」（23）。そしてセリーが Mr.___からの暴力を、感情を殺しながら我慢している様子が次の文に描かれている。“It all I can do not to cry. I make myself wood.”「あたしはくいしばって泣くのをこらえる。自分を木にしてしまう」（23）。Mr.___がセリーに暴行を加える理由が次の通りである—“Cause she my wife. Plus, she stubborn. All women good for—”「おれの女房だからだ。それにあいつは手に負えない。女ってものは…」（23）。Mr.___のように妻だから暴力を振るうという行為は父権的暴力である。Mr.___は結婚と暴力により女性であるセリーを支配・所有していると思っているのではないだろうか？ 例えば Mr.___が言う—“Wives is like children. You have to let’em know who got the upper hand. Nothing can do that better than a good sound beating.”「女房なんて子供と同じだ。誰が強いのか教えてやらなきゃなんねえ。それにはビシビシぶつのが一番さ」（36）という文からも Mr.___が夫と妻の上下関係を暴力によって明らかにしようとしていることが読み取れる。

商品のような扱いをしたり、暴力によって支配したりとセリーの父親や Mr.___がセリーに行ったことは女性の性の奴隷化である。セリーは父親から強姦されたことにより男性恐怖症になり、女性としての機能を失った。そしてクリスチャンであるがために強姦されたことに対し、汚れてしまったと感じるのである。さらに、セリーは妻であるというだけの理由で Mr.___からも暴力を受ける。セリーの“I don’t fight, I say where I’m told”「あたし闘わない。言われた通りにしてる」（22）という発言からセリーに抵抗力がなく、このように生きたいなどの自分の欲求に関して鈍くなっていることがわかる。父親による禁止と暴力、そして Mr.___からの暴力という抑圧を我慢し、感情を

断ち切り、その感情の抑圧によって自分の欲求に鈍くなってしまったのではないだろうか？

女性に対する暴力は女性に対する差別の一形態である。セリーは父親からの支配と結婚という支配の中、暴力という差別を我慢し続けたのだ。これらの考察から父親とMr.___が振るう暴力の根源が父権主義であると言える。よって、セリーの苦境の根源は父権主義であると読み取ることができるのではないだろうか？

第 2 章　アフリカの女性性器切除と先進国の植民地主義

2.1　アフリカの女性差別

次に *Possessing the Secret of Joy* におけるタシについて考えてみたい。暗い塔に閉じ込められる夢を見たり、雄鶏の絵を我を忘れて描いたりと、タシの精神の異常性の様子が物語の至る所に描写されている。タシと心理学者であるレイとの会話が次の通りである—“As I spoke, I became aware I had covered both my cheeks with my fingers. I had also crossed my legs. I took my hands down and placed them in the folds of my dress”「私は話しながら、両頬を手で隠していることに気がついた。足も組んでいた。あたしは手を頬から離し、ワンピースの折り目の中に入れた」（*Possessing the Secret of Joy* 110）。ここからタシが顔の傷と性器を無意識に隠していることが分かる。例えば、“To smell like herself seemed beyond her ability to accept”「自分の匂いがするということはタシにとって受け入れがたいこと」（90）という引用からタシは自分自身の存在に拒絶感があることがわかる。そしてオリビアがタシの目について次のように説明している—“That her soul had been dealt a mortal blow was plain to anyone who dared look into her eyes”「彼女の魂が致命的に破壊されたということは、彼女の目を見た誰もが明白にわかることだった」（63）。このようなタシの精神状態の原因とは何であろうか？

タシは性器手術を施したマリッサを、“someone who, many years ago, killed me”「何年も前にあたしを殺した人」（258）と表現する。この描写からタシの自尊心喪失の原因が性器切除にあると言えるだろう。また、タシの発言から他の女性たちも性器手術によって精神が崩壊するということがわかる。例えば、“Women who are not gelded have a different sound, I think. They can sound perky”「去勢されていない女の声は違う響きがある。力強く響けるのだ」（214）や、“self-possession will always be impossible for us to claim.”「あたしたちは冷静でいることができないのよ」（256）などの描写からタシだけでなく性器手術を受けた他の女性たちも自尊心を失っていると考えることができる。

オリンカの女性たちはセリーと同じく、女性を人間としてではなくモノとして扱う男性中心社会の中で生きている。次の描写を考察してみたい—“I look down at my feet. Feet that hesitate before any nonflat surface: stairs, hills”「あたしは足元を見る。この足は階段や坂のような平らでないところにくるとためらう」(208)。タシのこの発言は手術によって足の自由を失ったことだけでなく、手術を受けた女性たちの精神の様子も表しているのではないかと考える。性器手術を受けた女性たちが性器切除前はモノとしての扱いを受けていたことがわかる引用が物語の中に幾つかある。アフリカの人々は性器手術のことを、“the female initiation ceremony”「女になるための儀式」(*The Color Purple* 243）と表現している。つまり、手術前は女性でないということである。そして、 “In service to tradition, to what makes us a people . . . and what makes us who we are”「伝統に仕えるために。あたしらを人間にするために。［中略］そしてあたしらをあたしらにするために」（*Possessing the Secret of Joy* 210）という文から女性たちが性器切除前は人間として扱われていなかったことがわかる。女性たちは、男性たちの社会からの抑圧から耐えることが彼女たちの唯一の「人間への道」だと思ったのであろう。アメリカ南部とアフリカでの父権主義による差別は歴史的・文化的背景により異なるが、セリーがモノとしての扱いを受けていたようにアフリカの女性たちもモノとして扱われていることは同じである。

性器手術前はモノとして扱われ、性器切除によって自分の価値を見失った女性たちは男性と男性のみ神聖さを与える伝統によって他者化されているのではないかと考える。オリンカ族のような男性優位社会では、女性たちは等身大の個々の人間としてではなく、類型一般の他者として認識されているのではないだろうか？次の描写に注目してみたい—“she is where they are doing “boys’ things” they do not see her”「男の子たちの場所にオリビアがいるので、彼らには彼女が見えないのです」(*The Color Purple* 157)。この引用から男性社会の中の女性は invisible だということが窺える。他者化されたものたちは皆同じに見え、女性という一つの社会的カテゴリーの中で生きるほかないと私は考える。このような他者化された女性たちが自尊心を持つことは困難である。

2.2　先進国の植民地主義

次に二つの物語の至る所に描かれているアフリカの自然破壊、ヨーロッパの製薬会社による搾取などの父権的コロニアリズムの犠牲について考察していく。

ネッティやアダムたちが行っていた布教活動も薬品を製造するなどの支援と一体で父権的である。ンベレ反乱軍に入るためにタシが村を出る場面でタシがオリビアに言

う台詞が次のとおりである—“You want to change us, I said, so that we are like you. And who are *you* like? Do you even know?”「あんたたちは、あたしたちを変えたがる、とあたしは言った。あたしたちをあんたらのように。でも、あんたたちはなんのようだか、自分で知っているの？」（*Possessing the Secret of Joy* 22）。さらにタシは次のようにも言っている—“You barely have your own black skin, and it is fading”「あんたの肌は、もう黒とさえいえないじゃない。色が褪せかけているわ」（22）。これらの引用からネッティたちが白人の真似をしていると読み取ることができる。キリスト教という西洋の宗教、“the white folks’ white bible”「白い人たちの白い聖書」（*The Color Purple* 195）の教え、つまり白人たちの考え方を教え、植民者の言語である英語を教育するという行為は、先進国がゴム植林のためアフリカを開拓したことと類似している。

布教活動は開拓と類似しているが、アフリカ人に知識を与える場、そして考える力を与えるという善意的な面もある。つまり、布教活動には二面性があると言える。ネッティやサミュエルのように無知な人たちを教育しようという考え自体は悪いものではない。無知であるが故に父権的社会から抜けられないというのも事実である。ネッティがアフリカの自分の部屋の壁に掛けたキリストの写真を見たときに、“they made me feel very small and unhappy, so I took them down”「私は自分がとても小さく、惨めに感じたので取り外したのです」（160）と発言したことから、ネッティがキリスト教を教えることに違和感を感じていたと読み取ることができる。元々、ネッティとサミュエルは布教活動を好意的に始めたわけで、決して支配者になろうとしていたわけではない。しかし、彼らは新たな道を開くという特権をもっていたため、特別と感じざるをえなかったのだと考える。彼らには植民者とアフリカ人という対立軸と同じ、第一世界と第三世界という上下関係が前提としてあったのである。もしかしたら、彼らはアフリカで文明と野蛮という父権的上下関係を感じていたのではないだろうか？それはサミュエルがアフリカでの布教活動に失敗したとき言った “We failed so utterly . . .”「僕たちは明らかに失敗した［後略］」（239） というキリスト教優位的発言からもうかがえる。この彼らの特権的ポジションは第一世界の人間と第三世界の人間の間に容易く距離を生み出してしまうと筆者は考える。

性器手術は伝統的なアフリカの父権的文化であるが、なぜタシを含む女性たちが性器手術を受けたのかという疑問を考察するには、アフリカの男性優位主義だけでなく、先進国の植民地主義について分析する必要がある。ネッティがタシ宛に書いた手紙にタシが性器手術を受ける意義について描写した箇所がある—“Tashi was happy that the initiation ceremony isn’t done in Europe or America, said Olivia. That makes it even more

valuable to her”「タシは女の儀式がヨーロッパやアメリカで行われてないことに喜んでたわ。それならなおさら価値あることだって。とオリビアは言った」(243)。この引用から、先進国では性器手術が行われていないということが、タシが手術を受ける理由の一つであると考えられる。また、植民地化によってタシの部族が全てを失い、唯一残された彼らの文化に縋っている様子が次の引用からわかる—“wanting the operation because she recognized it as the only remaining stamp of Olinka tradition”「これが唯一残されたオリンカの伝統だと気づいたから手術をしたい」(61)。次の引用にもタシが手術を受ける意義が描写されている—“We had been stripped of everything but our black skins. Here and there defiant cheek bore the mark of our withered tribe. These marks gave me courage. I wanted such a mark for myself. My people had once been whole . . .”「あたしたちは黒い肌以外の全てを奪われた。あちこちの反抗的な頬に滅ぼされたあたしたちの部族の印が刻まれていた。その印はあたしに勇気をくれた。あたしもその印がほしかった。かつてあたしたちの部族にはすべてがあった［後略］」(23)。かつては全てがあったが、今は黒い肌しか残っていない。タシはすべてを失ったなかでの抵抗として、自ら手術を受けたのだ。

フランツ・ファノンが、「人は文化を出発点として民族を証明するのではなく、占領軍に抗して民衆の行う闘いのなかで文化を表明するのだ」(ファノン 216) と述べたように、オリンカ族も闘いの中で文化を表明した部族である。これらの引用と考察からタシのその抵抗の力や抵抗という文化を育んだのは植民地主義だと言えるのではないだろうか？アリス・ウォーカーの言う「抵抗」とは異なった抵抗ではあるが、これもタシが白人に対し行った「抵抗」の一つである。タシは白人への抵抗として、植民地化され唯一残された文化である性器手術を受けたのだ。つまり、オリンカが植民地化されなかったら、タシは性器手術を受けなかったかもしれないということである。唯一残された性器切除という一族の文化を守るために手術を受けるが、その文化によって自尊心を失ってしまうとは悲痛なことである。

岡真理が「民族とは何なのか、伝統とは、文化とは、そして人権とは、という問い、それは畢竟、人間存在とは何か、私とは何か、という問いに至るものであろう」(岡 108) と述べたように、白人の搾取により民族としてのアイデンティティが揺らぎ、そして性器切除という男性優位であり女性を invisible にする文化を残された民族の証として固守することによって、タシのように「私」とは何かがわからない、つまり自尊心を喪失した女性が生まれてしまうのではないだろうか？

第 3 章　父権主義に対する抵抗

3.1　タシの抵抗

第 1 章と 2 章でセリーとタシの苦境の根源が父権主義であることがわかった。彼女らは父権抑圧によって自尊心を喪失し、身体的損傷を被った女性同士である。「自分の国を白人にとられたアフリカの黒人が、どんな屈辱のもとで生きてきたか。彼らが生き延びることができたのは抵抗したからよ。白人に対する抵抗です。タシも同じ。伝統に対し、自分の体験を通してノーと言った勇敢な女性です」（岡 97）であるとアリス・ウォーカーが述べるように、タシは父権主義に対し、抵抗という闘いを行った女性である。そしてセリーも同じく父権主義に対し、抵抗を続けた勇敢な女性である。しかし、文化・歴史・社会的背景の違いにより、彼女らの闘い方は次元が異なる。第 3 章ではタシとセリー、そして他の女性の登場人物たちの父権主義に対する抵抗とはどのようなものかをそれぞれ比較しながら考察していく。

まず、タシの抵抗について分析していく。タシが白人至上主義への抵抗としてオリンカの文化である性器手術を受け、顔に傷をつくったということが次の引用に書かれている—“Tashi didn’t want to do it, but to make her people feel better, she’s resigned. She’s going to have the female initiation ceremony too, she said”「タシは瘢痕を入れたくはなかったが、部族の人たちに自信を持たせるために断念し、従うことにした。タシは女の儀式も受けるつもりだと彼女は言った」（*The Color Purple* 243）。そして、タシの指導者が “That we must fight the white oppressors without ceasing”「白人圧制者と、止めることなく闘わなければならない」（*Possessing the Secret of Joy* 109）という教えを説いたようにタシは、ンベレ反乱軍に入り母国の為に闘おうとしていた。これは 2.2 で述べたように、残された伝統を守り、植民者たちと真っ向から闘うというタシの抵抗である。しかし、この抵抗は抵抗せざるを得ないという不可避の抵抗である。

タシが文房具屋で、“This excrement is the reading matter of the masses . . . I will fling myself against the billboards”「この糞こそが、大衆の読み物なのだ。［中略］看板で戦ってやる」（103）と言い、看板を作成したことはアフリカの父権的文化に対しての抵抗の一つである。タシは看板に次の文を書いた—“If you lie to yourself about your own pain, you will be killed by those who will claim you enjoyed it”「あんたが自分の痛みについて自分自身に嘘をつくと、それを楽しんだということにされて殺されちまう」（102）。この文章は自分の感情を抑圧し性器手術を受けると、精神が崩壊してしまうということを意味しているのではないだろうか？タシは自分の経験を看板に書くことによって、ア

フリカの女性たちに警告をしたのだ。タシが文房具屋で国旗を描くとき、“White is not the culprit this time. Bring me out paper of the colors of our flag”「今回は白が犯人じゃないからね。国旗の色の紙を出してちょうだい」（100）と白い紙ではなく国旗の色の紙を文房具屋に頼んだ。白は植民者である白人のことで、犯人は国旗の色、つまり国家のことである。これは闘うべき対象が白人ではなく、国家だということを暗示している。タシは性器切除を実施しているアフリカ社会の女性たちすべての悲しみと犠牲を扱い、そのような文化にしがみついている社会に対し闘いを挑んだのではないかと思われる。

次のアダムへの要求についての文章からもタシが苦しむ女性の一人として社会という outside に「抵抗」していることがわかる—“. . . I knew I wanted my own suffering, the suffering of women and little girls, still cringing before the overpowering might and weapons of the torturers, to be the subject of a sermon . . . was she not crucified? Not in some age no one even remembers, but right now, daily, in many lands on earths?”「［前略］あたしはあたし自身の苦しみ、絶対的な権力と拷問社の凶器の前ですくんでいる女たちと女の子たちの苦しみについてを説教の主題にしてほしかったのです。［中略］女は十字架に磔にされてはいないか？それも、だれも覚えていないような昔のことではなく、今現在、毎日この地球の多くの国で」（259）。しかし、アダムがこのタシの要望に対し、“He said the congregation would be embarrassed to discuss something so private and that, in any case, he would be ashamed to do so.” 「信徒集会の人たちはそんなプライベートなことについて話し合うのはまずいと思うだろうよ、なによりぼくはそんな話をするのが恥ずかしい」（260）と言ったように、社会はこの社会的女性問題を個人的問題としか捉えていないのではないだろうか？

そしてタシは性器手術が女を支配しようとする父権制度の暴力にすぎないと悟ったとき、性器手術の施術者であるマリッサを殺すことでこの文化に抵抗する。重要なのはタシが単に個人的憎悪によりマリッサを殺したわけではないということである。マリッサは “. . . her unfailing adherence to the ancient customs and traditions of the Olinka state”「［前略］彼女のオリンカ国家に古くから伝わる習慣や伝統に対する忠実さ」（141）が認められてオリンカの国家記念碑になった。言い換えれば、オリンカの伝統を象徴する人物ということである。その彼女を殺すということはオリンカの文化への抵抗であると言えよう。そしてタシはマリッサからツンガは自分が性器切除を行った女性の手で殺されるのが伝統的だという話を聞いたときに、“It is curious, is it not, that the traditional tribal society dealt so cleverly with its appreciation of the *tsunga* and its hatred of her”「伝統的な民族社会はいい評価を得てるツンガとその彼女に対する人々の苦しみ

に対する対処法を知っていたの。おもしろいでしょ？」（260）と思ったため、父権的文化である性器手術を受けた女性たちの憎しみを軽減するためにマリッサを殺害したとも考えられる。タシはマリッサ殺害について法廷で質問されたときに、“The razor to me was always associated with men”「カミソリはいつも、あたしに男を連想させた」（36）と思った。タシはカミソリでマリッサを殺害するつもりだったが、“Her sad stories about her life caused me to lose my taste for slashing her”「彼女の人生の悲しい話を聞いたために、彼女をカミソリで殺す気がなくなった」（260）と言っている。そして、タシはツンガについて次のように説明している—“. . . the *tsunga* was to the traditional elders merely a witch they could control, an extension of their own dominating power”「［前略］村の長老たちにとってツンガとは、たんに彼らがコントロールできる、彼らの支配力でどうにでもできる魔女でした」（260）。これら三つの引用からタシは男性優位主義的文化が彼女を精神的にも肉体的にも破壊したということを社会に伝えるために男性を象徴するカミソリでマリッサを殺害しようと試みたが、彼女も父権制度の犠牲者であることに哀れみを感じ、カミソリで殺すのをやめたと読み取ることができる。

タシがマリッサを哀れんでいることは、タシにより描写されたマリッサの様子からもわかる—“I glance at the bed and am startled by how small she looks. She seems to have shrunk. I glance at her face. It is alert, watchful. But not because of me”「あたしはベッドに目を移し、マリッサがとても小さく見えるのに驚いた。縮んでしまったようだ。あたしは彼女の顔に目を移す。それは油断のない、警戒した顔だ。でもそれはあたしのせいではない」（208）。さらにタシは次のようにも言っている—“Hers is an x-ray gaze. But then, so is mine, now. What is that shadow, there in the depths? Is it apprehension? Is it fear?”「彼女の視線はレントゲンの光のようだ。でも今じゃ、あたしの視線だってそうだ。奥にあるあの影はなに？あれは不安？恐怖？」（146）これらの引用からもタシが、マリッサが自分と同様に父権制度の犠牲者だと感じていると言えるのではないだろうか？

これらのタシの「抵抗」の例から、白人至上主義に対して、そしてオリンカの父権的文化に対して自滅も含め、文字通り命がけで outside と闘うという「抵抗」をしたということがわかる。タシが処刑されるとき、“And satisfied”「満たされた」（264）と言った意味は、「抵抗」という勝利をしたからではないかと考える。

3.2　セリーの抵抗

次に、セリーの父権主義に対する抵抗について分析していく。第 1 章で述べたよう

にセリーは幼い頃からキリスト教信者である。しかし、自分の信じていた神が男であり、白人であり、Mr.___のようだと気づき、今まで信仰していた神に抵抗するようになる。セリーが今まで神のことばかり考えていたために周りのものに気づくことができなかったと知る場面がある—“Trying to chase that old white man out of my head. I been so busy thinking bout him I never truly notice nothing God make”「頭の中からあの年取った白人の男を追い払おうとしている。あたしはその男のことばかり考えていたもんだから、神がつくったものに気づかなかった」（*The Color Purple* 198）。そしてセリーは男性中心の社会では本当の世界が見えてこないことをシュグに教えてもらう—“Shug say, You have to git man off your eyeball, before you can see anything a’tall”「すべてのものが見えるようになるには、男を目玉から追い払うことだとシュグが言った」（198）。この二つの引用を言い換えると、神、男性、または男性優位的考えがあるために本当の物の見方、考え方ができずにいたということである。そして神と「闘う」方法をシュグに教わる台詞が次の通りである—“He try to make you think he everywhere. Soon as you think he everywhere, you think he God. But he ain’t. Whenever you trying to pray, and man plop himself on the other end of it, tell him to git lost, say Shug. Conjure up flowers, wind, water, a big rock”「男たちは男が至る所にいるとあんたに思わせようとしてるんだ。男がどこにでもいると思うころには、あんたは神は男だと信じるようになっている。でも男は神じゃない。お祈りするとき、そしてあんたの祈りの向こうに男がどすんと座っているとき、そこをうせなって言うんだ。花、風、水、大きい石の力を借りて彼を追い払うんだ。とシュグは言った」（198）。父権主義があるために神が男性だと考えたり、男がまるで神のよう、つまり父権的な人物になっているときは、男性中心的考え方を自然の力を借りて振り払うということは、父権主義に「抵抗」するということである。

この「闘い方」をシュグに教わったセリーは次のようにコメントをする—“He been there so long, he don’t want to budge . . . Us fight. I hardly pray at all. Every time I conjure up a rock, I throw it”「彼はほんとうに長いことそこにいたから、動こうともしない。［中略］あたしたちは神と闘ってます。あたしはもうほとんどお祈りをしてません。魔法で石を呼び出しては、神に投げつけています」（199）。ここでセリーは今まで信仰していた男であり、白人であり、Mr.___のような神と闘っているとはっきり断言している。これらの引用から神がセリーの男性優位主義の考えの中に存在し、その神に縛られて生きてきたセリーが神と闘うようになることがわかる。つまり、セリーの inside の中にしみ込んでしまった父権的考えに「抵抗」するようになったということがわかる。シュグはセリーに啓示的なことを言う—“God is inside you and inside everybody else. You

come into the world with God. But only them that search for it inside find it”「神はあんたの中にいる。すべての人の中にいるの。神とともにこの世に生まれたのさ。でも、それを捜す人だけがみつけることができるんだ」(196)。この場面から青い鳥が実は側にいたように、神に助けを求めるばかりではなく、神を探し求める、つまり、自分自身と向き合い自分の神を信じること、言い換えれば自尊心を持つことが大切だということをアリス・ウォーカーは伝えたいのではないかと思う。

次に Mr.___に対するセリーの抵抗について分析していく。第 1 章で述べたように Mr.___は父権的な人物である。ネッティが手紙で、“You’ve got to fight and get away from Albert.”「アルバートと闘って別れなさい」(127) と助言したように、セリーは Mr.___からの抑圧から解放され、自由に生きるために家を出るという「抵抗」をする。セリーがシュグと一緒に家を出てメンフィスへ行くとき、Mr.___に向かって、“It’s time to leave you and enter into the creation. And your dead body just the welcome mat I need”「あんたから離れて神の創造による世界にでていきたいのさ。あんたの死体は出発のドアマットにすぎないのさ」(202) と言っている。これは Mr.___からの父権的権威から解放されたいというセリーの意志を表現した彼女の大いなる眼覚めである。セリーが家を出て行くことに対して Mr.___が反対をしたときに、セリーは次の行動をとった—“Mr.___ reach over to slap me. I jab my knife in his hand”「Mr.___の手が伸びてあたしを打とうとした。あたしはナイフで彼の手を突いた」(203)。この引用からセリーの強い抵抗心が見受けられる。男性を恐がり、闘うことができず、父権的抑圧により自分を見失っていたセリーがこのようにして Mr.___と闘う姿は非常に感動的である。セリーは言う—“Until you do right by me, I say, everything you even dream about will fail. I give it to him straight, just like it come to me. And it seem to come to me from the trees”「あんたがあたしに謝るまで、あたしは言った。あんたが見る夢も含めたすべてのものが失敗におわるだろうよ。まるであたしの中から湧き起こってきたかのように、あたしは彼に真直ぐに向かった。木々のパワーがあたしに乗り移ったようだった」(209)。この引用からセリーが逃げずに闘う姿が窺える。これは Mr.___に対してだけでなく、自然の力を借りて、男であり、白人であり、Mr.___のような神とも闘っている姿なのではないだろうか？そして、自然の力を借り抵抗することによりセリーの中に神が現れたと読み取ることができる。

セリーがズボン作りを始めたことも父権主義に対する「抵抗」の一つである。Mr.___がネッティからの手紙を隠していたことにセリーが激怒し、Mr.___を殺そうとする場面が次のように描かれる—“Fore I know anything I’m standing his chair with his razor

open”「気づいたら、カミソリを開いて、彼の椅子の後ろに立っていた」(122)。3.1 で述べたようにカミソリは男性を連想させるものである。そして、“Man corrupt everything”「男ってのは何でも壊してしまう」(198) とシュグが言ったことを考察すると、カミソリと男性は共に何かを破壊する力を持つものである。セリーは Mr.___からの父権抑圧に男性的な道具を使って「抵抗」しようとするのだ。タシは社会へ「抵抗」したのに対してセリーの「抵抗」は Mr.___を代表とする男性との闘いであることがここでわかる。しかし、セリーは Mr.___への怒りを抑えるためにズボン作りを始めることが次の文からわかる—“But I really started it right here in your house to keep from killing you”「このズボン作りはあんたのこの家で始めたものなんだ。あんたを殺したくなる感情を抑えるためにね」(258)。そしてセリーは、“A needle and not a razor in my hand, I think” 「カミソリではなく針を手にして」(147) 生きることを決意する。これらの引用から、セリーはカミソリで destroy するという男性的闘い方からズボンを create するという女性的闘い方へ変化していることがわかる。セリーの気持ちも Mr.___への hate の感情から愛するものたちへ何かを作るという love の感情へと変化している。セリーが縫い物をしているところに Mr.___がやって来て、いったいセリーの作るズボンは何がそんなに特別なのかを尋ねたとき、“Anybody can wear them, I said” 「誰でもはけるってことよとセリーは言った」(276)。誰でも履けるということはつまり人種も性別も関係ないということである。そのような対立軸関係なく履けるズボンをつくるということは父権主義に対してのセリーの「抵抗」であると筆者は考える。

3.3　他の女性たちの抵抗

3.2 で論じたように、信仰していた神への抵抗、家を出て Mr.___と決別するという抵抗、ズボン作りを始めるという抵抗などセリーの抵抗はあくまで一個人の闘いでありながら、多くの女性や社会的弱者を代表するかのような抵抗である。とは言え、*The Color Purple* には自尊心を獲得するため、類似の闘いに挑む女性たちが描かれている。暴力を奮っても男性に負けずに強く生きるソフィアや、教育を受けることで自立していくネッティ、歌という芸術に身を投じることによって自尊心を獲得していくシュグ、そしてシュグと同じく歌への才能を見つけハーポから独立していくメアリ・アグネスなど彼女たちの自立した姿、そして父権主義に対しての個々の闘い方を見て、セリーは自分自身を見つめるようになり、彼女の抵抗の仕方を獲得していく。

ここで彼女たちの抵抗の例の一つを考察していく。メアリ・アグネスがセリーたちと共に家を出るとハーポたちに告げたときのハーポとメアリの会話が次の通りである。

Listen Squeak, say Harpo. You can't go to Memphis. That's all there is to it.
Mary Agnes, say Squeak.
Squeak, Mary Agnes, what difference do it make?
It make a lot, say Squeak. When I was Mary Agnes I could sing in public.
「いいか、キーキー。おまえはメンフィスには行けない。それだけのことだ。
メアリ・アグネスよ、とキーキーが言う。
キーキーだろうと、メアリ・アグネスだろうと、何が違うってんだ。
あたしには大きな違いよ。メアリ・アグネスと名乗って、あたし初めて人前で歌えたんだから」(205)。

この引用からメアリ・アグネスがハーポからあだ名で呼ばれることを嫌悪していることがわかる。人を何者かとして名付けることは一種の支配である。名前とは無論自分に固有のものであるが、誰かから呼ばれる他者のものでもある。ハーポの女としてではなく、メアリ・アグネスとして、自分自身の名を名乗り、歌を歌いたいというメアリ・アグネスの主張はハーポからの父権的抑圧に対しての彼女の抵抗ではないだろうか？

次にソフィアとシュグの抵抗について考察していく。Mr.___が彼女たちの生き方について次のように述べている—"They hold they own, he said. And it's different"「彼女たちは屈しない強さを持っている。そしてそれは他のやつらとは違うんだ」(274)。この引用から彼女たちが他人とは異なった自分たちらしい生き方をしていることがわかる。虐げられても Mr.___のように弱者を苦しめることなく、共生の精神を持つ彼女たちの姿から黒人女性の根源にある強さが見受けられる。小説の後半でのセリーの気持ちが次のように表されている—"*I be so calm.* If she come, I be happy. If she don't, I be content. And then I figure this the lesson I was suppose to learn"「あたしはとても落ち着いた。彼女が帰って来たら、あたしはしあわせ。来なくても、あたしは満たされる。そのとき、あたしが学ぶべき教訓とはこのことだったのだと気づいた」(288)。この引用からセリーが心の平安を得たことが窺える。タシは抵抗という勝利をしたことに対し、「満たされた」と言ったが、それに対しセリーは自分の精神の安定に対して「満たされた」と感じているのである。このように彼女たちが「満たされた」ものは異なっている。

タシとセリーが父権的抑圧を耐え抜くことができた秘密とは「抵抗」である。ンバディがタシたちに読み上げた本の一節に、" 'they possess the secret of joy, which is why

they can survive the suffering and humiliation inflicted upon them.' "「黒人には喜びの秘密があり、それがあるから、彼らを苦しめる屈辱に耐えることができるのだ」(*Possessing the Secret of joy* 255) と書かれてあり、タシの処刑のときにアダムたちがその喜びの秘密とは抵抗であるとタシに伝えるシーンがある。タシとセリーは同じ父権抑圧に苦しみ、そして闘った勇敢な女性たちである。タシは性器切除を実施しているアフリカ社会の女性たちすべての犠牲と悲しみを背負い、社会という outside に対して「抵抗 resistance」し、一方セリーは一個人の闘いを周囲の女性たちの生き方から学び、父権抑圧により崩壊した自尊心を獲得していくという個人的でありながら全ての女性の「抵抗 fight」をした。彼女たちの男性優位主義に対する闘い方は異なるが、喜びの秘密である「抵抗」をしたからこそタシとセリーは父権主義を耐え抜くことができたのだと考える。

結論

本論文では父権主義への抵抗をテーマに論じてきた。第 1 章と第 2 章を通じてセリーとタシの苦境の根源が父権主義であることがわかった。論文で扱った二つの小説はセリーとタシに焦点を当てた一個人の物語だが、彼女たちの自尊心喪失は父権主義が原因であることから、キャロル・ハニッシュが述べたように "the personal is political" (ウェブサイトより引用) だと言うことができる。つまり、彼女たちの行動、発言、葛藤などの個人的なことがジェンダー、黒人全体などの大きなグループや民族、文化、社会の中の問題や権力関係といった政治的なことと深い関連性があるということである。

アダムがタシの苦境について考える箇所が次の通りである—"It had never occurred to me to think of Tashi's suffering as being on a continuum of pain. I had thought of what was done to her as something singular, absolute"「僕はタシの苦しみを、女の連動的な痛みと思ったことがなかった。彼女の身になされたことは、珍しい、固有なものと思っていた」(159)。この引用からタシが父権主義という女性の普遍的な問題に苦しんでいるのにも関わらず、アダムはそれをただの一個人の問題とでしか考えていなかったということがわかる。セリーやタシが受けていた父権主義に発する差別は特殊なもののように思われるが、父権抑圧によって苦しみ、自尊心が崩壊する女性たちは世界中に存在する。アリス・ウォーカーは彼女たちの経験を通して、アフリカやアメリカを含めた世界各国にある男性からの暴力や性器手術などの父権的習慣の撤廃を私たちに伝えたかったのであろう。

第 3 章で黒人女性たちの父権主義に対する抵抗について考察し、彼女たちの抵抗力が彼女たちの強く生きる力でもあることがわかった。*The Color Purple* と *Possessing the Secret of joy* の中では、根強い黒人女性としての魂の美しさを持ち、男性優位社会の中で勇敢に闘う女性たちの姿が描かれている。ンバディがタシたちに読み上げた本の一節に、" 'Black people are natural.' "「黒人は自然である」（255）と書かれている。普通、人は迫害されると、劣等感に苦しみ、精神的に満たされず、生き方が否定的になるはずである。しかし、彼女たちは父権主義に抵抗し、等身大の姿で自然のままに生き、精神的に「満たされる」という幸福を手に入れるのである。

二つの小説は様々な人生を歩んできた男女が一堂に会し、セリーもタシも心が満たされた状態で物語が終わる。どんな迫害を受けようが、共生し、闘うことによって魂は救われるのだ。力強い眼差しを持つアリス・ウォーカーは父権主義の罪を容赦なく描きながらも、魂の奥で人間の持つ可能性を信じているのである。

引用文献

Hanisch Carol. "The Personal is Political." Web. 3 December, 2012.
< http://www.carolhanisch.org/CHwritings/PIP.html>

Walker, Alice., *The Color Purple,* New York: Harcourt, 2003. Print

Walker, Alice., *Possessing the Secret of Joy,* London: Vintage, 2009. Print.

岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』、青土社、2000 年。

フランツ・ファノン、鈴木道彦・浦野衣子訳『地に呪われたる者』、東京：みすず書房、1996 年[Fanon, Frantz.*Les damnés de la terre*. Paris: Maspero, 1961]。

『クローディアの秘密』における家出の問題

中山　愛梨

序論

『クローディアの秘密』（*From the mixed-up files of Mrs. Basil E. Frankweiler*）は、E. L. カニグズバーグ（E. L. Konigsburg）によって、1967 年に発表された児童文学である。

主人公は、コネチカット州グリニッチに住む、十二歳間近のクローディア（Claudia）という女の子だ。彼女は、家族に対する毎日の不満や、オール 5 の優等生であり続けることに嫌気がさし、家出を決意する。しかし、単なる家出ではなく、クローディアはニューヨークのメトロポリタン美術館に、住むことにした。計画を立て、準備を行った彼女は、四人兄弟の内の、下から二番目の弟ジェイミー（Jamie）を連れ、家出をする。物語は、クローディアたちにとって重要な人物となる、フランクワイラー夫人（Mrs. Frankweiler）が、語り手となり、進んでいく。

メトロポリタン美術館に住み始めたクローディアとジェイミーは、ある日ミケランジェロ・ブオナローティ（Michelangelo Buonarroti）が制作したのではないかと言われている、「天使の像」を見る。天使の像は、フランクワイラー夫人によって、美術館へ寄贈されたものだった。像を見たクローディアは、なぜか惹きつけられ、像について調べ、像の制作者は誰なのか、秘密を解き明かそうとする。この秘密を解くことで、クローディアは家出をした理由、また家に帰る理由を見つけようとした。

クローディアは、“An answer to running away, and also to going home again, lay in Angel” 「家出のこたえも、家に帰るこたえも、天使の中にある」（76）と考えている。では、家出をして「天使の像」の秘密を知ったクローディアが得た、家出のこたえと、家に帰るこたえとは何なのだろう。

第 1 章では、クローディアの家出前の日常、そして十二歳間近という年齢から、クローディアの人物像を探る。第 2 章ではクローディアが被っている仮面と仮面の認識について考察する。第 3 章では、クローディアが美術館を家出先に選んだ理由と、ミケランジェロと関係性について述べる。そして、クローディアが天使の像に見出した、家出のこたえと、家に帰るこたえを解いていきたい。

第 1 章　クローディアの人物像

1.1　家出前のクローディアの日常

クローディアが家出した理由として、語り手のフランクワイラー夫人は、“She was the oldest child and the only girl and was subject to a lot of injustice”「クローディアは一番上の子で、たったひとりの女の子だったから、不公平なことが多かった」（12）と言う。不公平とは、弟たちがやらないこと、たとえば一番下の弟ケビンの面倒をみたり、食器の準備をしたり、と一人手伝いをしなければならない状況を指している。クローディアは、長女だからと一人手伝いをさせる両親や、何も手伝いをしない弟たち、そして自らの姉の立場を不満に思ったのだ。彼女は、自分と弟たちとの間には両親からの扱いの差があるのを感じていた。

また、夫人は、“And, perhaps, there was another reason more clear to me than to Claudia. A reason that had to do with the sameness of each and every week. She was bored with simply being straight-A’s Claudia Kincaid”「クローディアよりも私のほうがはっきりとわかる理由があったのかもしれない。毎週同じことをしなければならないということだ。彼女はただオール 5 のクローディア・キンケイドでいることにうんざりしたのだ」（12）と分析した。クローディアは優等生であり続けることを放棄したかったのだ。

家出前のクローディアの日常は、家では弟の面倒を見て、両親の手伝いをし、学校ではオール 5 の優等生として、良い子であるように振る舞っている。しかし、クローディアの中には不満が積もっていく。そして、彼女は不満を解消するために家出を決行した。子どもが家を出ることについて、高田は『アメリカ文学のなかの子どもたち』の中で、「子どもは、母と家によって象徴される、見慣れた世界の保護された領域から軽やかに身をそらして、果てしなく広がる「未知の土地」（terra incognita）へとその足を踏み入れようとする。……遠方の土地はその吸引力で子どもを招き寄せ、魅惑する。極端な場合は、家出へと駆りたてる。これはいわばタブーへの挑戦である。」（13-4）と述べている。

優等生として今まで行動してきたクローディアが決行した家出は、彼女が優等生だったからこそより強く、タブーを犯したと印象付けられる。家出は、クローディアが不満を抑えられなくなった結果でもあり、また優等生であるかのように見えていたクローディアが実は、内心で家出というタブーを計画するような子だった、という表われにもなった。

クローディアの優等生以外の一面は、次のことからも伺える。

フランクワイラー夫人が、“She was cautious”「彼女は慎重」（19）で、“Planning long and well was one of her special talents”「長い時間、じっくり計画を立てるのは、クローディアの特技の一つだった。」（13）というように、彼女は慎重で、計画的で、ジェイミーを、お金を持っているからという一つの理由で、家出のお供に連れてくる、強かさを持っている。さらに、大人しく弟の面倒をみていると思われたクローディアは、一番下の弟ケビンを学校まで連れて行く役目を負ったとき、ケビンから次のように言われる。“ ‘I wanna walk with Stevie,’ Kevin cried”「「ぼくはスティーブと歩きたい。」ケビンは泣きだした」（20）。さらに、“ ‘I wish it could be Steve’s turn every week,’ Kevin whined”「毎週スティーブの番ならいいのに。」ケビンは泣きごとを言った」（20）と、この様子ではクローディアがケビンから慕われているようにはみえない。

クローディアは、学校や家の中では、優等生の良い子であり、ケビンからみると怖いお姉さんであり、夫人から見ると強かな女の子だ。同じクローディアでも、周囲の人々は彼女から受ける印象が異なっている。それは、人間の多面性を認めるならば当然のことだ。だが、『クローディアの秘密』において、クローディアが優等生以外の様々な面を見せることは重要な部分だ。なぜなら、クローディアは、“She was bored with simply being straight-A’s Claudia Kincaid”「彼女はただオール 5 のクローディア・キンケイドでいることにうんざりしたのだ」（11）と、はじめは優等生であることが印象付けられていた。しかし、毎日が同じことにあきた彼女は、日常のクローディアではなく、“different”「ちがう」（117）人になることを望んでいるからだ。

ただの優等生であり続けることを拒み、変わろうとしているクローディアが、“she was one month under twelve”「十二歳にひと月たりない」（12）年齢なのは、変革の大きな要因だ。十二歳という年齢は、著者カニグズバーグにとって無視できない年齢のようだ。この年齢について次項で言及していく。

1.2　12 歳と「仮面」を彫ること

家出によって、メトロポリタン美術館へ忍び込んだクローディアは、天使の像の秘密を知り、家出前とは、“different”「ちがう」（117）人になることで、家出を終わらせる。クローディアが秘密を知ったことに対して、夫人は、“ ‘Returning with a secret is what she really wants. Angel had a secret and that made her exciting, important . . . . Secrets are safe, and they do much to make you different. On the inside where it counts’ ”「秘密をもって帰ることが、クローディアの望みなのよ。天使には秘密があったから、クローディアをわくわくさせたし、重要にもさせたのです。……秘密は安全で、人をちがうものにする

のに大きな力をだすわ。人の内側で力をもつのね」（117）と言う。これらの言葉から、夫人は、クローディアが家族への不満や、優等生でいることに嫌気がさして家出をしただけではなく、クローディアに本当に必要なものは何かを理解していることが伺える。家庭内の扱いの差を単に解決するだけではなく、クローディア自身に、家出前とは違った内面の変化が必要なことを、夫人は見抜いていたのだ。

なぜ、家出前とは異なる変化が、クローディアには必要だったのか。それは、夫人が言うように、“Claudia was tiptoeing into the grown-up world”「クローディアは、つまさきだちに大人の世界に入りつつある」（111）からだろう。クローディアの十二歳頃の年齢について、著者カニグズバーグは『トーク・トーク　カニグズバーグ講演集』の中で、「十二歳というのは特別な年齢です。それは子ども時代の終わり、そして、人生の四月です。四月はもっとも残酷な月、そして十二歳は、もっとも残酷な年齢です。十二歳という年齢は感情発達の分水嶺なのです」（カニグズバーグ 256）と述べている。子どもから大人になる境目にいるクローディアは、不安定な存在だ。クローディアが、クローディアであると示せる確固たる何かがなければ、多くの子どもたちが大人になりつつある中で、周囲に埋もれてしまうだろう。クローディアは、周囲と同じであることを嫌がる子どもだ。クローディア以外にも大勢いるであろう優等生の役目を、放棄したがったことからそれは読み取れる。著者はさらに次のように言う。

> 十二歳が子どもたちが自分たちの仮面を彫る年齢であるように思われます。それは仲間集団が引っぱりはじめる、それも強く引っぱりはじめる年齢です。もしも仮面が深く彫られなければ、もしもその素材がよくなければ、もしも仮面に独自の輪郭を表す夢のベールがかぶさっていなければ、もしも仮面が外に放り出され、仲間の手で勝手に色を塗られたり、こすられてのっぺらぼうになったりしたら、そういう仮面はけっして、けっして実際には、そして本当にはその人自身のものにはならないでしょう。（カニグズバーグ 257）

ここで著者の言う仮面とは「子ども時代の面影を伝える」（カニグズバーグ 254）ものだ。子どものときに経験したことは、後々にも影響を与えていることが多い。子ども時代に、自分の中で確立されたものは、成長してからその人を支えるものになる。それを持っているから自分である、ということに必要なものなのだ。

つまり、子どもから大人へと成長しつつあるクローディアにとって、天使の像の秘密を知ることは、クローディア自身を形成していくために重要な要素だった。秘密が

心に及ぼす作用について、『児童文学キーワード』で谷本は、「「人の心にあって他人とは違う存在にさせ、内側で力をもつ」秘密とはそもそも何なのか。もとよりこのことに簡単に答えることは難しい。ただここで秘密という言葉で示されているものを、人間が生きていくうえで心の支えとなるアイデンティティそのものととると、それなりに納得できるようである」（谷本 36-7）と述べる。そして「アイデンティティは「むしろ他人とちがうものに求められる傾向がある」という」（谷本 37）。これら谷本の言葉をクローディアに当てはめると、クローディアを支えているものは、家出経験によって得た秘密である。彼女には、人々にとって謎である、天使の像の作者を知っている秘密があり、またメトロポリタン美術館で暮らしていた秘密があり、ジェイミーとこっそり作った、フランクワイラー夫人を二人のおばあさんにするという秘密がある。家出から家に帰るまでの間、日常のオール 5 のクローディアでは経験できなかったことを経験した彼女は、著者のいう「仮面を彫る年齢」に差し掛かった時期に自身がクローディアであるという確かな証明を手に入れた。クローディアがクローディアであることの証明は彼女自身ができるだけでなく、ともに秘密を知るジェイミーや夫人も、秘密の共有者としてクローディアの心を支えている。そしてアイデンティティの一つを形作るのだ。

第 2 章　クローディアの被る「仮面」

カニグズバーグは「仮面」を、その人特有の個性や性格を表すものの喩えとして用いた。そして「仮面」を彫る、または作るとは、たとえば独自の彫り方や、周囲の人が思いつかない模様や装飾などを施し、仮面を彫りあげていくことで、自分らしさ、つまり個性を出そうとしていることを指している。カニグズバーグの喩えをもとに、第 2 章ではクローディアが被っている仮面について考察していく。

2.1　クローディアの存在を証明するための「仮面」

家出をして多くの秘密を手に入れたクローディアは、「自分だけが知る秘密」という材料で作られた仮面を手に入れた。この仮面は、クローディアの存在を確かなものにする役割を果たす。さらに前述したように、クローディアが自らの存在を証明するだけではなく、彼女と秘密を共有しているフランクワイラー夫人やジェイミーも、クローディアがクローディアであることの証人になる。フランクワイラー夫人は、クローディアたちが知りたがっていた天使の像の秘密を明かし、“ ‘you give me the details of

your running away, and I'll give you the sketch' "「あなたたちは私に家出の話をして、私はあなたたちにスケッチをあげる」（116）とクローディアたちに取引を持ちかける。夫人はそれぞれの持つ秘密を共有しあうことで、クローディア、ジェイミー、夫人の間に秘密を軸にした同盟関係を生み出した。クローディアに、仮面を彫るための材料を与えたのだ。

クローディアの家出は、同じ年の子や優等生の子とは異なる秘密の経験を彼女にもたらした。彼女の経験は彼女だけが知るものだが、「クローディア一人が知っていること」のみが、クローディアを証明するのには少し心許ない。なぜなら、周囲に疑いを持たれ、またクローディア自身が疑いを持ってしまえば、彼女を証明できるたった一人しかいない証人は消えてしまうからだ。自分だけしか知らない秘密は、たしかに内側で力を持ち、ほかの人とは違うという感覚を生み出す。しかし、自分一人しか知らない秘密は自身の中だけで完結してしまい、ほかの人から見れば秘密を持つ前後も何の変化なく見える危険性をもつ。クローディアが求めているのは、家出前とは異なる変化であり、優等生ではないクローディアになることだ。そのためには周囲の人間に、今までとは違うと認識させなければならない。クローディアには内面の変化のほか、周囲の人の認識の変化も起きなければならなかった。だからこそ認識の変化を促すために、秘密で彫られた仮面をつけ、クローディアらしさをみんなに見せることが必要だったのだ。

そこで夫人によって生み出された同盟関係は、クローディアがクローディアである証明になる。秘密を知っている者が複数いることで、秘密そのものの存在が明確になり、同盟者同士が互いに「あの人は秘密を持っている」と認識しあうことで、秘密を持つ人の存在も周囲に埋もれず明確になる。秘密を得たクローディアは物語の最後に、人は秘密をもつことでどうなるかを分析する。フランクワイラー夫人が天使の像を安い値段でなぜ売ったのか、というジェイミーの問いに対して彼女は、" 'Because after a time having a secret and nobody knowing you have a secret is no fun. And although you don't want others to know what the secret is, you want them to at least know you have one' "「人が秘密を持っていても、その人が秘密を持っていることをだれも知らないと、おもしろさがなくなってしまうからよ。それで、その秘密が何かは人に知られたくないけど、少なくとも秘密を持っていることは、人に知られたくなるのね」（123）と答えた。

クローディアは秘密を共有することで、秘密の存在を妄想ではなく本物であると明確にし、秘密によって彫られた仮面を周囲に認識させるようにしたのだ。

2.2　クローディアがつけている偽物の「仮面」

カニグズバーグは、十二歳を「仮面を彫る年齢」であるとした。子どもから大人へと変化しつつある年齢で、自分自身をしっかりと形成していく時期だからだ。前章では、クローディアは秘密を手に入れることによって、仮面を彫ることができたことを述べた。秘密という大きな要素によって彫られた仮面は、クローディアを家出前のただの優等生から、内面に変化を起こした異なる人物へと変えた。ここでの仮面は、人物を異なる人物へと変える役割を果たしている。

しかし、仮面には人物を異なる人物へと変えるだけではなく、ほかの作用もある。著者は仮面について、「仮面をつけた人たちは自分たちが想定した仮面の人物を見せているのか、それともそれぞれの素顔をみせているのか」（カニグズバーグ 233）と疑問を投げかけている。

ここで、クローディアの仮面に注目したい。彼女が手に入れた秘密によって彫られた仮面は、クローディアが大人になっていくために必要な仮面だ。だが、仮面は成長しつつある子どもだけに、効果をもたらすものではない。子どもにも、大人にも仮面の効果は作用する。クローディアも例外ではないだろう。内面の変化という形で、クローディアは自分自身を確固たるものにするために個性を表せる仮面を欲しがっていた。彼女は周囲の人に埋もれないようにしたかったのだ。だが、家出前の日常にいたクローディアは、仮面を持っていなかったのだろうか。答えは、クローディアは家出前にも仮面を持っていた、と考えられる。第 1 章で述べたように、彼女の日常は、毎日同じオール 5 のクローディアでいることだった。優等生の仮面は、両親や先生に向けられたものだ。他方、慎重で計画的な面を見せることもあれば、弟ケビンに対して怖い面をみせることもある。クローディアは優等生の仮面をかぶりながらも、その下には様々な面を隠していた。

では彼女はすでに仮面を持っていたにも関わらず、なぜ優等生の仮面を捨てて、ほかの仮面を欲しがったのか。理由の一つは、優等生はクローディア以外にもいて、「優等生の仮面」だけでは、ほかの優等生の子たちの中に埋もれてしまうからだ。個性を表すはずの仮面が、ほかにも優等生がいることで、個性ではなくなってしまう。

だが、仮面を彫る観点から考えると、別の理由も見えてくる。それは、優等生の仮面が、クローディア自身によって彫られたものではないから、だろう。優等生のレッテルは、その人本人がつけるよりも、周囲の人がその人の行動や性格から判断し、自然と決めていることが多い。周りがクローディアを優等生と思うほどに、クローディアは本来の姿を優等生のレッテルに隠されてしまった。優等生以外にも様々な面を持

っていたはずのクローディアは、周囲に自然とクローディアは優等生だ、と印象づけてしまった。そして、周囲からの期待の目によって、クローディアは優等生のレッテルによって上書きされた仮面を被り続けなければならなかったのだ。

カニグズバーグは「仮面の役割は誇張にあります」（カニグズバーグ 264）と述べている。優等生の仮面を被る前のクローディアにとって、優等生である性格は数ある性格の中の一面にすぎなかった。仮面を被ることによって、その役目はより強調されて、クローディアが優等生ではなくなることを許しがたい状況にしてしまったのだ。

2.3　クローディアが「仮面」を被っていることに対する認知度

クローディアは優等生とは違ったものになるために家出をする。彼女にとって優等生は、捨ててしまいたい仮面だ。そして、クローディアが優等生であることについて、フランクワイラー夫人やジェイミーは、優等生がクローディアの本来の姿ではないと知っている。つまり、クローディアが優等生の仮面を被っている（被らされている）と認識している。また、クローディアの弟ケビンも、第 1 章で述べたようにクローディアが弟の面倒を快く見る姉だとは思っていない。

しかし、クローディアに本来近しいはずの両親は、クローディアが優等生の仮面を被っているとは認識していない。両親にとってクローディアは、弟の面倒を見てくれる優等生の良い子であり、クローディアが仮面と思っているものを、彼らはクローディアの本来の姿だと認識している。クローディアが持ち合わせていた良い子の性格だけをみて、彼女の両親はクローディアに優等生であることを強要してしまったのだ。クローディアは期待に応えていたが、優等生の行動が周囲に浸透していくにつれ、クローディアはクローディアではなく、ただの優等生になってしまった。彼女は家出を決めた最初の頃、“Since she intended to return home after everyone had learned a lesson in Claudia appreciation, she had to save money for her return trip”「クローディアは、クローディアに価値があるという教訓をみんなが学べば家に帰るつもりだったので、帰りのお金を貯めなければならなかった」（12）としている。家出前の毎日が同じ優等生のクローディアに満足していなかった彼女は、ただの優等生であること以外に価値を見出してほしかったのだろう。優等生はクローディアではなくてもなれてしまう。クローディアにしかない価値を周囲の人、とくに両親に理解してもらうために、優等生を払拭できる仮面を求めたのだ。秘密によって彫られた仮面は、彼女にとって優等生の仮面を捨てて付け替えるために必要なものであり、また両親に優等生以外の別の価値を見せるために被るものだった。

クローディアは像の秘密を探っているとき、ジェイミーから“ ‘You started this adventure just running away. Comfortably. Then the day before yesterday you decided you had to be a hero, too’ ”「クローディアはこの冒険をただ家出するために始めたのでしょ。気楽に。だけどおとといになってヒーローにならないと、って決めたんだね」（93）と指摘される。それに対してクローディアは、“ ‘Heroine. And how should I have known that I wanted to be a heroine when I had no idea I wanted be a heroine?’ ”「ヒロインよ。自分がヒロインになりたいなんて考えもしない時に、どうやってヒロインになりたがっているってわかるの？」（93）と答えた。多くの人にとって謎だった天使の像の秘密を解き明かし、称賛を浴びる人のように、特別な人として扱われることをクローディアは望んだのだ。英雄願望は、ただの優等生ではないクローディアになりたいという想いとともに、家族の中で良い子として一人、弟たちとは違う扱いを受けていたクローディアの、自分にも目を向けてほしいという気持ちの表われだ。英雄になることはクローディアが見つけた別の価値の一つだったのだろう。

優等生ではない新たな価値ある仮面を彫るためにクローディアは家を出る。その家出先にメトロポリタン美術館を選んだのは、クローディアの考えた美術館を選択した理由以外にも意味があるように思われる。

第 3 章　美術館という家出先

美術館での天使の像との出会いは、彼女の家出経験の中でもっとも大きな出来事と言える。天使の像を初めて見たときのクローディアは、なぜ像に惹かれるのか理解していなかった。クローディアはなぜ、「ミケランジェロ」が作った「天使」の像に魅了されたのか、クローディアとミケランジェロの関係性や、象徴としての「天使」から理由を探っていく。ミケランジェロの芸術性を述べるにあたり、トルナイ（Tolnay）著『ミケランジェロ: 芸術と思想』や『世界伝記双書　ミケランジェロ』の中からルヴェル（Revel）、プラデル（Pradel）の言葉を引用する。また、象徴としての天使を探るために、シュトレーター=ベンダー（Ströter Bender）著『天使　浮揚と飛行の共同幻想』を参考にする。

3.1　芸術家としてのクローディア

クローディアの持っている秘密は、メトロポリタン美術館を家出先に選んだからこそ得られたものだ。物語のはじめで、“Claudia knew that she could never pull off the

old-fashioned kind of running away in the heat of anger with a knapsack on her back”「クローディアは、私にはかっとなって、リュックを背負って出ていくような昔式の家出なんか絶対にできない、と思っていた」（11）と、従来の家出方式を否定している。他の人とは違うことをしたいと考えるクローディアが、美術館を家出先にしたのは、谷本の言葉を借りれば、「心の支えとなるアイデンティティ」を生み出すのに、当然の選択だったのだろう。美術館は、芸術家の心の内を表現した作品が、それも価値あると判断されたものが展示されている場所だからだ。トルナイは芸術について『ミケランジェロ: 芸術と思想』の中で、ミケランジェロと同世代に活躍した、イタリアの知識人ベネデット・ヴァルキ（Benedetto Varchi）の言葉を引用している。「芸術とは、描かれる対象に関する内的イメージにほかならない。すなわち、芸術家の魂の中、つまり彼の想像力の中に宿るイメージにほかならない。このイメージが、物質に押しつけられるべき形態を決定する原理である」（トルナイ 149）。

ミケランジェロに限らず、多くの芸術家の魂が込められた作品がある美術館は、クローディアが仮面を彫るために得た秘密を見つけた場所だ。美術館はいわば、仮面の材料探しの場とも言える。仮面の材料を探していたクローディアは、快適さ以上に自らが仮面を彫る芸術家として、独自の個性を発揮する芸術家を尊敬し、また展示されている作品から自分の仮面に合う材料を求めて、美術館を家出先に選んだのではないだろうか。その美術館にある、数多くの芸術品の中からミケランジェロの天使の像に惹かれたのは、クローディアにどのような意味があったのか。

3.2　ミケランジェロとクローディア

カニグズバーグはインタビューにおいて、ミケランジェロについて次のように言っている。“I love the work of Michelangelo. And I have to tell you that I think he reached a pinnacle from which everyone had to move down. He just creates such an emotional impact. A person cannot look at his work without a visceral feeling of satisfaction. It's a real "gotcha." ”「私はミケランジェロの作品がとても好きです。彼は人々が到達できなかった頂点に到達したと、言わなければなりません。彼は感情に訴えかける衝撃をまさしく生み出します。人は喜びという直感的な感情なしに、彼の作品をみることはできません。それは本物の「わかった！」と感じるものです」。

ミケランジェロは生涯にわたり多くの作品を残し、現在でも彼の作品は名作として大切に扱われている。クローディアが感じた天使の像への感動は、カニグズバーグの言う直感的に感じた喜びだ。それは天使の像が、クローディアが探し求めたものを秘

めているという直感、また彼女がミケランジェロとどこか重なる部分があると感じた直感に起因する喜びなのかもしれない。

ミケランジェロの芸術は人々を魅了し、文献が数多く存在する。彼の芸術性について『世界伝記双書　ミケランジェロ』に記載された、プラデルとルヴェルの言葉を参考にしていきたい。「人々が到達できなかった頂点に到達した」とカニグズバーグがミケランジェロについて言うように、彼は芸術の世界で偉大なる人物として高みに上った。プラデルは「その主題、その様式、その技巧においてすらも、まわりからはるかに卓抜した彼が現れる。そして彼の死は、何人の模倣も許さぬある芸術の神秘を残し、彫刻家たちはその前でただ喘ぐのみである」（128）と述べている。卓抜した才能は人々に畏敬の念を起させるが、才能はときに人々からの孤立を促すこともある。芸術の頂点に達したミケランジェロは一人、ほかの多くの芸術家とは別の域に行ってしまったのだ。彼には芸術に没頭するあまり周囲が見えなくなることがしばしばあったようだ。しかし、ルヴェルの記述によると「極度の傷つきやすさと同時に、瞑想や作品凝視の必要からきていたミケランジェロの孤独癖は、他者への無関心をも軽蔑をも意味してはいないのである」（97）としている。芸術分野において、芸術家は他の芸術家たちに埋もれないように、独自性を発揮しなければならない。別の域へと達したミケランジェロは、ほかの人に埋もれないという意味では成功した芸術家だ。けれども、ルヴェルの記述のように彼は人からの孤立を望んでいたのではない。身分の低い人や、才能のあまりない芸術家たちに手を差し伸べたように、むしろ人との関わりを望んでいたようだ。彼は芸術家としてはほかの芸術家とは一線を画している。しかし、同時にその感受性の豊かさで人との関わりを恐れながら、人の輪に入ろうとしていたのだ。

芸術家としてのクローディアは、周囲に埋もれないように独自の仮面を彫りこまなければならない。人々とは異なる領域にいるミケランジェロをクローディアは尊敬し、彼の作品に惹かれた。またミケランジェロが芸術の世界でグループの外にいること、アウトサイダーであったことも、クローディアを惹きつけた一因になるだろう。クローディアとジェイミーは、“Both Jamie and Claudia had acquired a talent for being near but never part of a group”「二人ともグループのそばにいながらけっしてその一部にならない力を身に着け」（56）ていた。『クローディアの秘密』が賞を受賞した時のスピーチで、著者は本書を書いた経緯とともに、アウトサイダーについても述べている。「郊外の住宅地の暮らしがどんなかを。外は快適でも中は全然そうじゃないってことが、どんなにありふれたふつうのことか、……どんなふうにしたら慣習に従わないでいられるかとか、どうやったらアウトサイダーでいられるかを」（カニグズバーグ 23）。著者

はアウトサイダーであることを必要と考えている。だが “(Some people, Saxonberg, never learn to do that all their lives, and some learn it all too well)” 「（人によってはねサクソンバーグさん、一生かかってもそれができるようにならない人もいれば、それがうまくなりすぎてしまう人もいるのです）」（56）とフランクワイラー夫人が言うように、アウトサイダーであることを極めてしまうことも言及されている。

完全なアウトサイダーになってしまえば人々からは孤立してしまう。ミケランジェロが芸術の世界で、人とは異なる領域に行ってしまったことは芸術家としては成功であった。だが彼は芸術に没頭し孤独癖がついていたことを消すように、人との関わりを望んだ。家出前のクローディアも家族に不満を感じ、自分ばかりが不公平だと思っていた。また、周囲から優等生のレッテルを貼られ、こうあるべきと期待を背負っていた。そのため彼女は仲間外れの状態になっている。クローディアは仮面を彫る芸術家としては、アウトサイダーになろうとしている。だが優等生ではない価値を欲しがり、英雄願望があったクローディアは、人との関わりを欲しがっているようにみえる。その姿はミケランジェロと重なるようだ。

クローディアが惹かれた天使の像は、ミケランジェロの内面を表したものだ。トルナイによると、「彼は、人間の眼に映る通りに事物を再現しようとしたのではなくて、その事物の本質を、つまりそれらの外観ではなく、それらのイデアに応じた姿を表現しようとした」（144）とミケランジェロの芸術性について言っている。本質を表現しようとしたミケランジェロと、自らの個性、価値を仮面に彫ろうとしたクローディアは、天使に救いをもとめ、互いに像を通してつながった。像への憧れはクローディアの中で膨らみ、“ ‘I wish I could hug her’ ”「あの天使を抱きしめたい」（68）と思うようになる。天使との触れ合いについて、『天使　浮揚と飛行の共同幻想』の中でベンダーは、「天使との接触についての物語で顕著なのは、天使たちが非常に根源的な感覚の領域で活動しているということである。それは、例えば、包み込んだり、抱いたり、持ち上げたり、といった幼少期の感覚を思いださせる」（ベンダー74）という。大人になりつつあるクローディアが仮面に彫ろうとした、子ども時代の面影を伝えるものを、クローディアは天使との触れ合いによって思い出す。これは仮面の一つの材料となる。またベンダーは「新生児の肉体的感覚に近い冷たさ、馴染みなさ、寄る辺なさ、そして見捨てられた感じといった魂の状態においては、天使との触れ合いはしばしば、凍える（魂の）肉体に暖かさと安心感をもたらしてくれる愛情あふれる援助者との触れ合いのように感じられる」（75）ともした。

人との関わりを望んだミケランジェロとクローディアは、アウトサイダーでありな

がら、心の奥底で望んでいたつながりを天使に見出したのだ。クローディアにとってミケランジェロは共感できる偉大な芸術家であり、彼の作った天使の像はクローディアに仮面の材料、そしてつながりをもたらした。

結論

毎日が同じ日常で、クローディアは優等生として、姉として良い子でいるように周囲の期待に応えていた。彼女は与えられた仮面をつけて、本当の自分ではない感覚に不満を募らせていたのだ。不公平さは家族の中で彼女を孤立状態に追いやり、ついに優等生の仮面を捨てる決意をさせる。単なる優等生ではなく、クローディアという人物を証明するための何かが彼女には必要だった。そして家出した美術館で、クローディアに変化をもたらす天使の像と出会う。

天使の像はクローディアを、ジェイミー、フランクワイラー夫人と結びつけ、またミケランジェロともつないだ。クローディアは天使の像の作者が、ミケランジェロである証拠を見つけたとき、“Claudia looked at the sketch until its image became blurred. She was crying. At first she said nothing. She simply sat on the chair with tears streaming down her face, hugging the glass frame and shaking her head back and forth”「クローディアはそのスケッチを、形がぼやけるまでじっと見ていた。彼女は泣いていた。はじめ、クローディアは何も言わなかった。ただ椅子に座って、な涙が落ちるままにガラスのフレームを抱きしめて、頭を前後にふっていた」（114）。大人への成長過程で、子ども時代の面影を彫りこむクローディアと、天使の像の作者ミケランジェロとのつながりは、クローディアに秘密を知った喜び以上に、内面を表現する芸術家としての共感を呼んだのかもしれない。遠い昔にミケランジェロが作った作品は、クローディアの時代でも偉大な芸術品であり、多くの人を魅了している。過去から未来へと続く天使の像は、子ども時代の作品をつくっているクローディアの希望になったのだろうか。

家出前にはなかった秘密を得たことでクローディアは、“And although you don’t want others to know what the secret is, you want them to at least know you have one’”「秘密が何かは人に知られたくないけど、少なくとも秘密を持っていることは、人に知られたくなるのね」（123）と秘密を持つ心境を分析できるほどに成長した。内側で力をもつ秘密は、クローディアの心を成長させ、大人になっていくクローディアが、クローディアでありつづけるための経験を与えたのだ。

クローディアが、天使の像を通して得た、家出のこたえは、家族の中で優等生の仮

面を被って孤立していた状態から脱け出すことであり、家に帰るこたえとは、他者とのつながりを手に入れることだった。彼女は秘密の共有者であるフランクワイラー夫人や、ジェイミーとの絆を手に入れた。また家出をしたために優等生ではなくなり、両親から目を向けられるようになった。そして、仮面を彫る芸術家としてミケランジェロとつながることができた。

天使の像は、美術館で永遠に謎の存在のままだ。天使の像を見る人々は、像の外見にしか触れられず、像の本質、秘密にたどり着く可能性はほとんどないだろう。それは、秘密が知られることなく、神秘的な存在のまま、人々を魅了し続けることを意味する。一方で、クローディアは像の秘密、確実な証拠となる、像の作者ミケランジェロのスケッチを手にする。スケッチは天使の像にとって、存在を証明する力をもつものだ。像の秘密は、クローディアの秘密でもある。天使の像とクローディアの双方へ力を発揮する、このミケランジェロのスケッチは像とクローディアを結びつけ、さらにフランクワイラー夫人や、ジェイミーとも結びつけた。クローディアは、“ ‘I wish I could hug her”「あの天使を抱きしめたい」（68）と言ったが、最終的に涙を流して抱きしめたものは、像ではなくスケッチだった。ミケランジェロの考えそのものが表されたスケッチは、クローディアの内面に深く結びつき、秘密となって強い力を持ち続けるのだ。著者カニグズバーグの「大事なのは中側」（カニグズバーグ 25）という意図が、よく表われている。

引用文献・資料

De Tolnay, Charles. *Werk und Weltbild des Michelangelo.* Zurich: Rhein-Verlag, 1949. [シャルル・ド・トルナイ『ミケランジェロ: 芸術と思想』上平貢（訳）、京都 ： 人文書院、1982 年]。

Du Colombier, Pierre. *Collection Genies et Realites Michel-Ange.* Paris: Librairie Hachette, 1961. [ピエール・デュ・コロンビエ （ほか 7 名）『世界伝記双書　ミケランジェロ』若桑毅・若桑みどり（訳）、東京 ： 小学館、1983 年、ジャン=フランソワ・ルヴェル（Revel, Jean François）「ソネットが明かすある心の秘密」93-110 頁、ピエール・プラデル（Pradel Pierre）「大理石の創造者」127-146 頁]。

Konigsburg, E. L. *From the Mixed-up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler.* Great Britain: Puffin, 1974.

Konigsburg, E. L. *Talk Talk A Children's Book Author Speaks to Grown-ups by E, L. Konigsburg*. New York : Atheneum, 1995. [カニグズバーグ E. L.『トーク・トーク　カニグズバーグ講演集』清水真砂子（訳）、東京 ： 岩波書店、2002 年]。

Ströter Bender, Jutta. *Engel : ihre Stimme, ihr Duft, ihr Gewand und ihr Tanz.* Stuttgart : Kreuz Verlag, 1988. [ユッタ・シュトレーター=ベンダー『天使　浮揚と飛行の共同幻想』高木昌史（訳）、東京 ： 青土社、1996 年]。

河合隼雄『子どもの宇宙』岩波新書、1987 年。

高田賢一『アメリカ文学のなかの子どもたち　絵本から小説まで』ミネルヴァ書房、2004 年。

谷本誠剛『児童文学キーワード』中教出版、1987 年。

Author Interviews, Book Resources E.L. Konigsburg Interview Transcript. Web. 30 November, 2012. <http://www.scholastic.com/teachers/article/el-konigsburg-interview-transcript>

変装するスヌーピー
―アメリカの理想と現実について―

安井　紀々

序論

アメリカの漫画家チャールズ・シュルツ（Charles M. Schulz, 1922-2000）によって描かれた『ピーナッツ』（Peanuts）は、主人公チャーリー・ブラウン（Charlie Brown）を中心とする「ちびっこたち[i]」の日常生活を描いた新聞漫画である。1950 年に連載が始まってから 50 年もの間、人々に愛され続けてきた。作者が亡くなり、連載が終了してもなお、その人気は衰えない。その秘密は何だろうか。私は、個性的なキャラクターたちの中でも主人公以上の存在感を放つビーグル犬、スヌーピー（Snoopy）に着目し、彼の特徴の中でも「変装」という趣味に焦点を当てていく。

本論文では、スヌーピーの数ある変装の中から、市民にとっての非日常の世界における英雄（hero）として撃墜王、宇宙飛行士を、日常の世界で活躍する市民（common man）として小説家、若者、弁護士などを取り上げ、アメリカ市民にとっての理想や現実について、またそれを表現する『ピーナッツ』のユーモアについて考察していく。

まず第 1 章では戦争とそこで活躍する撃墜王を、第 2 章では宇宙開発計画とそれに貢献する宇宙飛行士を扱い、アメリカの理想や、市民にとっての非日常の世界で活躍する英雄についてそれぞれ論じていく。第 3 章では日常の世界において市民にとって身近な存在を扱い、市民生活の現実について論じることとする。

第 1 章　第一次世界大戦の撃墜王

第一次世界大戦の撃墜王フライング・エース（The World War I Flying Ace）が登場するコミックは、『ピーナッツ』の中でも最も人気の高い[ii]エピソードの一つである。

本章では実際に起こった戦争で活躍する空想のキャラクター、フライング・エースから、市民の視点で描かれる戦争と、非日常を題材にすることによるユーモアを考察していく。

1.1　フライング・エースの誕生

第一次世界大戦はいわばヨーロッパの戦争であり、アメリカ国民にとっては身近な

出来事ではなかった。1910 年代のアメリカといえば、資本主義下の急速な工業化により、社会をその経済体制に対応させようとする革新主義が広まっていた。

アメリカ人にとって非日常であり、海外の事件である第一次大戦を、シュルツはどうしてコミックの舞台に選んだのだろうか。

> The World War I Flying Ace took off one day late that summer of 1965 while Sparky[iii] was at the drawing board and the thirteen-year-old Monte came in with a model plane. . . . And then it came to him: Why not put Snoopy on the doghouse and let him pretend he's a World War I flying ace? But Monte always claimed that it was he who first suggested the idea of Snoopy as the pilot. Sparky denied it just as frequently, only conceding in the last year of his life that Monte "inspired it." Either way, Schulz admitted, "I knew I had one of the best things I had thought of in a long time." （Michaelis, Schulz 393）

1965 年の夏のある日、フライング・エースは離陸した。スパーキーが画板に座り、13 歳のモンティが戦闘機のプラモデルを持って部屋に入ってきた時だ。［中略］そして彼は思いついた。スヌーピーを犬小屋の上に座らせて、彼に第一次大戦の撃墜王の真似をさせてみたらどうか？しかしモンティはいつも、スヌーピーをパイロットにするアイデアを出したのは自分だと主張した。シュルツは頻繁にそれを否定しており、モンティは「ヒントをくれたのだ」と生涯最後の年に譲歩しただけだった。どちらにしても、「長年考えてきた中で最高のアイデアのひとつだと確信した」とシュルツは認めた。

シュルツの息子モンティは、第一次大戦の戦闘機のプラモデルに夢中になっていた。シュルツ自身、第一次大戦当時はまだ生まれてもいなかったが、コミックにおける戦争の描写には彼も召集された第二次大戦での経験が踏まえられている。幼い頃から漫画家を志し、冒険漫画家に憧れていた彼にとって、これは最高のひらめきだったのだろう。彼は、スヌーピーによってその夢を実現させたのだ。実際、フライング･エースが登場してから、読者だけでなくシュルツ自身もスヌーピーと一緒になって楽しんでいることが分かる。[iv] 彼が何か違う面白いことをやってみたくなった時、スヌーピーはまさに救世主だったのだ。

（Schulz, 1967）

1.2　レッド・バロンという存在

レッド・バロン（Red Baron）とは、第一次世界大戦の英雄と称されたドイツ軍のマンフレート・フォン=リヒトホーフェン（Manfred A. F. von Richthofen, 1892-1918）のことを指す。味方に分かるよう自らの戦闘機を赤く塗っていたことからこの名で呼ばれた。当時まだ 20 代だった若き英雄は、撃墜機数 80 機という栄誉を残し 1918 年 4 月 21 日に撃墜され死亡した。[v]

勝利を求めるゲームとしての戦争というよりも、もはやただの殺し合いと化していた地上戦とは異なり、空中戦では騎士道精神が生きていた。[vi] リヒトホーフェンたちの目的は相手を殺すことではなく、あくまで敵機を撃墜することだった。そうして実績を積み上げていったことが、彼が英雄と呼ばれる所以であろう。リヒトホーフェンは仲間やヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）だけでなく、敵軍からも一目置かれる存在だった。

スヌーピー扮するフライング・エースが撃墜しようと奮闘している相手こそ、まさにこのレッド・バロンである。実在の英雄をライバル視するこの架空の撃墜王は、紳士的な振る舞いとライバルに対する攻撃的な一面を合わせ持ち、愛機ソッピーズ・キャメル（Sopwith Camel）に乗って空を華麗に飛び回り、読者の人気を博していく。

赤という攻撃的な色と、Baron（男爵）というきわめて中世ヨーロッパ的な文化を思わせる「爵位」の組み合わせから、アメリカン・コミックの敵役にはぴったりの「非アメリカ的ライバル像」が浮かび上がる。レッド・バロンは他の大人たちや隣に住むライバル猫と同じくコミックに姿を現すことは一切ないが、懲りずに何度も戦いを挑んでくるフライング・エースをあざ笑うかのように撃墜してしまう。そして、敗れた撃墜王はライバルに対しこう吐き捨てるのである。"Curse you, Red Baron!"「くたばれ、レッド・バロン！」[vii]

1.3　アメリカ人と戦争

第一次世界大戦はアメリカ人にとって「海外の出来事」だった。同様に、1941 年の太平洋戦争から参戦した第二次大戦でもアメリカの国土が戦場になることはなく、犠牲者も他国に比べ比較的少なかった。アメリカが加わった連合国は見事勝利し、1945 年に終戦を迎えた。アメリカはこの戦争で世界にその脅威を見せつけたのだ。そして国民は、国土が荒れるような悲惨な戦争の現実を見ることなく、「アメリカは強い国」というイメージを植えつけられた。また、海外で激しい戦争が繰り広げられている一方で、アメリカ国民は軍需景気の恩恵にあずかっていた。そのため、一般市民にとって戦争に対する泥沼、残酷といった悲観的印象は薄かったのではないだろうか。歴史学者の有賀夏紀は、『アメリカの 20 世紀』で「第二次大戦は確かにアメリカ社会を変えたが、アメリカ人の価値観までを変えたわけではなく、国民のアメリカ民主主義、アメリカ的生活様式への信念はむしろ強化された」（下 78）と述べている。かつてベーブ・ルース（George H. "Babe" Ruth, Jr., 1895-1948）やリンドバーグ（Charles A. Lindbergh, 1902-1974）などの英雄たちによって体現された、成功や発展を望む「アメリカン・ドリーム」は、この頃から一般市民にとっても理想として深く根付いてきたのかも知れない。

しかし、『ピーナッツ』においてはどうだろうか。アメリカの英雄フライング・エースは、ライバルを撃墜し脅威を見せつけることができただろうか。否、彼はいつだって非アメリカ的ライバルに勝つことはできない。実はこれが、シュルツいわく『ピーナッツ』そして人生の真理、敗北の法則なのだ。自分は必ずレッド・バロンを撃墜できると信じて何度も挑むものの、その度に必ず失敗に終わってしまう。毎回失敗して終わるにもかかわらず、次のエピソードはまた挑戦から始まり、そうしてまた失敗に終わる。実際は思ったように上手くいかないのが一般市民にとっての現実であり、この描写が彼らの共感を呼んでユーモアが生まれる。マンネリ化したオチも、あまりにも続くとそれが面白さに変わっていく。ベーブ・ルースらがいわゆる「アメリカの英雄」のシンボルならば、フライング・エースは英雄になりきれなかった人たちのシンボルといったところだろう。[viii]

1.4　ベトナム戦争がもたらしたもの

戦争に対して特にマイナスの感情は持っていなかったアメリカ国民だが、大戦を終え冷戦に突入すると、ついに彼らの価値観を変える現実に直面する。ベトナム戦争へのアメリカ介入である。1954 年に南北の境界が引かれて以来、ベトナムでは米ソの対

立が 20 年近くにわたって繰り広げられた。当時のアメリカ大統領ジョンソン（Lyndon B. Johnson, 在位 1963-1969）は、偉大なるケネディ（John F. Kennedy, 在位 1961-1963）の政策であるベトナム介入を引き継ぐことで、後継者としての自分に対する国民の信頼を確保しようと考えていたのだろう。国民のほとんどはアメリカの自由と民主主義が正義だと信じており、自由世界の指導者としてアメリカがベトナムの親米政権を支持することに異論はなかった。[ix]

しかし、状況は以前とは違っていた。大戦後からアメリカの一般家庭にもテレビが普及しており、このメディアによってベトナム戦争の様子は連日報道された。泥沼化していく残酷な殺し合いが、この戦争で初めて一般市民の目に映ったのだ。これまで海外の出来事だった悲惨な「戦争」という現実が、ついにアメリカ国民に突きつけられた。さらに、国内では黒人たちが自由を求める公民権運動が活発化していた。国外の戦争と、国内の公民権運動という混乱の間で、一般市民たちは経済的・精神的に動揺した。そして何も生み出さない戦争に疑問を感じ、やがて反戦運動に乗り出した。

これまで面白おかしくライバルと戦いを繰り広げてきたフライング・エースも、こんな時代ではコミックに顔を出しづらくなってしまった。実際、残酷な戦争をコミックにするなんて不謹慎だという読者からの批判をシュルツはたくさん受けた。アメリカ国民たちは戦争に対し、完全に神経質になっていたのである。それ以来、愛機ソッピーズ・キャメルに乗ってレッド・バロンを撃墜しに行くスヌーピーは以前ほどコミックに姿を現さなくなっていった。

そして 70 年代頃から、フライング・エースのエピソードは戦争の背景描写に移行した。戦場となったフランス[x]で、マーシー（Marcie）演じるフランス娘に出会ったり、ルートビアを飲んだり。変わったのは舞台だけではない。彼が流行病にかかった時はお見舞いのカードを送ってくれ、逆にフライング・エースからは誕生日ケーキを贈るなど、レッド・バロンとの関係は良好だ。彼らの騎士道精神は、戦いの時以外はお互いを尊重し合うという形で生きていたようだ。こうした描写によりフライング・エースはまた人々に受け入れられ、コミックが終了してもなお長く愛され続けるキャラクターとなった。

（Schulz, 1986）

フライング・エースのエピソードの面白さは、空想らしくない空想世界にあるとも言える。空想で敵に撃たれれば実際に犬小屋に穴が開いて煙が上がり、時には破壊されてしまうこともある。このスヌーピー独特の空想世界は、フライング・エースが登場する頃までに彼が何でもありの存在となっていたからこそ成立するのだろう。

『ピーナッツ』全体に漂う敗北の法則によって宿敵レッド･バロンには絶対に勝てないフライング・エースは、前述の通りアメリカの一般市民の共感を呼ぶ。第二次大戦での勝利や軍需景気による経済的成功、資本主義随一の軍事大国化といった、アメリカの理想を形成した戦争という非日常の世界で負けてばかりいる主人公は、物事はそう簡単に上手くはいかないという一般市民にとっての現実、いわば彼らの日常を表している。この理想と現実のギャップと主人公への共感、そしてコミックにはお馴染みの繰り返しの法則によって毎回同じようなオチで終わることがさらにおかしさを生む。これが『ピーナッツ』の人気キャラクター、フライング・エースのユーモアだと言える。

第 2 章　月に降り立つ「世界的に有名な」宇宙飛行士

世界的に有名な宇宙飛行士（The World-Famous Astronaut）は、アポロ 10 号のキャラクターとしてスヌーピーが起用されるにあたって、1969 年 3 月にコミックに登場したスヌーピーの新しい役柄（キャラクター）である。

本章では空想の世界で「世界的に」活躍してきたスヌーピーが実際に月へ行ったことから、市民の理想や非日常を実現することによるアメリカにとっての利点を考察する。

2.1　1960 年代末の『ピーナッツ』とアメリカ

1960 年代を通して、『ピーナッツ』は確実にアメリカを代表するコミックへと成長していった。1991 年に出版されたシュルツの伝記『スヌーピーと生きる』（Good Grief）では、『ピーナッツ』の 40 年にわたる歴史（出版当時）の中で、その人気を飛躍的に高めるのに効果のあった 4 つの大きな出来事だと彼が考えていることとして、全て 1960 年代に起こったことが挙げられている。まず 64 年に『スヌーピーたちの聖書のはなし』（The Gospel According to Peanuts）が出版されたこと、65 年にちびっこたちが雑誌『タイム』（Time）の表紙を飾ったこと、67 年にオフ・ブロードウェイでミュージカル『きみはいい人、チャーリー・ブラウン』（You're A Good Man, Charlie Brown）が上演されたこと、そして、69 年にスヌーピーとチャーリー・ブラウンが月へ行ったことである。この流れの中でコミックに登場したフライング・エースの活躍もあり、『ピーナッツ』の人気はまさに大衆的現象になっていたと言えるだろう。

しかしながら、第 1 章でも述べたように、60 年代のアメリカと言えば経済的にも精神的にも動揺していた時期であった。偉大な指導者ケネディを失ったアメリカは、メディアを通してベトナム戦争の残酷な様子を目撃し、既存の価値観に反抗する若者たちが現れ、公民権運動などマイノリティの活動に混乱した。さらに 68 年には、変化の原動力となっていたベトナム反戦と公民権運動を指導する 2 人、キング牧師（Martin L. King, Jr., 1929-1968）とロバート・ケネディ（Robert F. Kennedy, 1925-1968）が相次いで暗殺され、混乱は頂点に達した。[xi] このような状況の中で、一般市民たちはきっと心身ともに疲弊していただろう。だからこそ、政治的な意味合いを一切持たないちびっこたちの日常を描いた漫画は、彼らにとってこれまで以上に愛すべきものとなっていたのではないだろうか。

英雄になりきれずに一般市民の共感を集めてきたフライング・エースが、今度は宇宙服に身を包み、人類が憧れ続けた月へ飛び立った。文字通り「国民的」キャラクターとなっていたスヌーピーの宇宙進出に、もはや異論などなかっただろう。

2.2　アポロ計画

米ソの対立が続く中、1957 年にソ連が人類初の人工衛星としてスプートニク 1 号の打ち上げに成功した。宇宙開発競争において先を越されたアメリカは、その翌年にアメリカ航空宇宙局（NASA）を設立。1961 年 5 月、ケネディ大統領は 10 年以内に人類を月に送り込み、無事地球へ帰還させると宣言した。彼の号令の下、NASA は全力で準備に取り掛かる。月面調査のために何度も月に無人ロケットを打ち上げ、その一

方で、アメリカ初の地球周回飛行を成功させたマーキュリー計画からジェミニ計画に移行。アメリカ初の飛行士による宇宙遊泳、ジェミニ 6 号と 7 号による初のランデブー飛行に成功し、いよいよ 1966 年から人間を月に送り込むアポロ計画が始まった。ケネディはその光景を目にすることなく 63 年に凶弾に倒れたが、月面到達への準備は確実に進行していた。

しかし、計画は悲劇に始まった。1967 年 1 月、訓練のためにアポロ 1 号に乗り組んだ 3 人の飛行士が死亡する爆発事故が起こったのだ。この事故は人々に衝撃をもたらし、アポロ計画の中止を求める世論がしばらくの間続いた。それでも続行されたのは、ソ連への対抗心とも、宇宙飛行士ボーマン大佐（Frank F. Borman, 1928- ）の議会への強い訴えのためとも言われる。計画は何とか中止を免れ、彼はアポロ 8 号に乗りこみ初の有人月周回飛行を成功させた。[xii]

その後、アポロ 11 号によってついに人類史上初の月面着陸を果たしたアメリカだが、その最終リハーサルとして行われたのが、今回のキーワードであるアポロ 10 号による 2 度目の有人月周回飛行である。その司令船と月着陸船には、『ピーナッツ』のキャラクターからそれぞれ「チャーリー・ブラウン」、「スヌーピー」と名付けられた。

1969 年 5 月 18 日、フロリダ州のケネディ宇宙センター（KSC）から打ち上げられたアポロ 10 号は、いよいよ月面着陸に乗り出すための最終的なテスト飛行を行った。船長のトーマス・スタッフォード（Thomas P. Stafford, 1930- ）とユージーン・サーナン（Eugene A. Cernan, 1934- ）が月着陸船「スヌーピー」に、ジョン・ヤング（John W. Young, 1930- ）が司令船「チャーリー・ブラウン」に乗りこんだ。テスト飛行のため月面着陸こそしなかったが、「スヌーピー」は月軌道上を周回しながらアポロ 11 号の着陸予定地点である月面の「静かの海」（Sea of Tranquility）から約 1 万 5,000m（within 50,000 feet）[xiii]のところまで近づいていった。アポロ 10 号はほぼ完璧に飛行を行い、無事地球に帰還。[xiv] その 2 ヶ月後、アームストロング（Neil A. Armstrong, 1930-2012）が月面に降り立ち、アメリカは史上初の快挙を成し遂げたのだった。この偉業を達成するのに、市民を代表するビーグル犬とその飼い主の月旅行が果たした役割が非常に重要だったことは言うまでもない。

「スヌーピー」は宇宙空間に送り出されたアポロ月着陸船の中で唯一完全な姿をとどめており、現在も月軌道上を周回している。「チャーリー・ブラウン」はロンドンの科学博物館（Science Museum）に保管され、月のクレーターの 1 つは「スヌーピー」と名付けられた。[xv]

2.3　アメリカを代表する「世界的に有名な」キャラクター

世界的に有名な宇宙飛行士は、アポロ 10 号が打ち上げられる 2 ヶ月前の 1969 年 3 月にコミックに登場した。実際には「スヌーピー」は月面に降りてはいないが、空想世界としてそれを可能にしてしまうのがコミックならではのユーモアだ。彼が姿を見せたのはこの時だけでシリーズ化はしなかったが、たった 7 日間（日曜版を除く）のこの月旅行のエピソードは 50 年に及ぶ『ピーナッツ』の歴史の中で最も有名なエピソードのひとつとなった。

（Schulz, 1969）

スヌーピーと NASA との繋がりは、実際にはアポロ 10 号より前に始まっていた。1968 年、NASA はこのビーグル犬を有人宇宙飛行プログラムの公式マスコットとして採用した。そして同年、宇宙飛行士の個人賞として有人宇宙飛行ミッションの成功に貢献する優れた取り組みのために与えられるシルバー・スヌーピー賞（Silver Snoopy Award）が制定された。受賞者には、NASA の宇宙飛行士から証明書と感謝状とともに純銀製のスヌーピーの襟章が与えられる。この賞は、宇宙飛行士にとっての名誉として現在も続いている。

スヌーピーが NASA の公式マスコットに選ばれた背景は、アポロ計画開始の頃にまでさかのぼる。その頃 NASA は、マーキュリー、ジェミニ計画で発生した問題の多くは職員の失敗や不注意が原因だとして、職員の士気向上に繋がる取り組みを始めた。こうした中で、一般に広く知られ、ミッション成功と安全飛行のシンボルとなり、有人宇宙飛行の「番犬」となるアイコンを作ろうと考え、採用されたのがスヌーピーだった。そういった経緯もあり、アポロ 10 号の宇宙船には彼らの名が付けられたのだろう。[xvi]

アポロ 10 号には、11 号のリハーサルを成功させたこと以外にもうひとつの大きな意義がある。世界で初めて宇宙空間からカラーテレビによる生中継放送を行ったことだ。月着陸船「スヌーピー」は、初めてリアルタイムで人々に「色」のついた宇宙や

月の映像を伝えたのである。サーナンは船内から、ゴーグルを着け、ヘルメットをかぶり、スカーフを巻いたスヌーピーの絵をカメラに向けて掲げた。NASA は、その時世界中で 10 億人以上の人々が「スヌーピー」を目撃したと推定している。[xvii] アメリカ本土で人気を博してきたスヌーピーが、名実ともに「世界的に有名な」キャラクターになった瞬間であった。

2.4　空想の実現とアメリカの利点

アメリカの国家プロジェクトである有人宇宙飛行計画に『ピーナッツ』のキャラクターが選ばれたことには、国内における知名度の高さ以外に重要な意味があったと考えられる。国際ジャーナリストの廣淵升彦は、『スヌーピーたちのアメリカ』で次のような見解を示している。

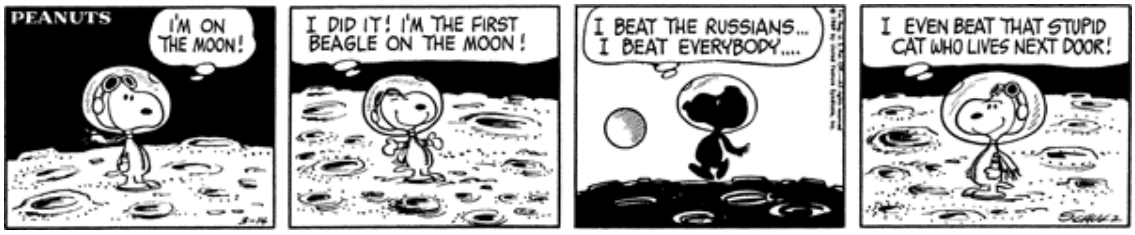
> これらの命名は、アメリカが権威主義や伝統主義、官僚主義に毒されていないことを、明確に告げるものであった。固定観念にとらわれず、国民の愛情と融和のシンボルであると思えば、漫画の主人公の名前でも何でも大胆に採用しますよという、陽気さと明るさ、気取りのなさを示していた。アポロの技術的成果が重要であると同じように、これらのネイミングもまたアメリカが世界に投げ掛けた重要なメッセージであった。（23-24）

当時の世界では、1968 年に「プラハの春」が鎮圧されたことで、ソ連中心の社会主義圏の勢いが国際政治の流れを作っていた。アメリカはベトナム戦争においても守勢に立たされ、国内では民主党主導の時代が終わりを告げていた。その中でアポロ 8 号の成功があり、NASA 設立の背景にあるケネディが謳ったアメリカの夢や希望に自信をもたらすきっかけとなった。[xviii] これ以来、自由を強調していくという姿勢が『ピーナッツ』の起用に繋がったのではないか。

つまり、ソ連に先駆けて月面着陸を果たすことで世界にアメリカの技術力を見せつけると同時に、国内の人気コミックキャラクターを国家の重大プロジェクトに起用して「自由の国アメリカ」を強調したのだ。世界が畏れる軍事大国アメリカが、国民の意思を尊重する姿勢をも示すことで、強さと柔軟さの両方を海外に誇示することが狙いだったのかも知れない。

しかし、それは主として外側へ向けたメッセージだ。アメリカ合衆国の内側――国民に向けて発信されたメッセージは何か。

『ピーナッツ』の愛すべきキャラクターたちは皆、第1章で述べた敗北の法則により何かを上手くやり遂げる様子を描かれることはない。フライング・エースもレッド・バロンにはいつだって勝てなかった。キャラクターに何かが起こるとファンからの手紙が殺到していたように、アメリカ市民たちはいつも失敗ばかりのこの小さな主人公（hero）たちを応援していたのだ。そんなスヌーピーが月へ行くとなれば、アポロ計画に対する国民の関心は更に高まったと考えてもおかしくはない。日常の中で市民の共感を得てきた彼が月という非日常の世界へ飛び立ったことで、あり得なかったはずの空想がついに実現された。そして彼は、ソ連にも、隣の猫にさえも打ち勝って、敗北の法則を覆してしまった。文字通り英雄となったスヌーピーは、『ピーナッツ』だけでなくNASAのアポロ計画の好感度を上げるのにもひと役買っていたに違いない。



(Schulz,1969)

世界的に有名な宇宙飛行士は、敗北の法則に支配された『ピーナッツ』の中で、数少ない「成功」をおさめたエピソードである。[xix] スヌーピーは見事に計画に貢献し、アメリカの理想を実現する英雄となった。当時のアメリカ政府にとって、国民に愛されてきたスヌーピーを起用したことは、NASAに対する国民の信頼や支持を集めるのに絶大な効果をもたらしたと考えられる。自分たちの愛すべきキャラクターの成功は、誰だって願いたくなってしまうものだ。

当時のアメリカや世界にとっては、スヌーピーの活躍は文句なしの成功だろう。この出来事はその後の『ピーナッツ』の発展にも大きく貢献している。しかし歴史的に見れば、アポロ10号は11号の成功の陰に隠れて引き立て役となってしまった。コミックには描かれなかったが、結局現実にはシュルツの言う法則からは抜けられなかったのである。これも、年月が経った現代だからこそ感じられる、ある意味での『ピーナッツ』らしさかも知れない。

第 3 章　何にでも変身できるスヌーピーとアメリカ

フライング・エースや宇宙飛行士などを演じアメリカの夢や理想を追いかけてきたスヌーピーだが、彼が演じるのはそんなアメリカン・ヒーローばかりではない。スヌーピーの変装は、動物や他のキャラクターの物真似なども含めると 160 種類以上[xx]にも及ぶ。本章では、一般市民の日常生活で活躍する人物に扮した変装を取り上げ、『ピーナッツ』本来のユーモア（＝市民の共感を得るようなおかしさ）を考察する。

3.1　進化するビーグル犬

スーパー・ビーグル、スヌーピーも、当初は普通の犬だった。しかし、1952 年に初めて吹き出しがついて以来、自分の感情や考えを読者にはっきりと表すようになっていき、その後二足歩行[xxi]をしたことでついに単なる犬とは一線を画した。シュルツは彼に頭脳を与えたのだ。この頃からスヌーピーの空想はどこまでも膨らむようになり、考え得ることは何でも（ただし空想の世界で）可能にしてきた。そして彼は子供たちのありふれた生活の中で人間のように変装をして活躍することによって、「主人公の飼い犬」以上の「スヌーピー」という特異な存在を確立したのだ。その中で生まれたのが絶大な人気を誇るフライング・エースや、本当に世界的に有名になった宇宙飛行士だった。

フライング・エースが登場する少し前の 1965 年 7 月、スヌーピーは犬小屋の屋根にタイプライターをセットして、以後お決まりとなるフレーズを打つ。"It was a dark and stormy night."「暗い嵐の夜だった。」偉大なる小説王（Literary Ace）の誕生だった。傑作を生み出そうと出版社に投稿するものの、なかなか採用はされない。やっと採用されたかと思えばエイプリル・フールだとからかわれたり、初登場から 30 年経ってようやく出版にこぎつけたかと思えば 1 部しか刷ってもらえなかったり。夢の実現までの道のりは遠い。[xxii]

（Schulz, 1965）

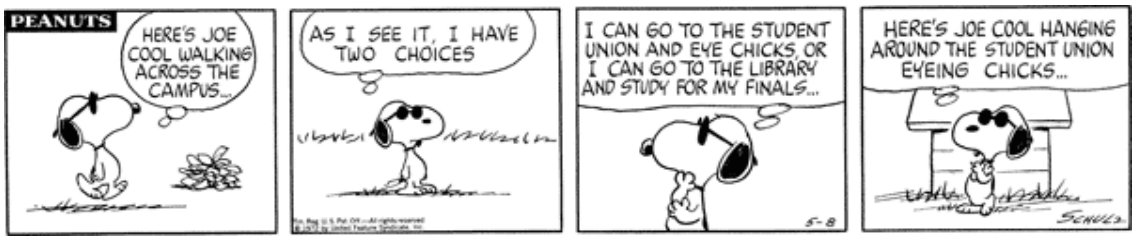
1970 年に入ると、フライング・エースに並ぶ人気者、ジョー・クール（Joe Cool）が登場する。大学のキャンパスでいつもとぐろを巻いている彼は、サングラスをかけ、時にはタートルネックのセーターを着こなして女の子（chicks と呼んでいる）に声を掛ける。流行に敏感なジョーは、当時の若者の間で流行っていたこのファッションに女の子は弱いのだと思い込んでおり、またそんな自分のことを最高にカッコイイと思っている。

訴訟大国アメリカにはなくてはならない存在とも言える弁護士ももちろん登場している。1972 年に世界的に有名な弁護士（World-Famous Attorney）としてペパーミント・パティ（Peppermint Patty）に連れられての登場以来、ちびっこたちの揉め事の際には颯爽と現れる。

その他にも外科医やサンタクロース、ボーイ・スカウトならぬ「ビーグル・スカウト」、あらゆる「世界的に有名な」スポーツ選手など、身近な職業からアメリカン・ヒーローまで変装の幅は驚くほど広い。スヌーピーは、彼がなりたいと思ったものには何にでも「変身」し、『ピーナッツ』独特の面白さを生み出していく。

3.2　アメリカ社会を映し出すコミック

シュルツは信条として政治的な意味合いを持つコミックは描かないものの、コミック・ストリップ（新聞連載漫画、comic strip）というだけあって、『ピーナッツ』にはアメリカの社会や時代がよく反映されている。小説王の登場前にはケン・キージー（Kenneth E. Kesey, 1935-2001）の『カッコーの巣の上で』（One Flew Over the Cuckoo's Nest, 1962）などが発表されており、スヌーピーは当時活躍していた偉大な小説家たちに憧れていたのかも知れない。もしかしたら、ターザン（Tarzan）やトム・ソーヤー（Tom Sawyer）などのヒーローを生み出してきたアメリカ文学そのものを想ったのかも知れない。[xxiii] 70 年代の初めに登場したジョー・クールは当時流行していたタートルネックのセーターを着こなし、自分の格好よさに酔いしれている。アメリカン・ジョークでよく皮肉られる弁護士も、訴訟大国アメリカに住む人々には非常に身近な存在だ。"I'll sue you!"「訴えてやる！」という台詞が頻繁に登場するアメリカのコミック・ストリップとしては、そんな存在もごく当たり前なのだろう。小説家も、格好つけた若者も、弁護士も、その他医者やサンタクロースやスポーツ選手だって、一般市民にとって憧れだったり身近な人物だったり、日常的に話題にのぼる人物だったりするのだ。



（Schulz, 1972）

そんな身近な存在ではあるものの、アメリカの一般市民の日常を描き、彼らの共感を得るはずの新聞漫画に、タイプライターを打ち、ガールハントをし、時には空をも飛んでしまう、現実にはあり得ない「犬」の姿が描かれている。一見、矛盾しているように感じられるだろう。しかし、彼はもはやただの犬を超えてしまったのだ。"Why can't I have a normal dog like everyone else?"「どうしてボクはみんなみたいに普通の犬が飼えないんだろう？」と飼い主のチャーリー・ブラウンが嘆いてしまうほどの変な犬、「スヌーピー」という存在だからこそ、何をしても受け入れられてしまう。単なる犬とも、他のちびっこたちとも違う、そんな特別な存在は、ありきたりな日常を描いたコミックにほんの少し加えられた「スパイス」なのだと思う。そんなスパイスがあるからこそ、ありふれた毎日にちょっとしたおかしさが生まれる。スヌーピーは、『ピーナッツ』におけるユーモアの種なのかも知れない。

3.3　スヌーピーのアイデンティティ

アメリカン・ヒーローから一般市民、他のちびっこたちや動物にまで変身してしまうスヌーピーだが、スヌーピー自身のアイデンティティは一体どこにあるのだろうか。犬小屋で寝そべっている彼は実は仮の姿で、本来はフライング・エースやジョー・クールなのではないか？

スヌーピーが 4 本足で歩いていた頃、彼にはまだ犬らしさが残っていた。読者に意思をはっきりと表すようになり、『ピーナッツ』の一員としての存在感は確立していたものの、まだ主人公チャーリー・ブラウンの「飼い犬」という色が感じられた。しかし、ついに彼は 1955 年のコミックで、"I get tired of having to depend on PEOPLE[xxiv] for everything!"「何もかも人間に頼らなくちゃならないのにウンザリした！」と嘆いた。オオカミの物真似をするエピソードだ。もし自分がオオカミだったら、人間に頼らなくても自分で欲しいものを見つけて手に入れてやるのに…という空想である。この時はチャーリー・ブラウンに見つかり赤面して終わってしまうが、それ以来、あらゆる

動物やキャラクターを夢見ては化け、やがて 2 本足で歩き始め、意思を伝え、やりたいスポーツも仕事も自分の力で何でもできるようになった。あの台詞は、その後の目まぐるしい進化の伏線だったのかも知れない。今や彼が自分でできないことと言えば、ごはんの用意をすることくらいだ。

彼にとって変装は、あくまでこうして生まれた空想癖の延長だ。犬扱いされるのを嫌い、ちびっこたち（＝人間）と同等でありたいと強く思い、空想し、その域を超えてしまったのだ。したがって、フライング・エースやジョー・クールなどの変装した「姿」にではなく、その役柄になりきる変装という「行為」そのものに、彼のアイデンティティが見いだせるのである。どんな役柄に変装しても決まってどこかがずれていて、にもかかわらず本人はその役に陶酔している。しかし、やっぱり何か上手くいかない。それでもお気に入りの変装は懲りずに何度も繰り返し、また新しい役柄も生み出していく。それこそが『ピーナッツ』におけるちびっこたちの一員としてのスヌーピーなのだ。ヒーローや大学生のその本来の姿は、チャーリー・ブラウンやルーシー（Lucy）など他のちびっこたちと同等の「スヌーピー」自身なのである。

『ピーナッツ』は人々の生活をちびっこたち特有の視点で描いた新聞漫画であり、市民生活に限りなく近いコミックだ。若者や弁護士、サンタクロースまで、大人も子どもも含めた一般市民にとって身近でありふれた存在を、ちびっこたちの中で「変な犬」スヌーピーが演じ、その役になりきっている。本来とは違う姿に変身し、酔いしれている本人とは裏腹に、周りから見ればどこかがずれていて、彼もまた『ピーナッツ』お決まりの「敗北の法則」によって失敗してしまう。シュルツは、キャラクターに「成功」を与えてしまえばコミックの面白さが減ってしまうことを知っているのだ。理想を叶える成功者になってしまったら、それはもう一般市民ではない。失敗があるからこそ、市民である読者はこのコミックに親しみや共感を覚えるし、それが何度も繰り返されることに面白さを感じる。こうした『ピーナッツ』特有のユーモアの流れの中で、特異な存在であるスヌーピーはありふれた日常を描いたコミックに加えられたおかしさ、いわばちょっとした非現実なのだろう。彼のようなスパイスがあるからこそ、人々は『ピーナッツ』により愛着を感じるのかも知れない。

結論

アメリカン・ヒーローに変身しても、小説家や若者を演じてみても、その根底にはいつも共通して『ピーナッツ』特有の法則が流れている。漫画家がキャラクターの願

いを叶えさせてしまえば、そこで漫画家の使命は終わってしまう。だからシュルツはちびっこたちの恋も実らせないし、チャーリー・ブラウンにはいつもフットボールを蹴らせないし、ペパーミント・パティには D マイナスしか与えない。それと同様に、フライング・エースはレッド・バロンに勝てないし、小説王の書いた作品がヒットすることも、ジョー・クールがガールハントに成功することもない。成功してしまったら、コミックは終わりなのだ。それが『ピーナッツ』における「敗北の法則」なのである。この法則があるからこそ、『ピーナッツ』は 50 年もの間人々に愛され続け、現在も世界中で読まれているのだ。

第 1 章では、戦争という舞台で活躍しながらも負けてばかりいるフライング・エースを扱い、このコミックに描かれる「非日常の世界における日常性」、上手くはいかないという一般市民の現実について述べた。第 2 章では宇宙を舞台に活躍し、実際に理想を実現した宇宙飛行士を扱い、市民の支持を得て成功するスヌーピーの「非日常の世界における非日常性」と彼がアメリカにもたらした利点について論じた。第 3 章では、市民にとっても身近な日常世界に存在する役柄を扱い、市民の日常を描く『ピーナッツ』本来の姿である「日常世界における日常性」について論じた。

宇宙旅行のエピソードは例外のようにも思われるが、これは『ピーナッツ』が人々にとって愛すべきものとなっていたことの証明だ。しかし「成功してしまったら、コミックは終わり」だと前で述べた通り、キャラクターが成功してしまったこのコミックはたった 7 日で終わってしまった。また、コミックから飛び出して考えれば、彼はアポロ 11 号の陰に隠れてアメリカン・ヒーローにはなりきれなかったのだ。結局は、またシュルツの言う法則に飲まれてしまった。「実際には上手くいかない」というこの法則に、むしろリアリティを持たせた出来事だと言えるのではないか。

どのエピソードにおいても共通しているのは、上手くいかずに最後は失敗してしまうのに、諦めずに挑戦し続ける、理想に向かうスヌーピーのチャレンジ精神だ。日常や非日常など舞台設定は違えども、演じる本人は敗北の法則に支配されてしまう一般市民と同じなのだ。人々はスヌーピーに共感しながら励まされ、現実に屈せず挑戦する勇気も受け取っているのではないだろうか。

注

[i] シュルツは『ピーナッツ』の前にも『リル・フォークス』（Li'l Folks）というコミックを描いており、「小さくて可愛らしいもの」といった意味を持つこのタイトルをそのまま使い続けようとしていたほど、「子ども」という表現に愛着を持っていた。また、『ピーナッツ』の子どもたちは children ではなく gang と表されている。これらのことから、本論文では多くの翻訳に倣い「ちびっこたち」と表記することとする。

[ii] 『スヌーピーと生きる』p.133 参照。実際に、『ピーナッツ』の傑作選などではフライング・エースのエピソードは必ず挙げられる。

[iii] シュルツの愛称。

[iv] 『スヌーピーと生きる』p.330 参照。

[v] 実際はオーストラリア軍機という説もあるが、レッド・バロンを撃墜したと公式に発表されている人物はイギリス空軍のカナダ人パイロット、ロイ・ブラウン（Arthur Roy Brown, 1893-1944）。彼の愛機はソッピーズ・キャメルだった。なおフライング･エースの愛機は、この名前の響きの良さからきている。

[vi] 単語の言い回しは『スヌーピーたちのアメリカ』p.156 参照。

[vii] 以下、こういった台詞はエピソード内でよく繰り返される決まり文句のため、特に日付などは明記しないこととする。

[viii] アメリカ人にとって、外部の嵐のように物騒な存在が戦争であるように、スヌーピーにとっても隣の家に住む猫は忌むべき存在として描かれている。実際に、この宿敵には第二次世界大戦（World War II）という名が付けられている。

[ix]『アメリカの 20 世紀（下）』 p.79 参照。

[x] ここでの描写には、1.1 でも述べたとおり、シュルツの第二次大戦での経験が踏まえられている。舞台となるフランスの地理などは、かつて北フランスに派遣された彼の土地勘に基づいている。

[xi] 『アメリカの 20 世紀（下）』参照。

[xii] 『アメリカの宇宙戦略』p.48-51 参照。

[xiii] Cf. John F. Kennedy Space Center - Apollo 10
www-pao.ksc.nasa.gov/history/apollo/apollo-10/apollo-10.htm

[xiv] Cf. Schulz and Peanuts: A Biography p.399-400, The New York Times -When Snoopy Landed on the Moon: [Metropolitan Desk] 19, June 2011

[xv] Cf. Apollo: Where are they now? nssdc.gsfc.nasa.gov/planetary/lunar/apolloloc.html, The Valley of Taurus-Littrow www.hq.nasa.gov/alsj/a17/a17.site.html

[xvi] Cf. NASA-Snoopy Soars with NASA at Charles Schulz Museum
www.nasa.gov/topics/history/features/snoopy.html, JAXA 宇宙ステーション・きぼう 広報・情報センタ

ー - シルバー・スヌーピー賞って何ですか（Q&A） iss.jaxa.jp/iss_faq/astronaut/astronaut_012.html

[xvii] Cf. Schulz and Peanuts: A Biography p.400

[xviii] 『アメリカの宇宙戦略』p.52-53 参照。

[xix] 「世界的に有名な宇宙飛行士」はおそらく初めて敗北の法則を覆したエピソードだが、その後 1993 年 3 月 30 日のコミックで「永遠の敗北者」チャーリー・ブラウンも初めてホームランを打ってチームを勝利に導き、法則を覆した。

[xx] 『A Peanuts Book Special featuring Snoopy—スヌーピーの 133 面相—』p.182 参照。

[xxi] 初めてスヌーピーが二足歩行をしたエピソードについては諸説ある。

[xxii] 1971 年、1984 年に SNOOPY and "It Was a Dark and Stormy Night" というタイトルで Holt, Rinehart & Winston 社から実際に出版された。その後絶版になったが、復刻版として 2011 年 10 月に日本の太田出版から『スヌーピー&暗い嵐の夜だった』が、2012 年 4 月には続編『君にリンゴの果樹園を約束した覚えはないね』も出版された。

[xxiii] 何よりもこのタイプライターを使い始めたことによって、スヌーピーがちびっこたちに自分の意見を伝えることができるようになった意義は大きいと私は考える。

[xxiv] 『ピーナッツ』における台詞は全て大文字表記のため、太字で強調されていた PEOPLE をここでは大文字で再現した。

引用文献・参考文献

Michaelis, David. Schulz and Peanuts: A Biography. New York: HarperCollins, 2007: Harper Perennial, 2008. Print.

明石和康『アメリカの宇宙戦略』岩波書店、2006 年。

有賀夏紀『アメリカの 20 世紀　（下）』中央公論新社、2002 年。

チャールズ・シュルツ『A Peanuts Book Special featuring SNOOPY —スヌーピーの 133 面相—』谷川俊太郎訳、角川書店、2004 年。

デリック・バング『スヌーピーたち 50 年分の HAPPY BOOK』笹野洋子訳、講談社、2004 年[Bang, Derrick. 50 Years of Happiness: A Tribute to Charles M. Schulz. Peanuts Collector Club, 1999.]。

廣淵升彦『スヌーピーたちのアメリカ』新潮社、1993 年。

リタ・グリムズリー・ジョンスン『スヌーピーと生きる　チャールズ.M.シュルツ伝』越智道雄訳、朝日新聞社、1994 年: 朝日文庫、2002 年[Johnson, Rheta Grimsley. Good Grief: The Story of Charles M. Schulz. Libro Port, 1991.]。

雑誌コラム

Hodara, Susan "When Snoopy Landed on the Moon: [Metropolitan Desk]." The New York Times 19, June 2011: CT10. Print.

コミック出典

Schulz, Charles M., Matt Groening. The Complete Peanuts 1955 to 1956. USA: Fantagraphics Books, 2005. Print.

Schulz, Charles M. Peanuts Treasury. USA: 1968: Metro Books, 2000. Print.

GoComics.com. Web. www.gocomics.com/peanuts

映像資料

The Red Baron. Dir. Nikolai Müllerschön. 2008. Warner Bros. Pictures, 2011. DVD.

インターネット資料

Apollo: Where are they now? Web. 1 Dec, 2012. nssdc.gsfc.nasa.gov/planetary/lunar/apolloloc.html

John F. Kennedy Space Center - Apollo 10. Web. 1 Dec, 2012. www-pao.ksc.nasa.gov/history/apollo/apollo-10/apollo-10.htm

NASA- Snoopy Soars with NASA at Charles Schulz Museum. Web. 11 Oct, 2012. www.nasa.gov/topics/history/features/snoopy.html

The Valley of Taurus-Littrow. Web. 1 Dec, 2012. www.hq.nasa.gov/alsj/a17/a17.site.html

アポロ 10 号- 宇宙情報センター、閲覧日 2012 年 10 月 11 日。spaceinfo.jaxa.jp/ja/apollo_10.html

シルバー・スヌーピー賞って何ですか（Q&A）- JAXA 宇宙ステーション・きぼう広報・情報センター、閲覧日 2012 年 10 月 7 日。iss.jaxa.jp/iss_faq/astronaut/astronaut_012.htm

否定接頭辞 *in-* と *un-* の差異について
―借用接頭辞 *in-* の勢力の拡大―

日向　未来

第1章 はじめに

一般に、社会が変化し時代が進むと、絶えず新しい事物や概念が生じ、それを言葉や語で表現する必要が生まれる。造語の方法は大きく分けて三つあり、一つ目は、外国語から語を借用する、二つ目は、自国語にある語の意味や機能を拡張・転用する、三つ目は、自国語にある形態素を使って新しく語を作る、である。そして、三つ目の方法により、語を作り出す過程が語形成といわれるものであり、語形成が対象とするのは、語の形成過程と構成要素である。語の形成の方法としては、複合、派生が代表的なものとして挙げられる。本論文においては派生に焦点を当て、接辞について考察していく。なかでも、否定の意味を加えるという点では同じであるが、異なるクラスに属する二つの接頭辞 *in-* と *un-* について、両者の比較をおこない、*in-* を用いて否定する場合と *un-* を用いて否定する場合で使い分けがあるのか、どのような理由で区別がなされているのかを考えていく。

まずは、第 2 章において接辞の特徴やクラス分けについて述べ、平尾（1994）、岡田（2009）、姫田（2000）の三つの先行研究を紹介する。それらを参考に、第 3 章では、*Merriam Webster's Collegiate Dictionary Eleventh Edition* を用いた研究結果を示し、その考察を述べる。そして第 4 章で全体のまとめをする。

第2章 接辞研究

2.1 派生による語形成

派生とは、すでに存在している語の構成要素を利用し、新しい語を形成する方法である。複合が独立した語と語を結び付けるのに対し、派生は独立した語に接辞をつけ、新しく語を形成するものであり、派生によって作られた語を派生語という。接辞は決して独立した語としては現れず、常に何らかの語に付加して用いられ、語頭に付加される拘束形態素である接頭辞と、語末に付加される拘束形態素である接尾辞に分けられる。なお、拘束形態素とは、単独では語とならない形態素のことである。英語の接頭辞と接尾辞における最も重要な相違点は、それが基体に付加した際に新たに作

られる語の品詞を決める能力があるかどうかという点である。接頭辞が付加された場合、例外を除き、語の意味は変化するが、作られた派生語の品詞は変化しない。一方、接尾辞においては、語の意味も変化するが、派生語の品詞も、基となる語の品詞とは異なってくる。接頭辞付加、接尾辞付加の例をそれぞれ (1)、(2) に示す。

(1) 接頭辞による派生
a. happy（形容詞）→ *un*happy（形容詞）
b. exist（動詞）→ *co*exist（動詞）
　author（名詞）→ *co*author（名詞）
c. act（名詞）→ *counter*act（名詞）
　clockwise（副詞）→*counter*clockwise（副詞）

(2) 接尾辞による派生
a. happy（形容詞）→ happi*ness*（名詞）
b. exist（動詞）→ exist*ence*（名詞）
c. act（動詞）→ act*ion*（名詞）
d. real（形容詞）→ real*ize*（動詞）
e. slow（副詞）→ slow*ly*（形容詞）

2.2 接辞のクラス分け

接辞は、基体の前や後ろに付加され、品詞や音韻、強勢の位置の変化などを引き起こすことや、接辞特有の解釈を付け加えることがある。Siegel と Allen はこのような特徴から接辞をクラス I 接辞とクラス II 接辞の二種類に分類した（大石 1987: 37）。以下にそれぞれのクラスの特徴を比較したものを述べる。

(3)
a. クラス I 接辞は、付加された際に、基体の強勢の移動を引き起こす。これに対し、クラス II 接辞は、付加されても基体の強勢の移動を引き起こさない。
b. クラス I の接辞は基体または接辞において音韻変化を引き起こすことがあるが、クラス II 接辞は音韻変化を引き起こさない。
c. クラス I 接辞は、クラス II 接辞の内側のみに付加され、外側に付加することはできないが、クラス II 接辞は、クラス II 接辞の外側にも付加できる。

d. クラス I 接辞は、語よりも小さい形態素にも付加されうるが、クラス II 接辞は語にのみ付加される。
e. クラス II 接頭辞にのみ見られる特徴として、共通の基体を有する場合に、等位接続することができ、基体と因数分解関係にある。
f. クラス I 接辞は、複合語に付加されないが、クラス II 接辞は複合語にも付加することができる。

これらの性質は、クラス I 接辞は、付加された際に基体と密接に結び付くが、クラス II 接辞は基体からある程度独立した状態で結びつくことを示している。クラス I 接辞が付加されると強勢の移動が引き起こされるのは、クラス I 接辞が付加された場合には、接辞が基体と強く結びつき、一語としてみなされるために、派生語の新しい音韻環境の中で再び強勢の位置が定められるからである。一方、クラス II 接辞が付加された場合には、接辞と基体はある程度独立を保った状態で結びつくために、一語とはみなされず、接辞と基体は独立のものとして認識され、接辞が基体の強勢には関与しない。音韻変化についても、同様のことがいえる。次に上記の a~f の特徴について、さらに詳しく見ていく。

2.2.1 強勢の移動

(3) a に挙げた強勢の移動について、具体例を示し考えていく。まずは、クラス I 接辞が強勢の移動を引き起こす例から見ていく。

(4)
a. *-ee*: explóy → exployée
b. *-ese*: Japán → Japanése
c. -(*at*)*ion*: explóre → explorátion
d. *-ify*: pérson → persónify
e. *-ic*: héro → heróic
f. -(*at*)*ive*: ínstinct → instínctive

強勢の移動を引き起こさないクラス II 接辞の例としては、以下のようなものがある。

(5)

a. *-al*: refúse → refúsal

b. *-er*: emplóy → emplóyer

c. *-ful*: téaspoon → téaspoonful

d. *-ness*: fríendless → fríendlessness

e. *-ed*: excíte → excíted

f. *-ish*: wóman → wómanlish

g. *-ly*: systemátical → systemátically

以上が、クラス I 接辞とクラス II 接辞の強勢の移動についての違いである。(4) および (5) で挙げた例は、すべて接尾辞の例である。この点に関して、大石（1988, p.42）によると、語の強勢は音節構造を基にして基本的に語末から何番目の音節に与えられるかといった具合に決められる。接尾辞の場合は、クラス I 接辞として密接に基体と結び付くと、語末から数える際にその接尾辞も考慮に入ってくるが、クラス II 接辞としてある程度距離をおいて結び付くと、その接尾辞は考慮に入れず基体の末尾から数える。接頭辞の場合は、語の前方に要素がのびる形になるので、語末からの検討による強勢付与という基本的な規則には直接かかわらないのである。

2.2.2 音の変化

(3) b における音韻変化について、具体例を見ていく。まず、代表的な音変化として同化がある。

(6)

a. illegal	*inlegal
b. imbalance	*inbalance
c. impossible	*inpossible
d. irrational	*inrational

(7)

a. unlawful	*ullawful
b. unbeautiful	*umbeautiful
c. unpleasant	*umpleasant

d. unreal　　*urreal

(6) のように、クラス I 接頭辞である *in-* が付加された場合は、同化を起こすことがある。一方、(7) に示すように、クラス II 接頭辞である *un-* が付加されても同化は起こらない。

クラス I 接辞の付加により、同化以外の音の変化を起こすものもある。

(8)

a. insert /insˈəːrt /

insertion /insˈəːʃən /

b. convert /kənvˈəːrt/

conversion /kənvˈəːrʒən/

c. divide /diváid/

division /divíʒən/

(9)

a. elastic

/k/

elasticity

/s/

b. toxic

/k/

toxicity

/s/

c. electric

/k/

electricity

/s/

(8) では、*-ion* が付加されることにより、a、b、c の例においてそれぞれ、/t/ → /ʃ/、/t/ → /ʒ/、/d/ → /ʒ/ の変化が起きている。(9) では、*-ity* が付加されることにより、基体の語末の /k/ が /s/ に変化している。

また、基体の音が脱落する場合や、音が出現する場合もある。

(10)
a. soft [sɔft]　　soften [sˈɔfn]
b. fast [fæst]　fasten [fǽsn]

(11)
a. simplification
b. significant
c. significance

(11) では、*-ify* 付加による派生語に、他の接尾辞が付加されることで、/k/が現れている。

(6) から(11) まで見てきた、音の変化を引き起こす接辞はすべてクラス I 接辞である。これに対し、音変化を引き起こさないものがクラス II 接辞に分類される。

2.2.3 クラス I 接辞

(3) c で述べたとおり、クラス I 接辞は、クラス II 接辞の内側のみに付加され、外側に付加することはできない。一方、クラス II 接辞は、クラス II 接辞の外側にも付加できる。ここでは、*unkindness* という語の構造を例に考えてみる。*un-* は、下位範疇に形容詞を取ることができる接頭辞であり、*-ness* は基体の形容詞を名詞に変えるはたらきするとされる接尾辞である。そのため、*unkindness* という語を造る際には、まず初めに *un-* と形容詞 *kind* が結びつき、そのあとで形容詞である *unkind* に*-ness* が付加され、名詞となっているのである。*un-* も*-ness* もクラス II 接辞であるので、構造上問題はない。このような場合、*un-* は*-ness* の内側にあるという。これとは逆に *un-* がクラス II 接辞の外側に付加されている場合もある。(12) に示される接尾辞 *-ed*、*-ing*、*-y*、*-ly*、*-like* はいずれもクラス II 接尾辞である。

(12)
a. uneducated
b. unbelieving
c. unlucky

d. unmanly
e. unchildlike

上記の例は、すべてクラス II 接尾辞が付加され、形容詞になったあと、クラス II 接頭辞の *un-* が付加された構造になっている。しかし、同じ否定の意味を加える *in-* はクラス I 接頭辞であるので、この構造を取ることはできない。クラス I 接辞である *in-* の場合には許されないが、*un-* では認められる例を (13) に示す。

(13)

a. bookish	*inbookish	unbookish
b. thoughtful	*inthoughtful	unthoughtful
c. childlike	*inchildlike	unchildlike
d. friendly	*infriendly	unfriendly
e. lucky	*inlucky	unlucky

(12) 、(13) の例はいずれも接頭辞と接尾辞の場合の例であるが、次に、接尾辞同士の場合に、クラス I 接辞の内側にクラス II 接辞が付加されない例を見ていく。

(14)

-less: クラス I 接辞	-ity: クラス II 接辞
a. eventless	*eventlessity
b. graceless	*gracelessity
c. leaderless	*leaderlessity

(15)

-ment: クラス II 接辞	-al: クラス I 接辞
a. employment	*employmental
b. discernment	*discernmental
c. containment	*containmental

だが、これにも例外がある。

(16)

a. govern	government	governmental
b. develop	development	developmental

(16) a の *government* については、「統治する」という意味の動詞 *govern* から導き出された「統治すること」という意味に加え、拡大された意味である「政治」の意味もある。しかし *-al* が付加された *governmental* では、拡大された意味である「政治」の方を意味する。このことから、語彙化することで合成的な意味ではなくなった場合、基体の動詞が意識されなくなり、接尾辞 *-ment* が意識されなくなることで条件が緩み、外側にクラス I 接辞の *-al* を付加することができるのだと考えられる。

2.2.4 基体の種類

次に(3) d の、クラス I 接辞は、語よりも小さい形態素にも付加することができるが、クラス II 接辞は語にのみ付加されるという性質について考える。厳密にいうと、クラス II 接尾辞については、*hapless*、*feckless*、*fulsome* など、少数ではあるが、語よりも小さい形態素に付く例外も存在する。クラス II 接頭辞については、例外なく語にのみ付加される。これに対し、クラス I 接辞のなかには、単独では語として存在しない形態素にも付加されるものもある。

(17)

a. in-ert（自動力のない）

b. fric-tion（摩擦）

c. loc-al（地方の）

d. prob-ity（誠実）

2.2.5 因数分解

(3) e については、接頭辞においては共通の基体を有する場合に、因数分解して取り出すことができるという特徴がある（大石 1987: 49）。因数分解というのは、接辞もしくは基体が共通の場合に、共通部分を一つにまとめ、等位接続することが可能であるということである。これは、クラス II 接頭辞にのみ見ることができる特徴である。

基体が共通の場合の例には、次の (18) のようなものがある。そのうち実際に可能

なものは c のクラス II 接頭辞の場合のみである。

(18)

a. クラス I 接頭辞

*ex- and se-cretions

*mono- and rhino-cerous

b. クラス I 接尾辞

*object-ive and -tion

c. クラス II 接頭辞

pro- and en-clitics（後接ならびに前接語）

hyper- and hypo-thyroid（甲状線の機能高進ならびに機能後退の）

d. クラス II 接尾辞

*fear-some and -less

*interest-ed and -ing

次に接辞が共通の場合の例を (19) に示すが、このうち可能な形は、クラス II 接頭辞である c の場合のみである。

(19)

a. クラス I 接頭辞

*re-tain and fer

*com-plete and pare

b. クラス I 接尾辞

*final and tender-ize

*confuse and profuse-ion

c. クラス II 接頭辞

anti-abortion and segregation（中絶ならびに人種差別反対派）

socio-linguistics and economics（社会言語学と社会経済学）

d. クラス II 接尾辞

*good and kind-ness

*thought and fanci-ful

2.2.6 複合語と接辞付加

クラス II 接辞が複合語の外側に付加されるのに対し、クラス I 接辞は複合語には付加されない（大石 1987: 50）。具体的な例を次に示す。

(20)

a. クラス I 接頭辞

*in-germ-resistant

*dis-upgrade

*mal-outflank

b. クラス I 接尾辞

*laid-back-ity

*standby-ic

*turnover-al

c. クラス II 接頭辞

un-germ-resistant（細菌に抵抗力のない）

de-upgrade（価値を下げる）

mis-underline（下線を引き間違える）

d. クラス II 接尾辞

laid-back-ness（気楽なこと）

standby-less（代替要員のいない）

turnover-less（変更のない）

これまでにも述べたように、クラス I 接辞は語、または形態素に付加され、語の一部に統合されるという特徴があるので、複合語の外側には付加されないのだと考えられる。

2.3 否定の接頭辞　*in-, un-*

この節では、基体に付加されることで、否定の意味を加えるという部分では共通しているが、異なるクラスに属する２つの接頭辞、*in-* と *un-* について詳しく見ていく。

2.3.1 *in-*

これは、クラス I の接頭辞である。発音に関していうと、接辞付加による発音変化が生じ、後ろに /p/, /m/ が来る場合には、/im-/、/l/ が来る場合には /il-/、/r/ が来る場合には /ir-/ と音を変える。また、*ínfamous* のように強勢が置かれることもある。綴りについての変異体の例は、以下にまとめて示す。

(21)
ig-: /n/ の前（ignoble, ignorant）
il-: /l/ の前（illegal, illogical）
im-: /b, p, m/ の前（imbalance, impossible, immobile）
ir-: /r/ の前（irrational, irregular）
in-: その他の子音の前（insecure, infinite）

in- の語源は、ラテン語の否定辞 *in-*に由来する。接辞のいくつかは同じ語源を持つ語に付加されやすいという特徴を持っており、*in-* も同じ語源を持つラテン語系の語彙に付加されやすいと考えられる。この点については、第3章で詳しく検証する。形容詞と名詞に付加され、「否定」の概念を表わす。*in-* がある語 X に付加されると、その意味は単なる X の否定の意味にとどまらず、特殊な意味が加わることがある。たとえば、*innocuous* は、「有害な」という意味の *nocuous* の否定「有害でない、無害の」という意味のほか、「面白くない」という意味が加わったりもする。なかには、X の否定すらしないこともあり、*valuable*「貴重な」に対する *invaluable*「評価できないほど貴重な」が挙げられる。

2.3.2 *un-*

これはクラス II の接頭辞である。そのため、*un-* が付加されても基体の発音に変化は生じない。古英語・中英語の *un-* に由来し、基本的に否定（negative）の意味を表わす。しかし、その内容は多様で、否定（not）、反対（opposite）、逆（reverse）の意味を表わしたり、動詞に付加し、元に戻す（undo）の意味を持つことがある。下位範疇は、形容詞、名詞、動詞である。また、(22) に示すように、好ましからざる意味を表わす形容詞には付加されにくいという傾向を持つ。

(22)
*unbad
*unhorrible
*unveil
*unugly

大石によると、*un-* の意味条件は、Siegel（1978）で述べられている隣接制約に従って適用される（大石 1987: 65）。具体例を示すと、

(23)
*[un [dis [honest]]]
*[un [dis [courteous]]]
*[un [dis [loyal]]]

(24)
[un [[distract] ing]]（紛らわさない）
[un [[discover]] able]]（発見されない）
[un [[dis [hearten]] ed]]（落胆していない）

(23) では、*un-* のすぐ隣の構造内に *dis-* があり、*un-* は否定的な意味を持つ要素とは隣り合わないという制約がはたらく。一方で (24) では、*un-* の二つ隣の構造内に *dis-* があるため、可能な形となる。表面的に隣接しているかどうかではなく、構造上一つ隣に *dis-* があるかどうかが重要な点であることがわかる。このことは *dis-* に限らず、否定的な意味を持つ要素一般にあてはまる条件である（大石 1987: 66）。

(25)
*[un [horrible]]
*[un [jealous]]
*[un [[grace] less]]

(26)
[un [[horrify] ed]]（恐怖を受けない）

[un [[envy] ous]]（ねたまない）

また、*un-* には二種類あり、否定を示すものと、動詞に付加しその反対行動を示すものがある。

一つ目の *un-* は、否定の接頭辞として広く使われており、本来は形容詞や副詞に付加したものであるが、形容詞から派生した名詞に付くこともある。動詞では、分詞につくのみである。

(27)
unwilling, unheard-of, uncared-for

二つ目の *un-* は、動詞に付加し、その反対行動を示すもので、その用法を示すものには以下のようなものがある。

(28)
unbind, undo, untie, unfold

だが、14世紀からは、その語に含まれている名詞が示す内容からの解放・離脱の意味にも使われるようになり、16世紀からは名詞・形容詞に付加し、それを奪う動詞の意味にも使用されるようになり、用法が拡大した。

(29)
unearth（発掘する）
unburden（取り除く）
unhand（手離す）
unbonnet（脱帽する）

(30)
unking（王位を奪う）
unman（めめしくする）

動詞の機能の語に対しては、二つ目の用法である欠性辞（privative）であると判別

できるが、過去分詞に付加された「*un-* +過去分詞」の形に対しては、否定辞（negative）の用法か欠性辞の用法かを判断するのは難しい。

2.4 先行研究

この節においては、三つの先行研究を、要約した形で紹介する。

2.4.1 平尾（1994）

平尾（1994）では、現代英語における否定接頭辞を用いた語形成において、本来語であるゲルマン語系の否定接頭辞が借用によるラテン語系の語彙に付加する場合と、その反対に、ラテン語系の否定接頭辞がゲルマン語系の語彙に付加する場合の使用状況を調査した。

平尾は、*Merriam Webster's Collegiate Dictionary Tenth Edition* を用い、否定接頭辞 *un-*、*mis-*、*in-*、*dis-*、*non-* に続く語の頭文字を a、b、g、h、s、t に限定し、その語幹の語源を調べた。

その結果 *un-*、*mis-* は、ゲルマン語本来の否定接頭辞であるにもかかわらず、借用により増加したラテン語系の語彙とも比較的容易に接続し、語形成力において影響力を著しく保っていることが分かった。*in-* はその使用例のすべてがラテン語系の語彙であった。*dis-* もゲルマン語系語彙に接続するものも僅かながら存在するが、ほとんどがラテン語系語彙接続である。このことから、英語に借用される以前から語形成された例が多く、借用されてから語形成された例はほとんどないと考えられる。*non-* に関しては、ラテン語系の否定接頭辞であるが、ゲルマン語系の語彙にも接続する。その理由として、*non-* は古英語期から存在していたため、その一部が本来語に同化していたためと考えられる。

2.4.2 岡田（2009）

un- は古英語の時代から最も使われた接頭辞であり、古英語の時代に1250語が記録されており、*un-* 派生語も中英語、現代英語においても使われている。一方、*in-* は中英語期に、すでに基体に付加された状態で英語に借用された。本来語の接頭辞ではないものは、その借用元言語に付加されると考えられる。

岡田は、Jespersen（1917）と Marchand（1966）の示した50の二重語に *in-* が付加される場合と *un-* が付加される場合のそれぞれの出現頻度を *BNC* のデータに基づき、二つの型に分類した。その中で、ほとんどの語において *un*-word が *in*-word より早

い年代に出現しており、*un-* 接頭辞が、*in-* 接頭辞より超越していた。中英語期には、借用語に対し、*un-* を付けて否定することは、英語話者にとって自然なことであった。だが、フランス語から英語への借用が増え、同時に *in*-words が英語に直接もたらされたことで、*in-* 接頭辞を使う習慣ができ、借用元言語に *un-* を付けて否定することが減った。

2.4.3 姫田（2000）

英語の否定接頭辞である *un-*、*in-*、*dis-* について辞書に記載されている語彙項目に基づく考察を行った。

否定接頭辞と逆転・欠如の接頭辞を区別することは場合によっては困難に思える。*dis-* と *un-* においてはいずれも同一の形式を伴った逆転・欠如の接頭辞付与における派生語が存在するからである。否定の接頭辞 *un-* と逆転・欠如の接頭辞 *un-* の違いは、否定の *un-* 付与による動詞が存在しないことから判断ができる。一方 *dis-* の場合は、派生動詞が存在するため、動詞の不在によって、否定接頭辞であるのか逆転・欠如の接頭辞であるのかは区別できない。また、否定接頭辞 *un-* 付与による動詞派生語は、事物がその基となる動詞のまだ行われていない状態を指すのに対し、否定接頭辞の *dis-* 付与による動詞派生語は、その基となる動詞がすでに行われたのか、まだ行われていなかったのかが不確かであるという違いもある。

語の生産性については、意味の規則性と密接に関係しており、意味がより予測可能（規則的）であればあるほど、人々がそれを使い、一つの語として確立されやすいと想定した。そして *un-*、*dis-*、*in-* について、否定接頭辞付与による派生語の反義語が、その基となる語であるならば意味的に規則的であるとし、結果として生産的であると想定した。規則的かどうかの判断は *Webster's Collegiate Thesaurus* （1976）の定義によるものとする。*in-* 付与における派生語には動詞がないため、他の接頭辞についても派生動詞は除外し、データを取ったところ、語彙数は、*un-* が786語、*in-* が409語、*dis-* が99語であった。意味の規則性については、規則的な意味となるものが *un-* は78.4%、*in-* は77.8%、*dis-* は63.6%という結果であり、*un-* が最も生産的と考えられる。また、*un-* は、**unfinish*、**unbelieve* のように動詞の形は存在しないにも関わらず、*unfinished*、*unbelieving* のようにその分詞形は存在するという事実が、その生産能力の高さを示すとも考えられる。

一般的な否定接頭辞の生産性については、語源的要素から考察されることが多いが、意味的規則性によっても、ある程度否定接頭辞の生産能力と関連している可能性

があると考えられる。

第3章 *Merriam Webster's Collegiate Dictionary Eleventh Edition* における *in*-X、 *un*-X の比較研究結果および考察

3.1 調査手順

Merriam Webster's Collegiate Dictionary Eleventh Edition を用い、否定の *in*-、*un*- の使い分けについて調査を行った。なお、*un*- には二種類あり、形容詞や副詞、名詞に付加され否定を示す否定接頭辞と、動詞に付加され、その表わす行為と反対の行為、またはその行為を元に戻すことを示す動詞接頭辞がある。だがこの二つは、*un*- が分詞に付加された形であると区別をするのが難しいため、両者を分類せずに調査を進めた。

今回の調査では *in*- と *un*- の比較を行うことを目的とし、その一つとして付加する際に語源により制約があるかどうかを調べるため、*in*-、*un*- が付加している語彙について、その語源を調べた。単独で単語として存在するもののみを対象とし、単独では単語として存在していないものは対象外として扱った。

また、*illegal* という語について見ると、*illegal*、 *illegality*、 *illegally*、 *illegalize*、 *illegalization* が掲載されているが、*legal* を基に派生したものであるため、この場合は *legal* の語源を調べ、ラテン語系かゲルマン語系、あるいはその他の言語に付加されているかを調べることとする。この場合、*in*- が *legal* というラテン語系の語彙に付加しているとして、一つとして数え、*illegality* や *illegally* などは数には入れないこととする。これは語数ではなく、*in*- あるいは *un*- が付加する語の何割がラテン語系語彙であるか、ゲルマン語系語彙であるかということを調査するためである。他の語についても同様にし、調査をした。

語源辞典として『英語語源辞典』および、*The Online Etymology Dictionary* を用いた。各語彙の語源を調査するにあたり、ラテン語から古英語に借用されたものについては、古英語から存在していたため、ゲルマン語系の語彙として分類し、語源が不明であったものに関しては、その他とした。

3.2 調査結果

3.2.1 *in*- の使用例

表1. *in-*（*il-, im-, ir-* 含む）の使用頻度

in-	語数	
ラテン語系語彙	358	97.3%
ゲルマン語系語彙	0	0%
その他	10	2.7%
	368	100%

表2. *il-, im-, in-, ir-* の内訳

	il-	*im-*	*in-*	*ir-*	計	
ラテン語系語彙	9	68	247	34	358	97.3%
ゲルマン語系語彙	0	0	0	0	0	0%
その他	0	0	8	2	10	2.7%
	9	68	255	36	368	100%

その他として語源が分からなかったものがいくつかあったが、それ以外はすべてラテン語系の語彙に付加していた。このことから、中英語期にラテン語から借用された否定接頭辞 *in-* は、語源を同じくするラテン語系の語彙にのみ付加されるということがいえる。これは、語彙が英語に借用されるときにはすでに、*in-* が付加され、その後 *in-* 付加の状態で英語に入ってきたのだと考えられる。

3.2.2 *un-*の使用例

表3. *un-*の使用頻度

un-	語数	
ラテン語系語彙	430	30%
ゲルマン語系語彙	929	66%
その他	51	4%
	1410	100%

本来語の *un-* は、ゲルマン語系の語彙だけでなく、ラテン語系の語彙にも付加される。*in-* に関しては、形容詞に付加するものがほとんどであったが、*un-* に関しては、名詞や動詞に付加するものも見られた。また、*un-* の使用例では、動詞の分詞形が多く見られたのも特徴的であった。

3.2.3 *in-*、*un-* どちらも付加するもの

今回の調査の中で *in-*、*un-* いずれの形も見られるものが (31) に示すもので、67語見つかった。

(31)

alienable, alterable, alterability, alterableness, alterably, appreciative, approachable, apt, aptly, aptness, arguable, artistic, authentic, balance, balanced, communicative, conceivable, conformity, controllable, corrupt, curious, decipherable, definable, describable, determinable, digested, digestible, disciplined, discoverable, discriminating, disputable, docile, educable, escapable, essential, explainable, famous, feasible, fertile, literacy, measurable, moral, movable, passable, perceptive, perfect, political, practical, real, reality, reclaimable, reconcilable, recoverable, redeemable, removable, resolvable, responsive, sanitary, sociable, sociability, sociably, stable, substantial, substantiality, supportable, susceptible, viable

まず、(31) に示した67語について、*BNC* および *COHA* により、*in-* が付加される場合と *un-* が付加される場合の頻度を確かめた。BNC とは、*The British National Corpus* のことで、書きことばと話しことばあわせて98,313,429語からなる世界最大のイギリス英語コーパスである。*COHA* とは1810年から2009年のアメリカ英語テキスト406,232,024語を収録したコーパスである。*BNC* による結果を表４に示す。

表4　*BNC* における *in-/un-* の出現頻度

		in-	un-			in-	un-			in-	un-
1	alienable	59	1	**2**	alterable	1	42	**3**	alterably	0	0
4	alterableness	0	0	**5**	alterably	1	5	**6**	appreciative	0	12
7	approachable	0	37	**8**	apt	5	0	**9**	aptly	3	0

10	aptness	0	0	**11**	arguable	2	19	**12**	artistic	7	2
13	authentic	14	3	**14**	balance	427	23	**15**	balanced	14	211
16	communicative	1	27	**17**	conceivable	255	0	**18**	conformity	0	31
19	controllable	0	212	**20**	corrupt	3	5	**21**	curious	9	2
22	decipherable	38	3	**23**	definable	91	13	**24**	describable	81	0
25	determinable	4	0	**26**	digested	0	29	**27**	digestible	63	0
28	disciplined	10	77	**29**	discoverable	0	1	**30**	discriminating	1	14
31	disputable	99	1	**32**	docile	0	0	**33**	educable	6	0
34	escapable	226	0	**35**	essential	17	2	**36**	explainable	0	10
37	famous	320	4	**38**	feasible	31	12	**39**	fertile	91	2
40	literacy	109	0	**41**	measurable	48	9	**42**	moral	313	2
43	movable	87	2	**44**	passable	98	0	**45**	perceptive	2	3
46	perfect	348	0	**47**	political	0	17	**48**	practical	289	9
49	real	0	289	**50**	reality	0	107	**51**	reclaimable	0	1
52	reconcilable	102	2	**53**	recoverable	54	5	**54**	redeemable	34	3
55	removable	8	2	**56**	resolvable	10	13	**57**	responsive	1	102
58	sanitary	47	13	**59**	sociable	0	31	**60**	sociability	0	0
61	sociably	0	0	**62**	stable	1	697	**63**	substantial	122	4
64	substantially	5	0	**65**	supportable	39	15	**66**	susceptible	2	4
67	viable	2	18								

この結果を受け、いくつかの点について考察をしていく。まず、表4の *BNC* の調査結果から、*conceivable* を見てみると、*in-* 付加が255あるのに対し *un-* 付加は0という結果であり、*in-* が使用される頻度が圧倒的に多いと言える。同様に、どちらかが0という結果であり、なおかつ両者に大きな差があったものとして、*controllable*、*escapable*、*perfect*、*real* があった。他にも、*in-*、*un-* いずれも出現があったが、大きな差があるものとして、*balance*、*famous*、*moral*、*practical*、*stable* があった。

これらの語について、*COHA* での頻度を調べたところ、次の結果が得られた。

表5. *BNC* と *COHA* による頻度

	BNC		COHA	
	in-	un-	in-	un-
balance	427	23	465	78
conceivable	255	0	1532	1
controllable	0	212	2	23
escapable	226	0	723	45
famous	320	4	1860	3
moral	313	2	1800	68
perfect	348	0	3758	1
practical	289	9	770	178
real	0	289	0	1919
stable	1	697	7	1532

表5を見ると、すべての語で、*BNC* においても *COHA* においても、出現頻度に大きな差があった。このことから辞書に *in-* の形と *un-* の形の両方の記載がある場合であっても、*in-* あるいは *un-* のどちらか一方が好まれ、使用されていると考えられる。これらの語について、*in-* が付加されたものと、*un-* が付加されたものの意味を *Merriam Webster's Collegiate Dictionary Eleventh Edition* において調べてみた。*balance* について、*unbalance* を引くと、意味として "imbalance" と書かれている。*Conceivable* に関しても、*unconceivable* を引くと、"inconceivable" と書かれている。これらについては、*in-* 付加の形も、*un-* 付加の形もどちらも同じ意味で使われており、形として存在してはいるが、一般的に片方のみが使われているのだと考えられる。*balance* では *in-* 付加の形が、*conceivable* でも *in-* 付加の形が一般的に使用される。*controllable*、*perfect*、*stable* でも同様のことがいえ、*controllable* では、*un-* が、*perfect* では *in-* が、*stable* では *un-* が一般的であるといえる。このことは、*BNC* と *COHA* の結果とも一致する。

次に、*balance* と *balanced* についてである。*balanced* は *balance* が基になっている語だが、*balance* は *in-* が付加されやすいのに対し、*balanced* は *un-* が付加されやすいという結果であった。*COHA* においても、同様の結果となった。*OED* によると、*imbalance* が最初に現れたのは1898年、*unbalance* は1586年、*imbalanced* は記載

なし、*unbalanced* は1650年であった。このことから、もともとは *balance* を否定する際には、*un-* が付加され、*unbalance* が使われていたが、後に、その否定の役割を *in-* に取って代わられてきたのではないかと考えることができる。中英語期には、否定の意味を加えるには *un-* を付加することが自然であったが、英語への大量の借用がなされ、同時にラテン語系の *in-* が付加された状態での借用語も増えた。そのことにより、ラテン語系の語彙には *in-* を付けるという意識が強くはたらき、*un-* の生産性は狭められ *in-* の勢力が強くなったのではないかと考えられる。*balanced* の否定には *in-* よりも *un-* が好まれているのは、*-ed* はクラス II 接辞であり、クラス I 接辞の *in-* がその外側には付くことができないという制約がはたらくからである。だが、(31) に示した語の中には *in-* がクラス II 接頭辞の外側に付加されている例がいくつかあった。

(32)
a. disputable
b. decipherable
c. describable
d. reclaimable
e. reconcilable
f. recoverable
g. redeemable
h. removable
i. responsive

(32) に示す語は、クラス II 接頭辞の外側に *in-* が付与された使用例が *BNC* および *COHA* で見つかったものである。

表6.　クラス II 接頭辞に *in-* が付く語の頻度

		BNC		COHA	
		in-	un-	in-	un-
a	disputable	99	1	776	13
b	decipherable	38	3	91	50
c	describable	81	0	1457	9
d	reclaimable	0	1	79	3
e	reconcilable	102	2	653	5
f	recoverable	54	5	74	18
g	redeemable	34	3	262	22
h	removable	8	2	40	2
i	responsive	1	102	34	402

(32) a の *disputable* の *dis-* は、クラス II の接頭辞で形容詞、名詞、動詞に付き「逆」、「否定」、「正反対」の概念を示すものである。*-able* はクラス I の接尾辞で動詞、名詞に付き、形容詞を形成し、能力や状況を含めて「可能性」、「傾向」の意味を表わすものである。*disputable* という語は、まず、*dis-* と *pute* が結びつき *dispute* という動詞を成し、それに *-able* が付加しているのである。否定の意を表すときは、*disputable* という形容詞に、*in-* あるいは *un-* が付加される構造である。本来、クラス I 接頭辞である *in-* は、クラス II 接頭辞の *dis-* の外側につくことはできない。だが、*BNC* においても *COHA* においても *indisputable* は *undisputable* よりも高い頻度で使用されている。これは第3章で述べた、*un-* は否定的な意味を持つ要素とは隣り合わないということが関係していると考えられる。構造としては、[un [[dispute] able]]となり、*un-*のすぐ隣の構造内に *dis-* があるわけではないので、隣接制約には反しないのだが、*un-* は否定的な意味を持つものには付加しにくいという意識から、*un-* よりも *in-* を好む傾向にあるのではないかと考えられる。また、*-able* もクラス I であるため、*dispute* へ付加することができないのではないかと思われるが、この点に関しては、接頭辞と接尾辞ではレベル順序付けが独立して作用することがあるのではないかと考える。

(32) b、c では、クラス II 接頭辞である *de-* が問題となる。これは名詞、ラテン語系の連結辞に付加し、動詞を作りだすものである。「解体」、「離脱」、「反対」な

どの意味を表わす。*OED* によると、*decipherable* についても *describable* についても、*un-* 付与の形が先に出現しており、*in-* はそのあとで見られている。

表7.　*OED* による初出年

	un- + de-		in- + de-	
b	undecipherable	1758年	indecipherable	1802年
c	undescribable	1728年	indescribable	1794年

このことから、もともとは否定の意味を示すときには *un-* が付加されていたが、ラテン語系の語彙には同じラテン語系の接辞が付きやすいという意識が強まり、*in-* の勢力が拡大しつつあるのだと考えられる。

同じことが (32) d~i の語にも言える。これらは、*in-*、*un-* の内側に接頭辞 *re-* が付加されている例である。*re-* はクラス II の接頭辞で、動詞に付加し、「繰り返し」や「元に戻る」といった概念を表わす。これもクラス II なので、やはり *in-* が外側に付くことはできない。だが、*reclaimable*、*reconcilable*、*recoverable*、*redeemable*、*removable* では *un-* よりも *in-* の方が好まれる傾向にあり、*responsive* でも *un-* の方が頻度は高いが、*in-* がないわけではない。これらの語について *OED* を見てみると、いずれも *un-* が付加した場合の方が早く出現している。

表8.　*OED* による初出年

	un- + re-		in- + re-	
d	unreclaimable	1577	irreclaimable	1609
e	unreconcilable	1577	irreconcilable	1599
f	unrecoverable	1448	irrecoverable	1540
g	unredeemable	1584	irredeemable	1609
h	unremovable	1500	irremovable	1598
i	unresponsive	1668	irresponsive	1846

re- についても、*dis-* や *de-* の例と同様のことがいえ、クラス分けの条件に従うと、*in-* は *re-* の外側につくことはできない。だが、クラス I、クラス II による制限とは別に、*in-* のラテン系への反応性が高まることで *in-* の勢力は強まり、

reclaimable や *reconcilable* にも *in-* を付けて否定の意味を加えることが自然となりつつあるのではないかと考えられる。また、(16) の例で、意味が拡大された際に条件が緩むことについて触れたが、*dis-*、*de-*、*re-* についても同様の考え方を当てはめることができると考える。例えば今回の調査で用いた *Merriam Webster's Dictionary* には *indefensible* という語が載っており、*defensible* には「防御できる、弁護できる」といった意味があるが、*indefensible* には「防ぎえない、弁護の余地のない」という意味だけでなく、「論理的に一貫性のない」という意味がある。これは、単なる否定から、少し意味が拡大している。この意味の拡大が、条件を緩め、クラス II 接辞の外側にクラス I 接辞が付くことを可能にしているのだと考えられる。

第4章 結論

これまで、先行研究や、第3章での *Merriam Webster's Dictionary* を用いた調査などから、否定の意味を加える二つの接頭辞 *in-* と *un-* について見てきた。借用によってもたらされたラテン語系の接頭辞である *in-* はラテン語系の語彙にしか付加されず、古くから否定の意を表すのに頻繁に用いられてきた本来語の接頭辞 *un-* はゲルマン語系の語彙はもちろんのこと、ラテン語系の語彙にも付加され、生産性が高いと言われてきた。今回の調査でも、そのような結果となった。

だが、クラス I 接辞はクラス II 接辞の外側に付加することはできないという順序付けの例外がいくつか見つかった。そのうち、クラス I 接尾辞が、クラス II 接頭辞の外側に付加しているものについては、接頭辞と接尾辞では、順序付けは独立しているために、問題とならないという説明ができると考えられる。今回の調査の中では、*disputable* や *describable*、*removable* などがその例であり、クラス II 接頭辞の *dis-*、*de-*、*re-* が動詞に付加した後で、クラス I 接尾辞 *-able* が付加しているが、これは、構造上可能となることがあるのではないかと考えた。だが、それらの語に否定の意味を加える際、順序付けに従うと、クラス I 接頭辞である *in-* をクラス II 接頭辞の外側に付けることはできない。しかし実際には、*indisputable* や *indescribable*、*irremovable* は存在し、使用されている。これは、中英語期にラテン語系の語彙が英語へ大量に借用され、同時に *in-* がついた状態の語がもたらされたことで、それまで否定を造るために用いられていた *un-* の生産性が狭められたことと関係していると考えられる。そして *un-* の勢力が弱まることで、*in-* は少しずつその勢力を伸ばしてきたのである。*un-* で否定された形が存在しているにもかかわらず、それより後に *in-* で否定さ

れた形の出現があり、頻度も *in-* の方が高いということは、*in-* の勢力の拡大を意味しているのだと考えられる。そして、この *in-* の勢力拡大は、[in [[dis [pute]] able]] といった階層構造におけるクラス I 接辞、クラス II 接辞の付加順序に変化が生じたと考えているのではない。否定接辞が付加する基体がラテン系の要素を持っているのかどうかが関係するのである。*indisputable* を例にすると、*dis-* も *-able* もどちらもラテン語系の接辞であり、このラテン語性に反応し、同じラテン語系借用接辞の *in-* が付加するということである。これは階層構造とは全く関係なく、別原理としてはたらくのだと考えられる。*re-* や *de-*、*-ive* もすべてラテン語系の接辞であり、(32) に示した例は、このラテン性に *in-* が反応を示したのだと考えられる。この先、ますますその力が強くなると、現在は *un-* での否定が優勢である語に関しても *in-* での否定が使用されるようになることも予想され、*un-* の生産性は弱まっていくのではないか。本研究では、*dis-*、*de-*、*re-* の三つの接頭辞の外側に *in-* が付加している例のみしか調査することができなかったが、その他のクラス II 接頭辞の外側に *in-* が付加している例の考察や、音韻論的、意味論的観点からも研究を深める必要があるだろう。

参考文献

BNC = British National Corpus: <http://bncweb.lancs.ac.uk/bncwebSignup/user/login.php>

COHA = The Corpus of Historical American English: < http://corpus.byu.edu/coha/>

Merriam-Webster's Collegiate Dictionary Eleventh Edition. Ed. Frederick C. Mish. Springfield, Mass: Merriam-Webster, Inc, 2003. Print.

The Compact Edition of the Oxford English Dictionary, Volumes 1and 2. Oxford: Oxford UP, 1987. Print.

---. *The Online Etymology Dictionary*. Ed. Douglas Harper. Web. 9 Nov, 2012. <http://www.etymonline.com/index.php>

上野景福　『語形成』　研究社、1955年。

大石強　『形態論』　開拓社、1988年。

岡田晃　「英語の否定接頭辞の歴史的分析―ラテン系の in-とゲルマン系の un-を比較して―」『語学教育研究論叢』、第26号、2009年、199-209ページ。

寺澤芳雄（編）　『英語語源辞典』　研究社、1997年。

姫田慎也　「否定の接頭辞の生産性」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第22巻、2000年、75-83ページ。

平尾政幸　「英語の否定接頭辞に関する一考察」『拓殖大学論集　人文・自然科学』第２巻第３号、1994年、71-88ページ。

大学院論文

A Review of the Studies of VP-Ellipsis in SLA

Sayaka Koyama

1. Introduction

From the 1960's, a number of studies have been conducted in the field of second language acquisition (SLA) research, and these studies have shown that second language (L2) acquisition is different from first language (L1) acquisition in some aspects. It has also been lively debated whether interlanguage grammars are constrained by Universal Grammar (UG) (Eubank, 1991). If L2 learners are able to acquire abstract properties that are not explicit by L2 input, this 'poverty of stimulus' strongly suggests that UG constrains interlanguage grammars. In generative approaches to first language acquisition, it is generally agreed that UG is the initial state of an emerging first language grammar, while several models have been proposed with respect to the initial state of interlanguage grammars in studies of SLA. These models mainly discuss whether functional categories as well as lexical categories are available at the initial state of L2 grammars: Some suggest they are (Full Transfer/ Full Access Model of Schwartz & Sprouse, 1994; 1996) and others suggest they are not (Minimal Trees Model of Vainikka & Young-Scholten, 1994; 1996a; 1996b, and Lexical Learning/Lexical Transfer Model of Wakabayashi, 1997; 2002). There are other important issues in SLA studies, and one of them is whether intermediate or advanced L2 learners reject some structures as ungrammatical and interpret certain constituents in the same way as native speakers do. VP-ellipsis (i.e., verb phrase ellipsis, and henceforth, VPE) is an example of the topics as such.

Certain constituents in a specific syntactic structure can be null (i.e., not pronounced) and a VP can be elided in a restricted way in English as in (1). (Elided items are indicated by strikethrough):

(1) a. John has finished work, and Mary has ~~finished work~~ too.
b. John was playing soccer, and Mary was ~~playing soccer~~ too.

Note that auxiliaries have to remain in these sentences. When a sentence does not have an auxiliary, VPE must co-occur with the dummy auxiliary *do* as in (2). Just like the sentences with a modal or aspectual auxiliary, the dummy auxiliary *do* must be placed. Without it, the sentence becomes ungrammatical:

(2) a. John plays soccer, and Mary does ~~plays soccer~~ too.
b. *John plays soccer, and Mary ~~plays soccer~~ too.

As shown above, VPE involves a syntactic constraint: T has to be spelled out even VPE takes place (but see below). Moreover, the elided constituents do not have to be exactly the same as a part of the preceding sentence. The auxiliary *has* is repeated in the second clause in (3a), while *did* is used instead in (3b), which is also grammatical.

(3) a. Sue has sold her house. John believed that Mary has too.
b. Sue has sold her house. John believed that Mary did too.

(Hawkins, 2012: 420)

Besides, VPE requires what-is-called 'parallelism' to be licensed in English. A sentence is ungrammatical even when it is pragmatically feasible as shown in (4):

(4) The garbage had to be put out. ── *But I didn't want to.

(Duffield & Matsuo, 2009: 2 (1b))

The intended meaning of the second clause of (4) is *But I didn't want to put the garbage out*, and this should be undoubtedly available to native speakers. The problem with (4) is that *to be put out* has the passive voice, while what needs be placed after *to* in the second sentence has to have the active voice, and so they are not 'parallel.'

In fact, the sentence becomes grammatical when we add an anaphoric expression as in (5). The constituent *do it* is called a VPA (verb phrase anaphora).

(5) The garbage had to be put out. ── But I didn't want to do it.

(Duffield & Matsuo, 2009: 2 (2b))

As seen here, VPE (as well as VPA) involves identification and licensing in a sense similar to empty categories suggested in Rizzi (1990). The grammar underlying VPE is very unlikely to be acquired only through L2 input because it requires some abstract syntactic knowledge (see below).

Ellipsis is interesting because i) an elided clause constitutes a conceptual-grammatical

(semantic-syntactic) interface: An elided clause is determined only after the elided clause has been reconstructed, depending on semantic and syntactic properties of the antecedent clause; ii) the parallelism effect is differently constrained to VPE and VPA, and hence they rely on different grammatical properties; and iii) the parallelism effect is gradient, in contrast to categorical in acceptability, and thus the gradience should be integrated in the form of the formal grammar (Duffield & Matsuo, 2009). These issues are not directly treated in this paper (in the same way as neither Duffield & Matsuo (2009) nor Hawkins (2012) did) but the investigation of L2 grammar concerning VPE and VPA will surely contribute to our understanding of L2 grammar at the interface; syntactic and other constraints; and 'gradiene' in L2 learners' judgments.

In this paper, I will review two representational studies of second language acquisition of the grammar underlying VPE. In section 2, I will review Duffield and Matsuo (2009) and Hawkins (2012), and then propose remaining questions and a design of further studies in section 3. A brief conclusion will be given in section 4.

2. The Papers

There are not many studies conducted as to the acquisition of English VPE. I take up and review two studies that represent the current issues on this topic in this study.

2.1 Duffield and Matsuo (2009)

Duffield and Matsuo (2009: D&M, henceforth) examine native speakers' vs. L2 learners' behavior concerning (un)acceptable use of VPE constructions in English. Specifically, they investigate the parallelism effect in VPE, a syntactic constraint on the form of an antecedent clause (Hankamer & Sag, 1976). Even when VPE is allowed in a certain circumstance (e.g., (6a, c)), it is not allowed when the antecedent is not parallel, where the (potential) antecedent is passive while the elided VP is active (6b) or the (potential) antecedent is nominal while the elided VP is an active VP (6d).

(6) a. Someone had to put out the garbage — But I didn't want to. (See (4).)
b. The garbage had to be put out. — *But I didn't want to.
c. It annoyed Sally if anyone mentioned her sister's name. — Tom did, out of spite.

d. The mention of her sister's name annoyed Sally. — *Tom did, out of spite.

(Based on D&M, 2009: 2 (1))

In contrast to VPE, VPA does not exhibit a parallelism effect in English. That is, nonparallel antecedent are allowed in VPA as shown in (7).

(7) a. Someone had to put out the garbage. — But I didn't want to *do it*.
b. The garbage had to be put out. — But I didn't want to *do it*.
c. It annoyed Sally if anyone mentioned her sister's name. — Tom *did it*, out of spite.
d. The mention of her sister's name annoyed Sally. — Tom *did it*, out of spite.

(D&M, 2009: 2, (2))

D&M dealt with native speakers' and L2 learners' behavior. These learners' L1s were Dutch, Japanese and Spanish. These three languages are generally considered to have no VPE (e.g., Lobec, 1995; Lopez, 1994) but D&M argue that the languages are best analyzed independently because (i) it is not clear whether Japanese allows VPE (e.g., Hoji, 1998; Otani & Whitman, 1991[1]), and (ii) the parallelism effect may apply differently in these languages.

Let us examine VPE in Dutch first. Dutch does not allow VPE but allows VPA, as illustrated in (8). Dutch *doen* is a translation equivalent to English *do*.

(8) a. **Iemand moest het vuilnis buiten zetten, maar Marie wilde niet.*
someone had-to the garbage out set but Marie wanted not
"Someone had to take out the garbage, but Marie didn't want to."
b. **Marie zei dat ze het vuilnis buiten zou zetten maar tot nu toe heeft ze niet.*
Marie said that she the garbage out would set but till now-till has she not
"Mary said that she would put out the garbage,but so far she hasn't."

(D&M, 2009: 9, (8))

Differently from VPA in English, the parallelism effect is applied to VPA in Dutch.

(9) a. *Iemand moest het vuilnis buiten zetten,maar Marie wilde het niet doen.*
someone had-to the garbage out set but Marie wanted it not do
"Someone had to take out the garbage, but Marie didn't want to."

b. ?*Het vuilnis moest buiten gezet worden maar Marie wilde het niet doen.*
the garbage had-to out set be but Marie wanted it not do
"The garbage had to be taken out, but Marie didn't want to do it."

(D&M, 2009: 10, (9))

Japanese differs from English with respect to VPE. Japanese translation equivalent to (6b) is allowed as shown in (10a), i.e., Japanese allows VPE even when the antecedent is passive[2]. However, the antecedent is nominal, VPE is not allowed as in (10b).

(10) a. *Gomi-wa dasare-nakereba-naranakatta, demo watasi-wa dasi-taku-nakatta.*
garbage-$_{TOP}$ take-out-$_{PASS}$-have-to-$_{PST}$ but I-$_{TOP}$ take-out-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"??The garbage had to be taken out, but I didn't want to (take out)."

b. **John-wa kisu-ga hosikattaga, Mary-wa si-taku-nakatta.*
John-$_{TOP}$ kiss-$_{NOM}$ want-$_{PST}$ but Mary-$_{TOP}$ do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"*John wanted a kiss but Mary didn't want to."

(D&M, 2009:10, (11))

With regard to theoretical accounts for the omission of an object NP in Japanese, such as those in (10), Otani and Whitman (1991) argue that Japanese has VPE, which involves V-to-T movement, while Hoji (1999) claims that Japanese does not have VPE, but rather has Null Object Constructions (NOCs). That is, Japanese allows phonetically null pronoun, *pro* at the object position. This implies that these sentences have VPA rather than VPE. Anyhow neither analysis suggests that Japanese structure is equivalent to VPE in English. The difference between VPE and VPE-like sentence in Japanese is illustrated in (11).

(11) John-wa [zibun-no tegami-o] sute-ta. — Mary mo sute-ta.
John-$_{NOM}$ self-of letter-$_{ACC}$ discard-$_{PERF}$. Mary also discard-$_{PERF}$.
'John$_i$ threw out self's$_i$ letter. —Mary did (so), too'

a. VPE Analysis
[$_{TP}$ Mary-mo [$_{VP}$ ~~zibun-no~~ $_{NP}$ ~~tegami-o~~ $_{V}$ ~~sute~~] $_{T}$ sute-ta]

b. Null Object Analysis

[$_{TP}$ Mary-mo [$_{VP}$ *pro*] $_{V}$ sute- $_{T}$ ta]

VPA in Japanese (with an overt pronoun *so*) is also different from the one in English. Japanese does not prefer nonparallel antecedents either with a passive or nominal antecedent in VPA, as in (12)[3].

(12) a. ?*Gomi-wa dasare-nakereba-naranakatta, demo watasi-wa soo si-taku-nakatta.*
garbage-$_{TOP}$ take-out-$_{PASS}$-have-to-$_{PST}$ but I-$_{TOP}$ so take-out-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"The garbage had to be taken out, but I didn't want to do so."

b. ?*John-wa kisu-ga hosikattaga, Mary-wa soosi-taku-nakatta.*
John-$_{TOP}$ kiss-$_{NOM}$ want-$_{PST}$ but Mary-$_{TOP}$ so do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"John wanted a kiss but Mary didn't want to do it."

(D&M, 2009: 11, (12))

Spanish does not have VPE but has a VPA construction, and allows only verbal antecedents in VPA. The parallelism constraint partially operates here: Passive antecedents are allowed but nominal ones are not:

(13) a. ?*La basura tiene que sacaese, pero yo no quiero.*
The garbage has $_{COMP}$ take-out but I $_{NEG}$ want
"*The garbage has to be taken out, but I don't want to."

b. **Juan quería un beso, pero Maria no quería.*
John wanted a kiss but Mary $_{NEG}$ wanted
"*John wanted a kiss, but Mary didn't want (to)."

(D&M, 2009: 11, (13))

In addition, Spanish has Null Complement Anaphora (NCA), which is constrained by parallelism in the same way as in English VPE. In this sense, NCA is similar to English VPE. That is, nominal antecedents are not allowed in NCA whereas other antecedents (active, passive and verbal) are allowed. Examples of NCA in Spanish are shown in (14).

(14) a. *La basura tiene que sacarse, pero yo no quiero hacerlo.*
the garbage has $_{COMP}$ take-out-$_{REFL}$ but I $_{NEG}$ want do-it
"The garbage has to be taken out, but I don't want to do it."

b. **Juan quería un beso, pero Maria no quería hacerlo.*
John wanted a kiss but Mary $_{NEG}$ wanted do-it
"John wanted a kiss, but Mary didn't want to do it."

(D&M, 2009:11, (14))

So far, we discussed similarities and differences among English, Dutch, Japanese and Spanish. The summary of cross-linguistic varieties is shown in Table 1.

Table 1. VPE and VPA in four languages (Based on D&M: 12, Table 1)

	Antecedent Type			
Language and anaphor type	Active	Passive	Verbal*	Nominal
English				
VPE	√	*	√	*
VPA	√	√	√	√
Dutch				
VPE	NA**	NA	NA	NA
VPA	√	??	√	*
Japanese[4]				
VPE (NOC)	(√)	(√)	(√)	(*)
VPA	√	?	√	?
Spanish				
VPE (NCA)	(√)	√	(√)	(*)
VPA	√	√	√	*

Note: * This type is named "Verbal" so that it is compared to Nominal. In fact, Verbal is the same as Active in the Active-Passive pair.

**NA means "not available."

D&M conducted two experiments to examine L1 effects on L2 English. Participants included English NSs (*n* = 22) and three groups of L2 learners: L1 Dutch (*n* = 20), L1 Japanese

(*n* = 19), and L1 Spanish (*n* = 20). The minimum TOEFL score among the L2 learners was 550 (paper version). The experiments examined L2 learners' behavior with regard to the active versus passive antecedents in VPE and verbal versus nominal antecedents in VPA. The task was a sentence completion task that yielded two measures: an acceptability judgment and reaction time[5].

In the acceptability judgment task, participants read a context sentence first; when they understood it, they pressed a button. Then, the context sentence disappeared from the screen, and a second sentence appeared. Participants judged whether the second sentence (i.e., the target sentence with VPA or VPE) was feasible as quickly as possible.

The test materials were grouped into two separate blocks: the first block included 20 sets of four pairs (active VPE and VPA versus passive VPE and VPA); and the second block included 20 sets of four pairs (verbal VPE and VPA versus nominal VPE and VPA). 40 filler sentences are also included.

The examples of test items are as follows:

(15) VPE (=(6))

a. Active

Someone had to put out the garbage — But I didn't want to.

b. Passive

The garbage had to be put out. — *But I didn't want to.

c. Verbal

It annoyed Sally if anyone mentioned her sister's name. — Tom did, out of spite.

d. Nominal

The mention of her sister's name annoyed Sally. — *Tom did, out of spite.

(16) VPA (=(7))

a. Active

Someone had to put out the garbage. — But I didn't want to do it.

b. Passive

The garbage had to be put out. — But I didn't want to do it.

c. Verbal

It annoyed Sally if anyone mentioned her sister's name. — Tom did it, out of spite.

d. Nominal

The mention of her sister's name annoyed Sally. — Tom did it, out of spite.

(Based on D&M: 2 (1)-(2))

Overall results showed English NSs were sensitive to the parallelism effect in VPE. Dutch and Japanese were also sensitive to the parallelism of VPE whereas Spanish learners of English were not. Analysis of the individual L2 learners revealed that at least there were some L2 learners in all L1 groups who acquired the parallelism effects in English VPE regardless of their L1. Recall here that VPE is not allowed in all L1s of these learners. Based on this, D&M suggest that the parallelism effect is independent of knowledge of VPE construction.

With respect to VPA, English NSs as well as all groups of learners generally accepted VPA sentences. D&M suggest that these results can be explained with Merchant's (2001) semantic account of VPA: According to Merchant's claim, the identification conditions are only applied to syntactically licensed structures in semantics. That is, VPA is not licensed syntactically, but licensed semantically; and thus, the identification requirement is not applied.

Based on the data above, D&M conclude that even L2 learners whose L1 lacks VPE are sensitive to the parallelism effect in VPE. That is, the parallelism effect is independent of L2 learners' structural knowledge of English VPE. D&M further argue that L2 learner's subtle judgment about whether VPE and VPA are parallel or not might not infer L2 learners' access to UG, but there is another way to acquire the parallelism effect (see below). In contrast to D&M, Hawkins (2012) argues that VPE has UG-determined properties. I will review Hawkins (2012), and then compare their findings.

2.2 Hawkins (2012)

Hawkins (2012) investigates L2 learners' knowledge of syntactic and discourse properties. Consider the following VPE sentences that are both (un)grammatical and (in)felicitous.

(17)	a.	Jack wrote Jill a letter. Mary did ___ too.	simple pst … simple pst
	b.	Jack wrote Jill a letter. Mary has ___ too.	simple pst … pres perf
	c.	Jack wrote Jill a letter. Mary will ___ too.	simple pst ... fut/modal
	d.	Jack has written Jill a letter. Mary did __ too.	pres perf ... simple pst
	e.	Jack was writing Jill a letter. Mary did __ too.	past prog ... simple pst

(18) a. Jack sent Jill a letter. *Mary sent ___ too. simple pst ... stranded V
b. Jack wrote Jill a letter. #Mary was ___ too. simple pst ... past prog
c. Jill is very successful. #Mary will ___ too. copula ... fut/modal

(Hawkins, 2012: 405, (1)-(2))

Although the forms of the verbs in the first and second sentences are not the same, sentences in (17) are both grammatical and felicitous because the verbs in the first and second sentences share a certain aspect of 'lemma'. In contrast, sentences in (18) are ungrammatical or infelicitous because of the lack of such sharing. In order for VPE to be grammatical, it has to be licensed by a c-commanding functional v head that has moved to T (Rouveret, 2010). In (18a), the relevant feature in V (i.e., [past]) does not move to T, and thus the second sentence is ungrammatical (at any contexts). On the other hand, the elided material in (18b) and (18c) is fine in other contexts as in (19), so these cases are infelicitous rather than ungrammatical.

(19) a. Jack was writing Jill a letter. Mary was ___ too.
b. Jill will be very successful. Mary will ___ too.

(Hawkins, 2012: 406, (4))

Hawkins also focuses on discourse constraints in VPE with regard to whether an elided VP is 'recoverable' from an identical material in preceding discourse: While progressive *–ing* in the elided VP is not recoverable as in (20a), perfective *–en* in the elided VP is recoverable as in (20b):

(20) a. Jack wrote Jill a letter. #Mary was ~~writing Jill a letter~~ too.
b. Jack wrote Jill a letter. Mary has ~~written Jill a letter~~ too.

(Based on Hawkins, 2012: 409, (10)-(11))

Since *–ing* has an interpretable [progressive] feature, and this feature in (20a) is not recoverable from the antecedent because *wrote* is [-progressive], and the elision is infelicitous. In contrast, perfective *–en* reflects uninterpretable [perfective] feature, valued by an interpretable feature of *have*, but has no interpretable feature. Hence, the deletion of *written Jill a letter* in the second clause does not violate 'recoverability'. This yields a felicitous elision.

Hawkins selected Arabic and Chinese to compare with English. Arabic does not permit

VPE as in (21b), although 'stripping' is allowed, as in (21c). Unlike English, auxiliaries must not remain in Arabic.

(21) a. Nizar kan yə-lʕəb w Hashem kan yə-lʕəb kman (No VPE)
Nizar was 3_{MS}-play.$_{IMP}$ and Hashem was 3_{MS}-play.$_{IMP}$ too
'Nizar was playing, and Hashem was playing too.'

b. *Nizar kan yə-lʕəb w Hashem kan ___ kman. (VPE)
Nizar was 3_{MS}-play.$_{IMP}$ and Hashem was ___ too
'Nizar was playing, and Hashem was too.'

c. Nizar kan yə-lʕəb w Hashem ___ kman (Stripping)
Nizar was 3_{MS}-play.$_{IMP}$ and Hashem ___ too
'Nizar was playing, and Hashem too.'

(Hawkins, 2012: 417, (28))

In the case of Arabic leaners of English, whether they transfer their L1 properties or not, positive evidence, such as (17a), directly helps them to allow VPE in general. On the other hand, the syntactic and discourse constrains on VPE (e.g., (18a) and (20a) respectively) appear to be under-determined in the input.

Chinese has a more complex situation. Chinese allows constructions that look like VPE, which are considered to be licensed by a tense-like morpheme *shi* in v (Wu, 2002):

(22) Zhangsan kanjian-le tade mama, Lisi ye shi ___
Zhangsan see-Asp his mother, Lisi also is ___
'Zhangsan saw his mother, Lisi did ___ too'

(Hawkins, 2012: 417, (29))

On the other hand, Chinese allows object drop, which is not permitted in English:

(23) Zhangsan kanjian-le tade mama, Lisi ye kanjian-le ___
Zhangsan see-Asp his mother, Lisi also see-Asp ___
'*Zhangsan saw his mother; Lisi saw ___ too'

(Hawkins, 2012: 417, (30))

Object drop in Chinese looks like so-called 'verb-stranding' VPE in Portuguese, where main verbs are pronounced whereas their complements are not (Cyrino & Matos, 2005). Although object drop in Chinese is syntactically different from English VPE, Chinese learners of English may misinterpret VPE as object drop in Chinese.

Hawkins conducted a written sentence completion judgment task with 60 test items. Each item was preceded by a short story. Participants were native speakers of Arabic (*n*=19), of Mandarin Chinese (*n*=19) and of English (*n*=10). Participants were asked to judge whether the target sentence in each story was 'perfect', 'possible' or 'impossible'. Eleven other unrelated items and nine controls were also included in the task.

Table 2 shows a summary of the test items.

Table 2. *Types of test items (based on Hawkins, 2012; 420, Table 1)*[6]

Type	Description and example	No. of tokens
1	Control sentences —— no VPE Because of the beautiful day, Mary cut the grass in her garden. Bill expected that Sue was cutting the grass in her garden too.	9
2	VPE — simple past ... simple past — felicitous It was Jill's birthday. John sent her a card by email. Tom thought that Mary did too.	3
*3	VPE — simple past ... stranded main V — ungrammatical Jill and Mary were applying for the same job. Jill sent an application by email. John thought that Mary sent too.	3
4	VPE — simple past ... pres perfect — felicitous John posted a Christmas card to Jill. Sue believes that Tom has too.	3
5	VPE — pres perfect ... simple past — felicitous Sue has sold her house. John believed that Mary did too.	3
#6	VPE — simple past ... past progressive — infelicitous In the laboratory, Tom mixed sodium and iron. John said that Jill was too.	3
7	VPE — past progressive ... simple past — felicitous Tom was baking a cake for the party. John thought that Mary did too.	3
8	VPE — simple past ... future — felicitous After graduating, Sue returned her books to the library. John hopes that Tom will too.	3
#9	VPE — copula ... future/modal — infelicitous Jill is very successful. Tom thinks that Sue can too.	3

Overall results showed that L2 participants were just as sensitive to syntactic constraints on VPE as native speakers. However, they did not distinguish the felicity of VPE, where antecedents and ellipses were structurally parallel, and elided materials were recoverable (Types 4-5). Why does this asymmetry exist in L2 learners' responses?

Hawkins suggests that these findings are consistent with his claim that interlanguage grammars of adult L2 learners are guided by syntactic knowledge and that this knowledge comes from UG while UG does not provide them with the relevant discourse constraint. Therefore, some L2 learners showed difficulty in integrating discourse information. He argues that this reveals that they have native-like grammatical competence and non-native-like discourse competence and/or difficulty in interface. He also suggests that proficient L2 learners have overcome this difficulty and showed responses similar to native speakers'.

As I mentioned earlier, Hawkins assumes that L2 learners' syntactic knowledge comes from UG. Furthermore, he claims that the inability to integrate discourse information comes from grammatical competence. Whatever elided domain is recoverable, the antecedent and elided material are not the same. That is, the elided material is reconstructed at LF, independent of the syntax. There is no convincing evidence that L2 leaners uniformly complete interpretations at LF. I will discuss this in more detail in the next chapter.

3. Discussion[7]

To summarize D&M's (2009) and Hawkins' (2012) results, (i) the parallelism effect is acquired by some L2 learners independent of their L1 even when English VPE has not been acquired; and (ii) one constraint is easier for L2 learners than another.

D&M practically does not discuss why (i) is observed. They only suggest that L2 learners may rely on non-UG knowledge to acquire the parallelism effect. Hawkins (2012), on the other hand, suggests that UG is available and (ii) is attributable to the difference of the constraints: A syntactic constraint is easier than a semantic/discourse constraint.

First I would like to emphasize that D&M's finding does not imply that UG is not available in SLA; Not only UG but also non-UG knowledge are available to L2 learners. D&M may be correct although what the non-UG constraint reflected on L2 learners' knowledge of parallelism should be answered in further research.

Secondly, I would like to suggest an alternative to Hawkins' (2012) account. Hawkins suggests that Deletion takes place in (24a) as in (24b); In (24c), the deleted item is not

compatible with *was*, hence this is not grammatical as in (24d); and, (24e) is grammatical despite the deleted item appears to be incompatible to constitute a sentence as in (24f).

(24) a. Jack wrote Jill a letter. Mary did ___ too. simple pst … simple pst (=17a)
b. Jack wrote Jill a letter. Mary did [$_{VP}$ ~~write Jill a letter~~] too.
c. *Jack wrote Jill a letter. Mary was ___ too. simple pst …past prog (=18b)
d. *Jack wrote Jill a letter. Mary was [$_{VP}$ ~~writing Jill a letter~~] too.
e. Jack wrote Jill a letter. Mary has ___ too. simple pst … pres perf (=17b)
f. Jack wrote Jill a letter. Mary has [$_{VP}$ ~~written Jill a letter~~] too.

Hawkins, adopting Rouveret (2010), suggests that *has* in (24e, f) has only uninterpretable [perfective] feature. Detailed discussion aside (see Hawkins, 2012 for details), Hawkins suggests that L2 learners find it difficult to judge (24e) as a grammatical sentence because the uninterpretable [perfective] feature is extremely difficult to acquire, because uninterpretable feature is subject to maturation, as suggested in the Interpretability Hypothesis (Tsimpli& Dimitrakopoulou, 2007).

However, it is a question whether VPE is best analyzed as PF deletion (Merchant, 2001) or as LF copying (Williams, 1977). An unpronounced structure exists at the ellipsis site in both analyses but there is an unpronounced structure at the ellipsis site throughout the entire derivation in PF deletion while this is not the case in LF copying (Merchant, to appear). I suggest that LF copying takes place in VPE in native speakers' grammar rather than PF deletion.

The LF copying analysis explains both (24a) and (24b) correctly, because the full structure of the second clause in these sentences are constructed after spell-out. I suggest that (2c) is ungrammatical because *wrote Jill a letter* is incompatible with *was*, so that copying cannot take place while the same item can be copied after *has* in (2e). This difference is attributed to the difference in the semantic features associated with *was* and *has*: The former has [copula / progressive] feature while the latter has [perfect], and [perfect] is compatible with [past] in the sense that E is before S in the sense of Reichenbach (1947).

I suggest that L2 learners' interlanguage grammar adopts PF deletion at an early stage of development, given both PF deletion and LF copying are available in UG. PF deletion is easier to acquire in SLA because (i) there are plenty of input such as (24a) than those, such as (24c), which requires LF construction and (ii) SLA is PF-oriented as suggested in Wakabayashi

(1997)[8]. L2 learners expose themselves to relatively rare input that requires LF copying such as (24c) and acquire this rule when their grammar allows this operation probably when they are aware that features [perfective] and [past] are compatible in LF copying. Whether PF deletion is not used any longer when L2 learners have acquired LF copying is open to further research.

It may appear that my suggestion is practically the same as that in Hawkins (2012) but in fact it is not. I suggest that interlanguage grammar adopts one rule at an earlier stage and another at a later stage, by which the development is described as "development of syntactic knowledge. In Hawkins, it is not clear that how learners acquire the "uninterpretable" [perfective] feature, which is not directly relevant to the principle of recoverability (Rouveret, 2010). Note that there are some learners who successfully rejected (24c) and accepted (24e) in Hawkins (2012). If uninterpretable features are subject to maturation as suggested in Tsimpli and Dimitrakopoulou (2007), this feature should not be acquirable.

4. Conclusion

Two recent papers examining VPE have been reviewed in this paper. Duffield and Matsuo (2009) investigated whether L2 learners of English are sensitive to parallelism violation, and they showed that even L2 learners whose L1 lacks VPE are sensitive to the parallelism effect in VPE. I pointed out limitations that include (i) the sensitivity of parallelism effect does not directly lead to knowledge of VPE construction, and (ii) participants might reject non-parallel pairs because the sentence lacks a VP, independent of the parallelism. Hawkins (2012) examined L2 learners' knowledge of syntactic and discourse properties of ellipsis. Results showed that L2 learners of English were as sensitive to syntactic constraints on VPE as native speakers. However, they did not distinguish the felicity of VPE at an early stage. Hawkins concludes that L2 learners' syntactic knowledge of VPE is guided by syntactic knowledge that comes from UG. As for L2 learners' inability to distinguish the felicity of VPE, he argues that that is an aspect of grammatical competence. I noted that the properties at LF must be discussed.

In section 3, I suggested an alternative to Hawkins's (2012) explanation: L2 learners grammar allow PF deletion at an early stage, and LF reconstruction is available at a later stage when they become aware that [past] and [perfective] are semantically compatible. Since the elided component is invisible or inaudible, if an L2 learner whose L1 lacks VPE can uniformly interpret it as well as a native speaker, then it would strongly suggest that there are universal rules even at LF. Thus, I propose that VPE is worth investigating further to clarify the

component of LF.

Notes

[1] Although D&M (2009) only deals with the discussion between Otani & Whitman (1991) and Hoji (1998), it is important to note that some researchers (Kim, 1999; Oku, 1998; Saito, 2004a; 2004b; 2007, Takahashi, 2006; 2008a; 2008b, among others) argues that the ellipsis phenomenon in Japanese is best analyzed as argument ellipsis.

[2] The sentences (10a, b) used in D&M do not sound natural in Japanese probably because D&M wanted to make the sentence literally equivalent to English ones, because of the lack of 'characterization of the subject by passive' (cf. Kuno, 1973), and the parallel effects are in fact not the same when we make more natural sentences, and in fact neither passive nor nominal antecedents are allowed for VPE as in (i) and passive antecedent is acceptable while nominal antecedent is not in VPA as in (ii):

(i) a. *Sono youna jinbutsu wa imashime-rare-nakereba-naranakatta ga, daremo sitaku nakatta.*
such person-$_{TOP}$ admonish-$_{PASS}$–have-to-$_{PST}$ but no-one-$_{TOP}$ do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"??Such person had to be admonished, but no one didn't want to."

b. **John-wa kyuukei ga hosikatta ga, daremo shitaku nakatta.*
John-$_{TOP}$ a-break-$_{NOM}$ want-$_{PST}$ but no-one-$_{TOP}$ do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"*John wanted a break, but no one didn't want to."

(ii) a. ?*Sono youna jinbutsu wa imashime rare nakereba naranakatta ga, daremo soo sitaku nakatta.*
such person-$_{TOP}$ admonish-$_{PASS}$–have-to-$_{PST}$ but no-one-$_{TOP}$ so do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
" Such person had to be admonished, but no one didn't want to do it."

b. ?*John-wa kyuukei ga hosikatta ga, daremo soo shitaku nakatta.*
John-$_{TOP}$ a-break-$_{NOM}$ want-$_{PST}$ but no-one-$_{TOP}$ so do-want-$_{NEG\text{-}PST}$
"*John wanted a break, but no one didn't want to do it."

Here, however, I continue to adopt D&M's judgments for the sake of presenting their work as a previous study.

[3] See footnote 2.

[4] See footnote 2.

[5] Reaction time was measured in all cases but was not discussed because of the lack of reliability between parallel and nonparallel antecedents. Thus, they exclusively focused on the judgment data.

[6] Some sentences used in Arregui et al. (2006) are also included in the task. Examples of the types are shown in the following:

(i) a. Parallel VP antecedent
None of the astronomers saw the comet, *but John did.*

b. Antecedent with subject gerund
Seeing the comet was nearly impossible, *but John did.*

c. Antecedent VP with extracted object
The comet was nearly impossible to see, *but John did.*

d. Deverbal negative adjective antecedent
The comet was nearly unseeable, *but John did.*

(Hawkins, 2012: 420, Table 1)

Results were equivalent to Arregui et al. (2006). That is, native speakers rated less perfect in the order of (ia)-(id). Since too many items are considered in Hawkins (2012), I picked up the materials with respect to

syntax and discourse, which are Hawkins's original materials.

[7] I would like to thank Shigenori Wakabayashi for his insightful comments and feedback.

[8] Wakabayashi (1997) suggests that SLA is PF-oriented but first language acquisition is LF-oriented. His suggestion is based on the data where free morphemes are acquired earlier than bound morphemes, and strictly speaking, Wakabayashi (1997) does not imply what is suggested here. However, the basic assumption is the same: L2 learners, given matured knowledge of the world, are good at interpreting syntactic constituents at LF (and post-LF), and they have difficulty in acquiring certain grammar that has effects in LF with no effects in PF. For details, readers are referred to Wakabayashi (1997).

References

Cyrino, S., & Matos, G. (2005). Local licensers and recovering in VP ellipsis. *Journal of Portuguese Linguistics, 4*, 79–112.

Duffield, N. & Matsuo, A. (2009). Native-speakers' vs. L2 learners' sensitivity to parallelism in VP-ellipsis. *Studies in Second Language Acquisition* 31, 1-31.

Eubank, L. (1991). *Point-Counterpoint: Universal Grammar in the Second Language*, Amsterdam: John Benjamins.

Hankamer, J., & Sag, I. (1976). Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry, 7*, 391-428.

Hawkins, R. (2012). Knowledge of English verb phrase ellipsis by speakers of Arabic and Chinese. *Linguistic Approaches to Bilingualism* 2, 404–438.

Hoji, H. (1998). Null Object and Sloppy Identity in Japanese. *Linguistic Inquiry* 29:127-152.

Kim, S. (1999). Sloppy/Strict Identity, Empty Objects, and NP Ellipsis. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255-284.

Kuno, S. (1973). *The Structure of Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.

Lobeck, A. (1995). *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification.* Oxford University Press.

Lopez, L. (1994). The syntactic licensing of VP-ellipsis: A comparative study of Spanish and English.In M.L.Mazzola (Ed.), *Issues and theory in Romance linguistics: Selected papers from the linguistic symposium on Romance languages XXIII*, 333-354. Washington, DC: George- town University Press.

Merchant, J. (2001). *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.

Merchant, J. (to appear). Ellipsis. In *Syntax: An international handbook of contemporary syntactic research*, ed. by Kiss, T. and Alexiadou, A. Berlin: Walter de Gruyter.

Oku, S. (1998) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

Otani, K., & Whitman, J. (1991) V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22:345-358.

Reichenbach, H. (1947). *Elements of symbolic logic*. New York: The Free Press.

Rizzi, L. (1990). *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

Rouveret, A. (2010). VP ellipsis, phases and the syntax of morphology. Unpublished ms. Université Paris-7, Denis Diderot.

Saito, M. (2004a). Ellipsis and pronominal reference in Japanese clefts. *Studies in Modern Grammar* 36: 1-44.

Saito, M. (2004b) Genitive subjects in Japanese: Implications for the theory of null objects. Peri Bhaskararao & Karumuri Venkata Subbarao, eds., *Non-nominative Subjects: Volume 2*, Amsterdam: John Benjamins, 103-118

Saito, M. (2007). Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43, 203-227.

Schwartz, B. & Sprouse, R. (1994). Word order and nominative case in nonnative language acquisition: a longitudinal study of (L1 Turkish) German interlanguage. In Hoekstra, T. and Schwartz, B.D., editors, *Language acquisition studies in generative grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

——. (1996). L2 cognitive states and the full transfer/full access model. *Second Language Research 12*, 40-72.

Takahashi, D. (2006). Apparent parasitic gaps and null arguments in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 1-35.

Takahashi, D. (2008a). Quantificational null objects and argument ellipsis. *Linguistic Inquiry39*, 307-326.

Takahashi, D. (2008b). Noun phrase ellipsis. In S. Miyagawa and M. Saito (eds.), *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 394-422. Oxford: Oxford University Press.

Tanenhaus, M.,& Carlson,G.N.(1990).Comprehension of deep and surface verbphraseanaphors. *Language and Cognitive Processes*, *5*, 257–280.

Tsimpli, I.M., & Dimitrakopoulou, M. (2007). The interpretability hypothesis: Evidence from *wh*-interrogatives in second language acquisition. *Second Language Research*, *23*, 215–342.

Vainikka, A. & Young-Scholten, M. (1994). Direct access to X'-Theory: Evidence from Korean and Turkish adults learning German. In Hoekstra, T. and Schwartz, B. D. (Eds.), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar* (pp. 265-316). Amsterdam: John Benjamins.

——. (1996a). Gradual development of L2 phrase structure. *Second Language Research* 12, 7–39.

——. (1996b). The early stages in adult L2 syntax: Additional evidence from Romance speakers. *Second Language Research*, 12**,** 140–176

Wakabayashi, S. (1997). The acquisition of functional categories by learners of English. Unpublished PhD Dissertation, University of Cambridge.

——. (2002).The acquisition of non-null subjects in English: a minimalist account. *Second Language Research* 18, 28–71.

Williams, E. (1977). Discourse and Logical Form. *Linguistic Inquiry* 8, 101-139

Wu, H-H. (2002). On Ellipsis and Gapping in Mandarin Chinese, Master Thesis, National Tsing Hua University.

中央大学文学部英米文学会会則

昭和 57.11.18
改正平成 2.5.11
改正平成 16.5.11

（名 称）
第 1 条　本会は中央大学文学部英米文学会（略称、中大英米文学会）と称する。
（目 的）
第 2 条　本会は英米の文学・語学、および関係諸学科の研究ならびに研究発表を行い、会員相互の親睦交流を図ることを目的とする。
（事 業）
第 3 条　本会は前条の目的を達成するために研究会、講演会、親睦会等を開催し、機関誌を随時発行する。
（会員資格）
第 4 条　本会は中央大学文学部英語文学文化専攻の専任教員、学部・大学院の在学生および卒業生を会員とする。
（会 費）
第 5 条　本会の会費は無料とする。なお、会計年度は 4 月 1 日にはじまり、翌年の 3 月 31 日をもって、おわるものとする。
（役 員）
第 6 条　本会は役員として、会長 1 名、教員幹事 1 名、大学院生幹事若干名、学部学生幹事若干名、卒業生幹事若干名をおく。
第 7 条　会長は教員の中から幹事会が推薦し総会で承認する。
第 8 条　教員幹事は教員会員の中から互選する。
第 9 条　大学院生幹事は大学院生会員の中から互選する。
第 10 条　学部学生幹事は学部学生会員の中から互選する。
第 11 条　卒業生幹事は卒業生会員の中から互選する。
第 12 条　幹事は幹事会を組織して、会務を執行する。
第 13 条　役員の任期は 1 年とする。ただし再任をさまたげない。
第 14 条　幹事は次の事務を分担する。　1. 庶務 2. 会計 3. 渉外 4. 編集
（総 会）
第 15 条　本会は年一回総会を開く。総会は会長が招集する。
第 16 条　総会において幹事は前年度の事業報告および会計報告、またその年度の事業計画および予算案を発表する。
（議 決）
第 17 条　総会の議決は出席会員の過半数をもって成立する。
第 18 条　本会の会則の変更は総会の議を経なければならない。
第 19 条　本会は事務所を中央大学文学部英語文学文化共同研究室におく。
第 20 条　本会則は昭和 57 年 11 月 18 日から施行する。

英語文学文化専攻専任教員

青木　和夫	（あおき　かずお）	大田　美和	（おおた　みわ）
オニキ ユウジ	（おにき　ゆうじ）	河西　良治	（かさい　りょうじ）
兼武　道子	（かねたけ　みちこ）	小林　恵昭	（こばやし　よしあき）
高尾　直知	（たかお　なおちか）	丹治　竜郎	（たんじ　たつろう）
中尾　秀博	（なかお　ひでひろ）	堀田　隆一	（ほった　りゅういち）
藤平　育子	（ふじひら　いくこ）	John Matthews	（ジョン マシューズ）
若林　茂則	（わかばやし　しげのり）		

編集後記

本号では、二名の教員による査読審査を経て、五編の学部卒業論文と一編の大学院論文が掲載された。多岐に渡る研究成果の提供の場として本誌が活用され、本専攻が研究面において発展していくことを願う。

（編集一同）